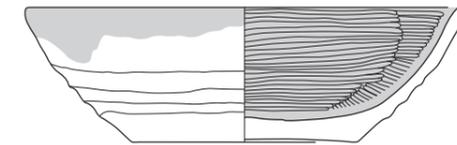


小原遺跡

（第40地点第2次）

—区画道路6-51号線道路改良及び造成並びに
流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2020

水戸市教育委員会

小原遺跡

(第 40 地点第 2 次)

—区画道路 6-51 号線道路改良及び造成並びに
流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2020

水 戸 市 教 育 委 員 会

ごあいさつ

水戸市の東部に位置する常澄地区には、本書で報告する小原遺跡をはじめ東前原遺跡、梶内遺跡、那賀郡家の別院とも考えられている大申遺跡などの、古墳時代終末期から平安時代にかけて営まれた魅力的な遺跡が数多く存在しています。このことから本地区は、古くから連綿と人々の生活が営まれるとともに、古代律令体制下において重要な地域であったことが判明しつつあります。

一方、常澄地区の一面をなす東前町周辺では、近年の区画整理事業に伴い、周辺に位置する遺跡の様相が大きく変わりつつあり、そのため、本市教育委員会では、東前町周辺に現在も眠っている遺跡の実像を後世へと着実に伝えるため、文化財保護法並びに関係法令に基づき遺跡の保護保存に努めているところです。

さて、このたび実施した発掘調査は、道路改良等の工事に伴う記録保存を目的とした発掘調査であります。広範囲にわたる奈良・平安時代の集落跡を構成する竪穴建物跡や掘立柱建物跡等の遺構とともに、「向珠」や「真布」と墨書きされた土器等の遺物が多数検出され、大変貴重な成果を得る事ができました。

ここに刊行の運びとなりました本書を契機として、かけがえのない貴重な文化財に対する理解や郷土愛を深めていただくとともに、学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたりまして多大なる御理解と御協力を賜りました関係各位に、心から感謝を申し上げます。

令和2年3月

水戸市教育委員会
教育長 志田 晴美

例 言

- 1 本書は、水戸市東前町地内における区画整備事業に伴い実施された小原遺跡（第40地点第2次）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、水戸市教育委員会の指導のもと、株式会社東京航業研究所が行った。
- 3 調査の概要および調査体制は下記のとおりである。

所在地	茨城県水戸市東前町 1034-3 ほか
調査面積	332.61 m ²
調査期間	令和元年9月27日 から 令和元年11月19日 まで
調査指導	新垣 清貴（水戸市教育委員会）
調査担当者	根田 洋平（株式会社東京航業研究所）
調査参加者	[発掘調査] 黒田浩一・鈴木良卓・久保木きよ子・平根幸子・寺門節子・ 寺門嘉津子・栗原昌子・和田美帆・高久照美 [測量・空撮] 八島大介・川下由光・奈治原亮年・大久保聡・高田拓郎 [整理調査] 斉藤雅司・村井建三・竹内あい・田上達恵・持田つる子・羽鳥久子・ 稲毛あゆみ・東條高士・柳澤美樹
事務局	川口 武彦（埋蔵文化財センター所長） 米川 暢敬（埋蔵文化財センター主幹） 新垣 清貴（埋蔵文化財センター主幹） 廣松 滉一（埋蔵文化財センター文化財主事） 太田 勇陽（埋蔵文化財センター文化財主事） 丸山優香里（埋蔵文化財センター嘱託員） 松浦 史明（埋蔵文化財センター嘱託員） 外山 綾乃（埋蔵文化財センター嘱託員） 昆 志穂（埋蔵文化財センター嘱託員） 有田 洋子（埋蔵文化財センター嘱託員）

- 4 本書は、根田、新垣が分担して執筆し、新垣の助言・指導に基づき根田が編集した。文責はそれぞれの文末に明記した。また、今回出土した墨書土器について、大東文化大学の宮瀧交二博士より玉稿を賜り、第4章に掲載させて頂いた。
- 5 本書に掲載した写真の撮影は、現場写真は根田が、空撮写真は根田の指示の下で株式会社東京航業研究所スタッフが、遺物写真は根田の指示の下で村井が行った。
- 6 出土遺物及び図面・写真などの記録類は、報告書刊行後一括して水戸市埋蔵文化財センターで保管している。
- 7 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々よりご教示を賜わった。

（敬称略・順不同）

宮瀧 交二・平野 進一・津金澤吉茂・佐々木義則・村山 卓・野尻 義敬・渡邊理伊知・
高橋 直樹

凡 例

- 1 本書で使用した遺構の略号は以下のとおりである。
SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SI：竪穴建物跡 SK：土坑 P：小穴
- 2 測量は国家標準直角座標IX系（世界測地系）に基づいた。挿図中の方位は座標北を示し、土層図及び断面図に記した数値は標高を示す。
- 3 各挿図中にスケールを明示した。また、遺構平面図及び断面図の縮尺は1/30、1/60、1/80を基本とした。
- 4 土層および遺物の色調表現は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）に準拠した。土層説明の中で、混入物の含有量は、1%以下を「極微量」、1～2%を「微量」、2～5%を「少量」、5～10%を「中量」、10%以上を「多量」とした。いずれも同書の「粒状構造」、「面積割合」を参照している。
- 5 掲載した出土遺物は全て各遺物観察表に記載し、図化し得た遺物の実測図は各挿図に、撮影した遺物の写真は各図版に示した。
- 6 遺物実測図は1/3の縮尺で掲載し、各図にスケールを明示した。
- 7 遺物写真の縮尺は、約1/3である。
- 8 遺物番号は、実測図、観察表、写真図版で共通の番号とした。
- 9 遺物観察表の法量の表記は、寸法を「cm」で示し、（ ）内を復元値、〈 〉内を残存値とした。
- 10 出土遺物集計表の中で、接合したものは1点とし、同一個体でも接合できないものは各々を1点として集計した。また、重量の単位は「g」で示した。
- 11 表紙に使用した図は、SI05から出土した墨書土器（第24図1・図版7-1-1）で、縮尺は1/2である。
- 12 引用・参考文献は、一括して文末に記載した。
- 13 挿図中で使用した線種・トーンの表示は以下のとおりである。

凡例図

遺構		…焼土		…粘土		…攪乱範囲
遺物		…煤		…黒色処理		…須恵器断面

目 次

ごあいさつ

例言・凡例・目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 小原遺跡における既往の調査	8
第3章 調査の成果	13
第1節 基本層序	13
第2節 検出した遺構と遺物	13
第1項 A区	13
第2項 B区	20
第3項 C区	45
第4項 D区	47
第4章 小原遺跡出土の墨書土器について	53
第5章 総 括	55

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第1図 調査区位置図	2	第22図 SI05 遺物出土分布図	32
第2図 周辺遺跡分布図	4	第23図 SI05 竈 平・断面図	33
第3図 小原遺跡における 既往の調査地点位置図	8	第24図 SI05 出土遺物(1)	34
第4図 調査区および遺構配置図	11・12	第25図 SI05 出土遺物(2)	35
第5図 基本層序	13	第26図 SI05 出土遺物(3)	36
第6図 A区全体図	13	第27図 SD02 平・断面図	38
第7図 A区土坑 平・断面図(1)	16	第28図 SD02 出土遺物	39
第8図 A区土坑 平・断面図(2)	17	第29図 B区小穴 平・断面図(1)	42
第9図 A区小穴 平・断面図	18	第30図 B区小穴 平・断面図(2)	43
第10図 A区出土遺物	19	第31図 B区遺構外出土遺物	44
第11図 B区全体図	20	第32図 C区全体図	45
第12図 SB01 平・断面図	21	第33図 SD01 平・断面図	46
第13図 SI02 平・断面図	22	第34図 C区小穴 平・断面図	46
第14図 SI02 出土遺物	23	第35図 D区全体図	47
第15図 SI03 平・断面図	24	第36図 SI01 平・断面図	48
第16図 SI03 出土遺物	25	第37図 SI01 小穴 平・断面図	49
第17図 SI04 平・断面図	26	第38図 SI01 竈 平・断面図	49
第18図 SI04 竈 平・断面図	27	第39図 SI01 出土遺物	50
第19図 SI04 出土遺物	28	第40図 墨書土器	54
第20図 SI05 平・断面図	30	第41図 主な出土遺物の変遷	56
第21図 SI05 小穴 平・断面図	31	第42図 主要遺構変遷図	57

表目次

第 1 表	主要な周辺遺跡一覧 (1) 4	第 9 表	SI05 出土遺物観察表 (1) 36
第 2 表	主要な周辺遺跡一覧 (2) 5	第 10 表	SI05 出土遺物観察表 (2) 37
第 3 表	小原遺跡における 既往の調査地点一覧 (1) 9	第 11 表	SD02 出土遺物観察表 39
第 4 表	小原遺跡における 既往の調査地点一覧 (2) 10	第 12 表	B 区小穴出土遺物観察表 43
第 5 表	A 区出土遺物観察表 19	第 13 表	B 区遺構外出土遺物観察表 44
第 6 表	SI02 出土遺物観察表 23	第 14 表	SI01 出土遺物観察表 50
第 7 表	SI03 出土遺物観察表 25	第 15 表	出土遺物集計表 (1) 51
第 8 表	SI04 出土遺物観察表 29	第 16 表	出土遺物集計表 (2) 51
		第 17 表	出土遺物集計表 (3) 52
		第 18 表	出土遺物集計表 (4) 52

図版目次

図版 1	1 - 1 調査区遠景 (南西から 手前は B 区)		
	1 - 2 調査区全景 (上が北) - 合成写真		
図版 2	2 - 1 A 区全景 (北西から)	2 - 2	B 区全景 (北から)
図版 3	3 - 1 SB01 全景 (西から)	3 - 2	SI02 断面 (南西から)
	3 - 3 SI02 完掘 (西から)	3 - 4	SI02 掘方 (西から)
	3 - 5 SI03 完掘 (南西から)	3 - 6	SI03 掘方 (南から)
	3 - 7 SI04 竈 (東から)	3 - 8	SI04 竈断面 (東から)
図版 4	4 - 1 SI04 掘方 (西から)	4 - 2	SI05 床面遺物出土 (南東から)
	4 - 3 SI05 竈 (東から)	4 - 4	SI05 完掘 (南から)
	4 - 5 SD02 遺物出土 (東から)	4 - 6	SD02 完掘 (東から)
	4 - 7 SI04・05 完掘 (南から)	4 - 8	TP1 (南から)
図版 5	5 - 1 C 区全景 (南東から)	5 - 2	SI01 全景 (南から)
図版 6	6 - 1 SK09・11・12・A 区遺構外出土遺物	6 - 2	SI02 出土遺物
	6 - 3 SI03 出土遺物	6 - 4	SI04 出土遺物
図版 7	7 - 1		SI05 出土遺物
図版 8	8 - 1 SD02 出土遺物	8 - 2	B 区小穴出土遺物
	8 - 4	8 - 3	B 区遺構外出土遺物
			SI01 出土遺物

第 1 章 調査に至る経緯と調査の経過

第 1 節 調査に至る経緯

平成 30 年 12 月 14 日付けで、土地区画整理事業に伴い、水戸市長 高橋靖（都市計画部市街地整備課東前地区開発事務所扱（以下「事業課」という。））から、水戸市東前町 1034- 3 から 1039- 1 地内（以下「道路部分」という。）並びに令和元年 5 月 8 日付けで 1034- 3 ～ 1060・1038- 1 ～ 1039- 1 地内（以下「宅地造成部分」という。）について水戸市教育委員会（以下「市教委」という。）教育長あて、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」（東開第 292 号）・（東開第 49 号）の照会があった。

照会地はいずれも、周知の埋蔵文化財包蔵地「小原遺跡」に該当していることから、市教委は事業計画に基づき、令和元年 5 月 14 日から令和元年 5 月 17 日にかけて道路部分及び宅地造成部分の試掘・確認調査を実施した（小原遺跡第 40 地点第 1 次）。なお、道路部分については、用地未買収の箇所が残ることから、用地買収が行われている箇所のみ試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の分布を確認した。

今般の事業計画と調査成果を照らし合わせたところ、道路部分については「茨城県埋蔵文化財発掘調査等取扱い基準」原則Ⅲ「恒久的構造物の設置により相当期間にわたり埋蔵文化財と人との関係が絶たれ、当該埋蔵文化財が破損したに等しい状態となる場合」に該当するものと判断され、宅地造成地部分については伐根が伴うことから、市教委は、その保存のあり方について事業主である事業課と協議を進めたが、工事による埋蔵文化財への影響は不可避であるとの結論に達した。従って今般の土木工事にあたっては、埋蔵文化財が確認された範囲を中心に記録保存を目的とした本発掘調査が必要であるとし、事業主から提出のあった文化財保護法第 94 条第 1 項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」を令和元年 5 月 22 日付け茨城県教育委員会（以下「県教委」という。）教育長あて進達した（教理第 1164 号（道路部分））。宅地造成地部分については令和元年 5 月 24 日付け教理第 196 号にて進達した。この通知に対し、県教委教育長から道路部分については令和元年 6 月 6 日付け文第 684 号にて、宅地造成地部分についても令和元年 6 月 10 日付け文第 722 号にて工事着手前に発掘調査を実施すること、調査の結果重要な遺構が確認された場合にはその保存について別途協議を要する旨の指示・勧告があった。

これを受けて、市教委は工事対象地のうち、埋蔵文化財が確認された道路部分・宅地造成地部分の面積 465 m²を調査対象とし、事業課及び株式会社東京航業研究所と市教委の間で三者協定書を締結し、令和元年 9 月 27 日から令和元年 11 月 19 日の期間に本発掘調査を実施する事とした。（新垣）

第2節 調査の方法と経過

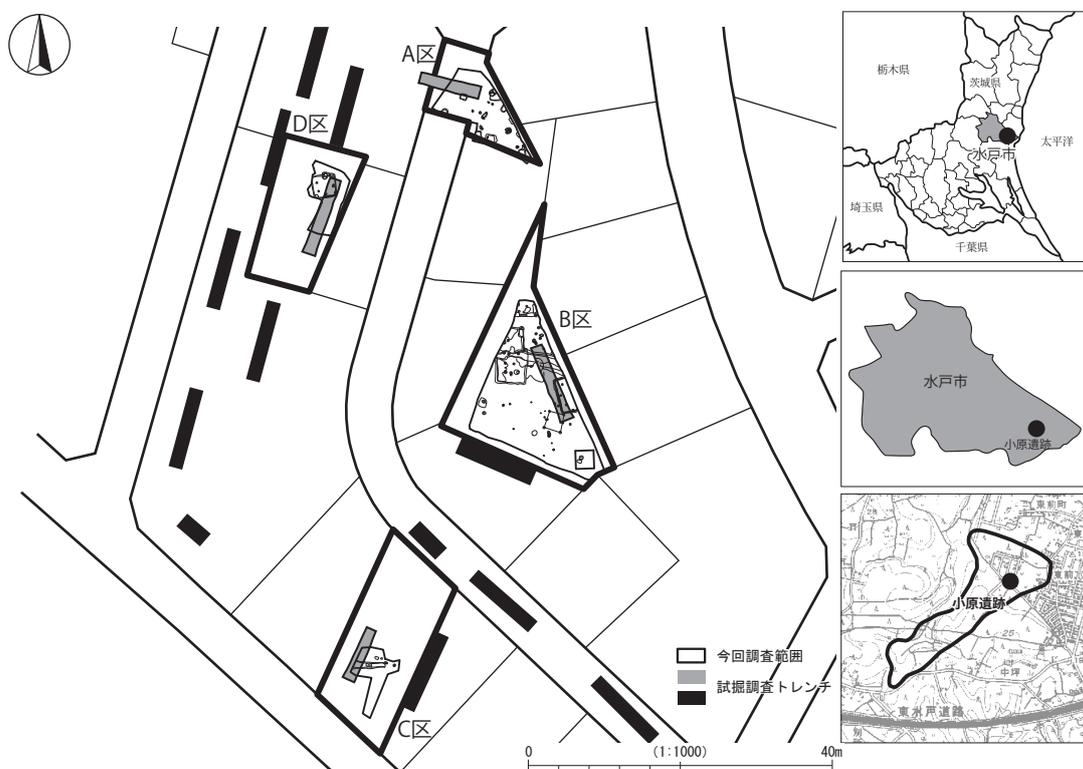
発掘調査範囲は市教委の試掘調査結果に基づき設定した。

当該地点では区画整理事業に伴う造成工事が予定されており、便宜上、調査区を北から時計回りにA～D区の4区に区分した。市教委との協議の結果、精査範囲は遺構密度の濃い箇所を中心に定めた。調査は開発工事の工程に合わせ、A区→C区→B区・D区の順に実施し、各遺構番号は調査順に付して、種別毎に連番とした(第1・4図)。

現地調査は、令和元年9月27日から同11月19日にかけて実施した。重機による表土掘削の後、人力による遺構検出および精査を行い、デジタルカメラを用いた写真撮影、筆記による遺構実測図作成、光波測距機による遺構記録作成、ドローンによる空中写真撮影等を実施した。

調査期間中に発生した、台風19号による大規模豪雨の影響を少なからず受け、冠水・滞水などの被害を受けたが、表土掘削は9月28日に、A区完掘は10月3日に、C区完掘は10月9日に、D区完掘は11月7日に、B区完掘は11月18日に完了し、11月19日に市教委による調査終了確認を受けて現地調査を終了した。

整理・報告書作成作業は、現地調査終了後速やかに着手し、令和2年3月中に完了した。
(根田)



第1図 調査区位置図 (1/1,000)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

小原遺跡は、茨城県水戸市茨城県水戸市東前町・栗崎町・大場町に亘って所在する（第1・2図）。茨城県中央部に位置する水戸市は、北は那珂市と東茨城郡城里町に、南は東茨城郡茨城町に、東はひたちなか市および東茨城郡大洗町に、西は笠間市にそれぞれ隣接している。八溝山地の南端に連なる朝房山は、概ね笠間市との境を成して西へと勾配を上げ、北流する涸沼川が大洗町との東境を画している。市域の大部分は、那珂川右岸に展開する沖積低地と東茨城台地が占める。流通の面では、涸沼川を含む那珂川水系流域の水運と太平洋海運、南関東から東北地方に至る南北の陸上交通と、両毛地方に向かう東西の動線が各々接続し、必然的に水戸市を要衝の地たらしめている。

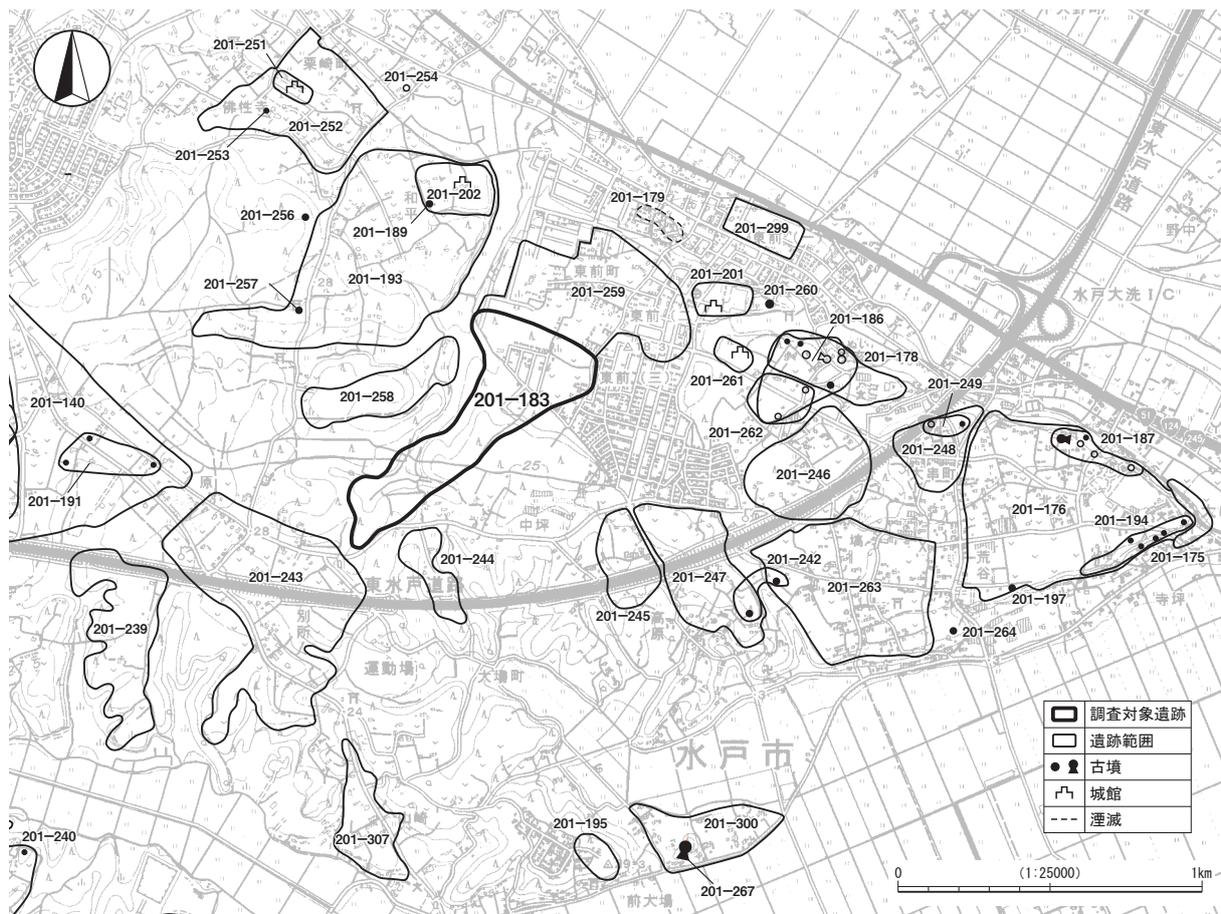
小原遺跡は水戸市の南東端に位置する常澄地区に所属する。概ね北東―南西軸で、令和2年現在で、長軸約1 km、短軸約0.5 kmの包蔵地範囲に及ぶ。台地上の遺跡で、標高は凡そ17 mから30 mを測り、山林と耕作地が主体を占めている。常澄地区は、那珂川と涸沼川によって開析された東茨城台地および縁辺の沖積低地の東端を占め、美田の広がる穀倉地帯として知られている。国道51号の整備と、それに並走する鹿島臨海鉄道大洗鹿島線、北関東自動車道に接続する東水戸道路の開通などにより、交通のアクセスが良い。東前地区が市街化区域に指定された事による宅地化の動きが急速に進み、近年遺跡周辺の景観を大きく変化させている。

第2節 歴史的環境

小原遺跡が立地する東茨城台地には、縄文時代から近世に至る数多くの遺跡が密集している。以下に、小原遺跡周辺の遺跡群と歴史的環境を概観する（第2図、第1・2表）。

先土器時代 先土器時代から縄文時代草創期にかけての資料が、森戸古墳群第12号墳（大六天古墳）の発掘調査で報告されている。チャート・メノウ製の石器群の大部分は墳丘盛土や周隍からの出土だが、剥片が1点、周隍底面のロームから出土している。また、その西側の元石川大谷原遺跡では、ガラス質黒色安山岩の剥片が出土している。他には、水戸市百合が丘、下入野町地内等でガラス質黒色デイサイトや硬質頁岩製の神子柴型尖頭器が採集されている。

縄文時代 縄文時代の遺跡としては、前期の貝塚として著名な大串貝塚が挙げられよう。『常陸國風土記』に記載が見られ、文献に記載されたものとしては世界最古の貝塚として、巨人伝説とともに知られている。一部が国指定史跡で、質・量ともに豊富な出土資料は、当該期の貝塚として県下随一と言える。中期から後期にかけては、下畑遺跡の加曽利E式、大木8 b式期の竪穴建物跡や、複式炉を有する住居跡などが確認されている。



第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第1表 主要な周辺遺跡一覧 (1)

番号	名称	所在地	種別	遺物	備考
201-141	雁沢遺跡	元石川町	集落跡	縄文土器, 弥生土器, 土師器 (古)	一部湮滅
201-175	大串貝塚	塩崎町	貝塚	縄文土器 (前・後), 石製品, 貝刃, 釣針, 刺突具	一部国指定
201-176	大串遺跡	塩崎町	集落跡	縄文土器 (前・後), 土師器 (古・奈・平), 須恵器 (奈・平), 瓦 (奈・平), 灰釉陶器	
201-178	向山遺跡	大串町	集落跡	土師器 (古)	
201-179	東前遺跡	東前町	集落跡		湮滅
201-183	小原遺跡	東前町	集落跡	弥生土器 (後), 土師器 (古・奈・平), 須恵器 (奈・平)	今回調査
201-185	薄内遺跡	六反田町	集落跡	剥片 (先), 縄文土器 (早~後), 弥生土器, アメリカ式石鏃 (弥)	
201-186	金山塚古墳群	大串町	古墳群	形象埴輪	一部湮滅
201-187	大串古墳群	大串町	古墳群	五獣鏡, 銅環, 直刀, 鉄鏃, 壺鏡, 素環鏡板付轡	
201-193	上平遺跡	栗崎町	集落跡	土師器 (古・奈・平), 須恵器 (奈・平)	
201-194	長福寺古墳群	塩崎町	古墳群		
201-195	涸沼台古墳群	大場町	古墳群		
201-201	椿山館跡	東前町	城館跡		

第2表 主要な周辺遺跡一覧(2)

番号	名称	所在地	種別	遺物	備考
201-202	和平館跡	栗崎町	城館跡		
201-242	高原古墳群	大場町	古墳群		
201-243	小山遺跡	大場町	集落跡	縄文土器	
201-244	諏訪前遺跡	大場町	集落跡	土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平)	
201-245	沢幡遺跡	大場町	集落跡	土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平), 墨書土器, 円面硯, 紡錘車, 砥石, 鉄鏃, 鉄鎌	
201-246	梶内遺跡	大串町	集落跡	土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平), 刀子, 円面硯, 墨書土器, 陶器, 古銭, 煙管	
201-247	高原遺跡	大串町	集落跡	弥生土器, 土師器・須恵器(奈・平), 土師質土器, 煙管	
201-248	北屋敷遺跡	大串町	集落跡	土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平), 瓦(奈・平), 陶器	
201-249	北屋敷古墳群	大串町	古墳群	形象埴輪, 直刀, 小刀, 鉄鏃	一部湮滅
201-251	伊豆屋敷跡	栗崎町	城館跡		
201-254	フジヤマ古墳	栗崎町	古墳		湮滅
201-258	打越遺跡	栗崎町	集落跡	土師器・須恵器(奈・平)	
201-259	東前原遺跡	東前町	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平)	
201-260	住吉神社古墳	東前町	古墳		神社境内
201-261	大串原館跡	大串町	城館跡		
201-262	大串原遺跡	大串町	集落跡		
201-263	宮前遺跡	大串町	集落跡		
201-267	大場天神山古墳	大場町	古墳	三角縁神獣鏡	湮滅
201-299	上の下遺跡	東前町	包蔵地		

弥生時代 弥生時代については水戸市全域における傾向に変わらず、他時期に比して遺跡は少ないが、台地周辺の東前原遺跡、高原遺跡、雁沢遺跡等で後期の遺物の採集や出土が報告されている。東前原遺跡第8地点では、後期の竪穴建物跡が発見されている。

古墳時代 古墳時代には、在地首長墓と目される大場天神山古墳・森戸古墳群・大串古墳群・北屋敷古墳群・長福寺古墳群・高原古墳群・涸沼台古墳群等が築造され、それらの周辺に集落が展開する。既に湮滅した大場天神山古墳からは、副葬品と推定される三角縁神獣鏡が不時発見されており、県内唯一の当該期の舶載鏡として県指定文化財となっている。前期から中期と想定される森戸古墳群第12号墳(大六天古墳)では、底部穿孔壺や滑石製勾玉が出土している。中期後半から後期にかけては、大串古墳群中の大串稲荷山古墳由来の副葬品と推定される五獣鏡・直刀・鉄鏃・壺鏡・鏡板付轡が知られている。後期の北屋敷古墳群第2号墳からは、円筒埴輪・形象埴輪が多数出土している。ほぼ全身が出土した武人埴輪は、「埴輪武装男子」の名称で市の文化財に指定されている。同じく後期の前方後円墳である森戸古墳群第1号墳では、円筒埴輪や形象埴輪が採集されて

いる。後期から終末期に比定される北屋敷古墳群第1号墳は、礫床切石積みの横穴式石室を持つ円墳で、埴輪を伴わず、直刀や鉄鏃、刀子等の副葬品が出土している。

同時代の集落跡としては、大串遺跡・北屋敷遺跡・薄内遺跡・町付遺跡から多数の前期の竪穴建物跡が検出されているが、中期の竪穴建物跡は北屋敷遺跡で2軒確認されているに過ぎない。後期には小仲根遺跡・元石川大谷原遺跡・梶内遺跡等で6世紀の竪穴建物跡が検出されており、集落が広く展開している様子が窺える。終末期の竪穴建物跡は、梶内遺跡と大串遺跡第7地点で数軒確認されたのみと検出例が少ない。

これら検出例の増減は、土地利用と集落の展開に関する何らかの変動があった事を想定させる。

奈良・平安時代 奈良・平安時代になり律令制が施行されると、水戸市全域が常陸国那賀郡域内に組み込まれていく。那珂郡衙は水戸市渡里町の台渡里官衙遺跡群に比定され、小原遺跡周辺は、『和名類聚抄』に記載された那賀郡二十二郷の内の芳賀郷域内に相当すると考えられている。『常陸國風土記』には「大櫛岡」や「平津駅家」の記述が見出され、前者は芳賀郷内の大串貝塚周辺に、後者は同郡志万郷、現在の市内平戸周辺に比定される。

当該期の小原遺跡の周辺には、大串遺跡・薄内遺跡・上平遺跡・打越遺跡・諏訪前遺跡・沢幡遺跡・梶内遺跡・高原遺跡・北屋敷遺跡・宮前遺跡等の多くの集落跡が認められる。大串遺跡第7地点では、総地業が施された礎石建物跡3棟や、束柱を持つ大型掘立柱建物跡等が検出されている。薬研堀状の大型区画溝に囲まれ、規格的に配置されたこれらの建物群は、前者が正倉、後者が正倉または穎屋と推定され、炭化米や「厨」銘墨書土器の出土と相俟って、官衙として捉えられており、郡衙正倉別院である可能性が指摘されている。梶内遺跡は7世紀から10世紀まで継続する集落跡で、「舎人」「長」「芳」銘墨書土器や、9点もの円面硯が出土しており、同様に官衙的色彩が強い。小原遺跡に隣接する東前原遺跡からは、竪穴建物跡と、集落を圍繞する可能性が考えられる大溝が検出されており、同じく官衙関連集落である可能性が想定される。尚、「東前」は「遠厩」の転訛とされ、前述した「平津駅家」との関連が指摘されている。小原遺跡自体は、主として6世紀から9世紀の集落跡として把握されている。

以上のような遺跡群が集中する様相から、小原遺跡周辺の台地上が古代芳賀郷の中核地域だったことが想定されている。

中世 中世の吉田郡常富郷は、古代の那賀郡芳賀郷に概ね合致する。旧那賀郡吉田郷を中心とした吉田郡は、常陸国三宮である式内社「吉田神社」（現水戸市宮内町に鎮座）の神郡として、10世紀前半には分立している。同社は以後も名神大社に列し、神階を上げるなど、神威を発揚していく。平安時代末期までには吉田社領吉田荘として立券され、領家は小槻氏となるが、在庁官人として勢力伸長を図る常陸大掾氏が郡内に権益を広げていく。

大掾氏支流の石川高幹は、常富郷の地頭に補任され苗字の地とするが、後に得宗家領の代官となって在地支配を強めていったと推定される。以降は盛衰を経ながらも、石川氏が在地領主として常富郷の所領を保ち続けていく。南北朝の争乱から室町時代にかけて、水

戸城を居城として大掾氏が周辺地域を支配していたが、応永 29（1422）年に江戸氏に逐われ、勢力を失う。江戸氏の支配はその後佐竹氏が水戸城を奪取する天正 18（1590）年まで続くことになる。

南北朝時代の暦応 3（1340）年 11 月の公田注文によれば、郷内には大羽・栗崎・塩崎・六反田・石河・森戸・遠厩・大串・入野等の 10 カ村の名前が見られる。栗崎の佛性寺の本堂は八角堂であり、国の重要文化財に指定されている。梁には「立原伊豆守政幹（花押）」「天正十三年三月十一日」の墨書があり、本尊の金銅製大日如来の像背には「常州吉田郡栗崎卅一仏中尊」「文安五年（1448 年）戊辰正月二十二日」等の銘文が刻まれている。六反田の六地藏寺所蔵文書には、延文三（1358）年以前に地藏堂が所在していた事が記されている。いずれも寺伝では、開基は平安時代初期となっているが、中世における当地の様子を伝える文物と言えよう。

当該期の遺跡としては、椿山館跡・和平館跡・大串原館跡の城館跡が所在する。土塁や堀などの施設が残存しているが、いずれも発掘調査は実施されていない。

近世 佐竹氏による常陸一国支配は慶長 7（1602）年に終わりを迎え、同時に武田信吉が 15 万石の水戸城主として入部するが、同 8 年に卒去。替わって徳川頼宣が 20 万の大名として封ぜられる。同 14 年に徳川頼房が 25 万石で転封され、水戸藩が成立する。これ以降、明治維新を迎えるまで水戸徳川家による治政が続くことになる。

近世の常富郷は茨城郡に編入され、小原遺跡周辺は東前村の村域となる。水戸城の外縁部に位置し、村域は東西約 10 町、南北約 15 町で、村高は、寛永 18（1641）年で 335 石 1 斗、元禄年間（1688～1704）で 275 石 4 斗余、天保年間（1830～1844）で 203 石 4 斗余と変動がみられる。『水府志料』（文化 4 [1807] 年）によれば戸数は 30 戸とされる。

藩政初期の慶長 15（1610）年に伊奈忠次によって開削された備前堀は、千波湖を発し、東前村を含む台地縁辺の耕地を潤して洶沼川に合流する。村内には付近 10 カ村の用水池である東前池や、秣場が在り、藩の鷹場や、藩営林である御立山が設定されていた。村内を横断する磯浜街道と大場原街道は、台地の縁辺を通過して水戸と鹿島を結ぶ往還道である。

当該期の遺跡としては、『新編常陸国誌』に記された伊豆屋敷跡が挙げられ、土塁・溝跡等の遺構が発掘調査により確認されている。

近代 廃藩置県により水戸県、後に茨城県に編入された東前村は、明治 22（1889）年に東茨城郡稻荷村に、昭和 30（1955）年に同郡常澄村に、平成 4（1992）年に水戸市に合併した。

近代以降も当該地周辺は純農地帯としての土地利用が主体であり、明治 44（1911）年の統計では、水稻・陸稻・小麦・甘藷・蔬菜類の栽培が盛んな事、畜産では馬の飼育頭数が多い事が看取される。昭和 40（1965）年の常澄村の統計では、耕地率が 64%、農家戸数の割合が 85% を占めている。同 46 年に東前地区が市街化区域に指定されて以来、田園都市としての整備が継続して進められ、現在に至っている。

第3節 小原遺跡における既往の調査

小原遺跡における調査地点は、計45地点を数える(第3図・第3・4表)。多くは個人住宅建築等に伴う試掘調査だが、埋蔵文化財の濃密な分布が確認されている。

本発掘調査は、8地点で実施されている。第3地点で、7～9世紀の竪穴建物跡9棟・掘立柱建物跡2棟と当該期の遺物が検出されている。底部に「宮」と墨書された須恵器の坏が出土している点が注意される。第4地点では、6～9世紀の竪穴建物群が一部重複して検出されており、第4地点に先行・並行する居住地と推定される。9世紀代の竪穴建物跡から出土した「宮」「口厨」銘の墨書土器は、官衙との関連を想起させる。第16地点では、8世紀前半と推定される竪穴建物跡1棟と近世の溝跡1条が検出されており、第17地点では、9世紀代の竪穴建物群が検出されている。以上の調査成果から推測すれば、遺跡範囲の概ね東側と西側に居住地が散在し、中央部分は比較的居住地以外の土地利用がなされているように見受けられる。当該期の集落の展開を示しているように思われるが、推測の域を出ず、今後とも更なる資料の蓄積と検討が必要とされよう。

いずれにせよ、本遺跡は奈良・平安時代における、本地域の中心的な集落遺跡の一つとして位置付ける事ができる。

(根田)



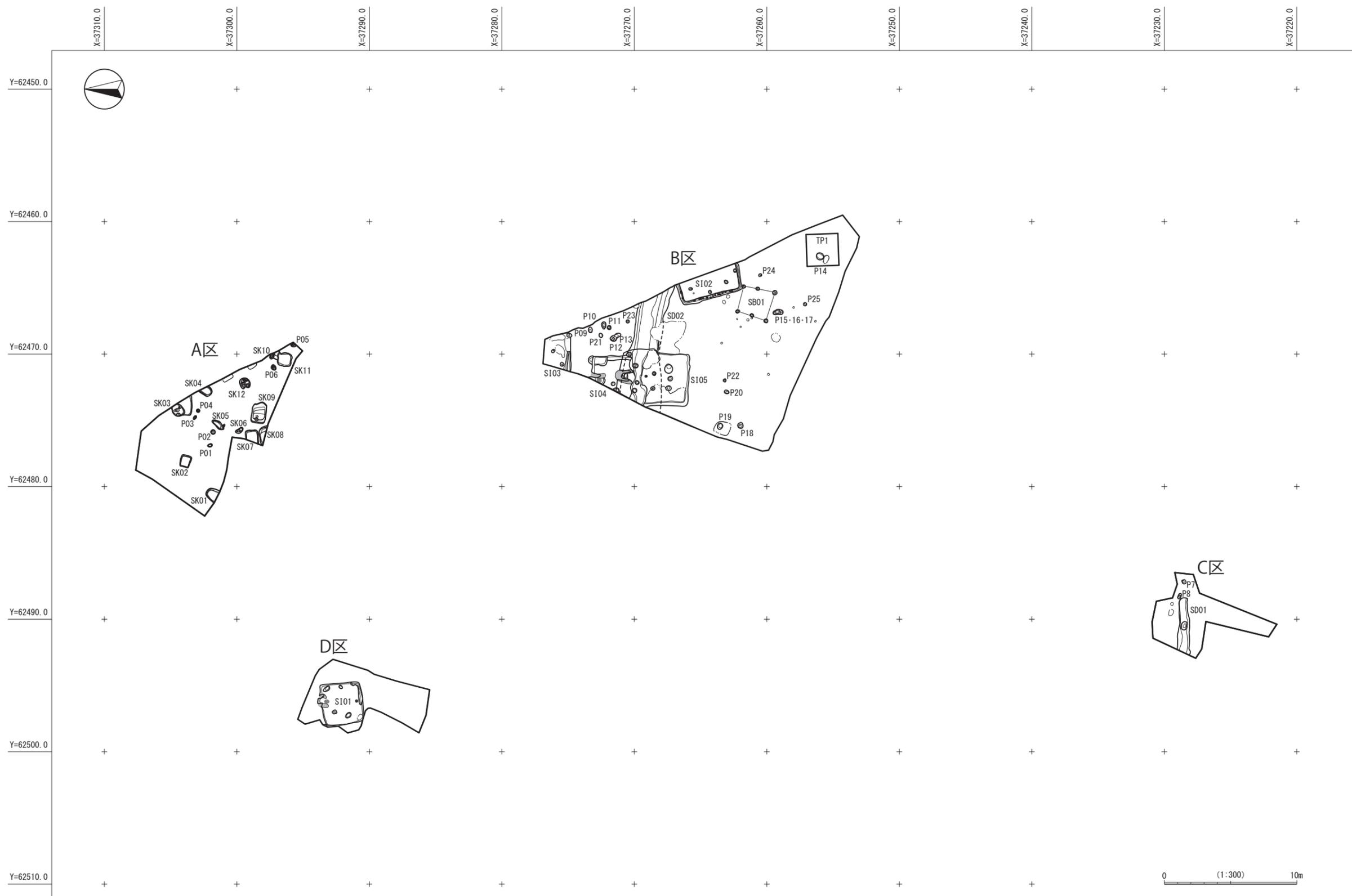
第3図 小原遺跡における既往の調査地点位置図 (1/5,000)

第3表 小原遺跡における既往の調査地点一覧(1)

地点名	回数	調査箇所	調査年月日	種別	調査原因	遺構	遺物	備考
第1地点	1	東前町 1049-4	H24.06.19	試	個人住宅	-	-	
第2地点	1	東前町 1150-3	H25.03.04	試	個人住宅	-	-	
第3地点	1	東前町 1056~1065	H26.06.13 ~19	試	道路整備	○	○	
	2	東前町 1056~1065	H27.01.26 ~02.27	本	道路整備	○	○	水戸市教委2015
第4地点	1	東前第二土地区画整理事業 73 街区 2, 3, 6	H26.07.30	試	集合住宅	○	○	
	2	東前第二土地区画整理事業 73 街区 2, 3, 6	H27.05.14	本	個人住宅	○	○	
第5地点	1	東前第二土地区画整理事業地内 街区 66-20	H26.10.22	試	個人住宅	-	-	
第6地点	1	東前町第二土地区画整理事業 62 街区 10, 11 画地	H30.11.30	試	不動産鑑定	○	○	
	2	東前第二区画整理地 62 街区 3~5	H27.04.23	試	共同住宅	○	○	
第7地点	1	東前町 1150-2, 4	H27.06.03	試	個人住宅	○	○	
第8地点	1	東前第二区画整理地 73 街区 1, 5	H27.07.08	試	土地鑑定	○	○	
	2	東前町 1167-3 (旧地番)	H28.12.14	本	個人住宅	○	○	
第9地点	1	東前第二区画整理地 69 街区 1	H27.07.14	試	土地鑑定	-	○	
第10地点	1	東前第二区画整理地 67 街区 1, 2	H27.08.21	試	老人ホーム	○	○	
第11地点	1	東前第二土地区画整理地 68 街区 17 東前町 1053	H27.10.15	試	個人住宅	-	-	
第12地点	1	東前町字原 1042, 1055	H27.11.10	試	賃貸住宅	-	-	
第13地点	1	東前町第二土地区画整理地 73 街区 7	H27.11.25	試	土地鑑定	○	○	
	2	東前町第二土地区画整理地 73 街区 7	H30.02.26	試	個人住宅	○	○	
第14地点	1	東前町 1150-1	H27.12.01	試	個人住宅	-	○	
第15地点	1	東前第二土地区画整理事業保留地 56 街区 9	H28.02.03	試	個人住宅	-	-	
第16地点	1	東前町 1064, 1065, 1029-8 の各一部	H28.05.12	試	土地区画整理事業	○	○	
	2	東前町 1064, 1065, 1029-8 の各一部	H28.07.25 ~08.08	本	土地区画整理事業	○	○	水戸市教委2016
第17地点	1	東前町 1060, 1062-1	H28.05.13	試	個人住宅	○	○	
	2	東前町 1060, 1062-1	H30.05.23 ~08.07	本	個人住宅	○	○	
第18地点	1	東前町 1062-1	H28.07.21	試	個人住宅	○	○	
第19地点	1	東前町 1038-1, 1039-1, 1060, 1064, 1065, 1067-1, 1072-1, 1073, 1074-1・2, 1135-1	H28.08.16	試	土地区画整理事業	○	○	
	2	東前町 1073 外 13 筆	H28.11.11	本	土地区画整理事業	○	○	
	3	東前町 1072-1 外 3 筆	H28.11.19	本	土地区画整理事業	○	○	
第20地点	1	東前町 1055, 1056 の各一部	H28.12.15	試	個人住宅	○	○	
	2	東前町 1055, 1056 の各一部	H28.02.07	本	個人住宅	○	○	
第21地点	1	東前町 1062-3 (東前第二土地区画整理事業 56 街区符号 12)	H29.03.10	試	個人住宅	○	○	
第22地点	1	東前町 1072-1, 1072-2, 1072-3 の一部	H29.03.22	試	土地区画整理	○	○	
	2	東前町 1066-1 の一部	H29.03.22	試	土地区画整理事業	-	-	
第23地点	1	東前第二土地区画整理事業 66 街区符号 28	H29.06.23	試	個人住宅	○	○	
第24地点	1	東前 1061-1, 1062-1, 1064, 1073	H29.09.13	試	個人住宅	○	○	
第25地点	1	東前町字原 1062-1, 東前第二土地区画整理事業 56 街区 3 画地	H29.09.13	試	個人住宅	○	○	
第26地点	1	東前町字野口前 1153, 1154, 1155, 1156-1 の各一部 (東前第二土地区画整理事業 65 街区 13 画地)	H29.10.13	試	個人住宅	-	-	

第4表 小原遺跡における既往の調査地点一覧(2)

地点名	回数	調査箇所	調査年月日	種別	調査原因	遺構	遺物	備考
第27地点	1	東前町字原 1062-1, 東前第二土地区画整理事業 56 街区 7 号	H29.10.13	試	個人住宅	○	○	
第28地点	1	東前町字原 1073	H29.10.13	試	個人住宅	○	○	
第29地点	1	東前第二土地区画整理事業 62 街区 7 画地	H29.10.31	試	個人住宅	○	○	
第30地点	1	東前町 1064 東前第二土地区画整理事業 56 街区 5 画地	H29.11.14	試	個人住宅	-	○	
第31地点	1	東前町 1173	H30.03.07	試	個人住宅	-	○	
第32地点	1	東前町 56 街区 4 号	H30.04.21	試	個人住宅	-	○	
第33地点	1	栗崎町 2479-19・24	H30.05.18	試	個人住宅	○	○	
第34地点	1	東前 1075-2	H30.08.30	試	個人住宅	○	○	
第35地点	1	東前第二土地区画整理事業 63 街区 9~14 画地	H30.08.30	試	集合住宅	○	○	
	2	東前第二土地区画整理事業 63 街区 8~14 画地	R1.10.01	試/立	賃貸住宅	○	○	
	3	東前第二土地区画整理事業 63 街区 8~14 画地	R1.11.12	立	賃貸住宅	-	○	
第36地点	1	東前 1056-1・2	H30.10.30	試	不動産鑑定	○	○	
第37地点	1	東前町 56 街区 6 画地	H30.10.04	試	個人住宅	○	○	
第38地点	1	東前第二土地区画整理事業 56 街区 11 画地	H30.11.30	試	個人住宅	-	-	
第39地点	1	東前町字野口前 1127-1・2, 1133 (67 街区 3, 4, 18 画地)	H31.04.24	試	個人住宅	-	-	
第40地点	1	東前第二区画道路 6-51 号線	R1.05.14	試	道路	○	○	
	2	東前第二区画道路 6-51 号線	R1.09.27 ~ 11.19	本	道路	○	○	本報告書
第41地点	1	東前第二土地区画整理事業 56 街区 10 画地	R1.06.15	試	個人住宅	-	-	
第42地点	1	東前町 1147-1~5, 1104-1・3, 1105-1, 東前第二土地区画整理事業 65 街区 22~29 画地	R1.09.26	試	建売住宅	○	○	
近接	—	東前町 1068-3・4・1	H24.04.18	試	個人住宅	-	-	
第43地点	1	東前町 1049-1, 1050-2	R1.11.12 ~ 11.13	試	不動産鑑定	○	○	
	2	東前町 1049-1, 1050-2	R2.03.10	立	擁壁設置	○	○	
第44地点	1	東前第二区画整理事業 57 街区 1, 4 画地	R2.01.29	試	個人住宅	-	-	
第45地点	1	東前町字野口前 1137-1, 1140, 1142, 1143-1, 1144, 1145, 1150-1, 1152 (東前第二区画整理事業 66 街区 1 画地)	R2.02.20	試	個人住宅	○	○	
	2	東前町字野口前 1137-1, 1140, 1142, 1143-1, 1144, 1145, 1150-1, 1152 (東前第二区画整理事業 66 街区 1 画地)	R2.03.13	試	個人住宅	○	○	

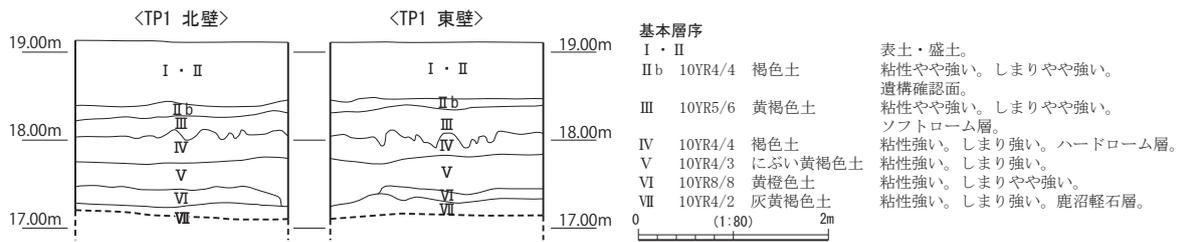


第4図 調査区および遺構配置図

第3章 調査の成果

第1節 基本層序 (第5図, 図版4-8)

当該調査地点では、概ね地表面下0.4～1.0m(標高17.5～18.0m)で遺構確認面に達する。基本層序はB区に設定したTP1の壁断面で観察した。TP1の掘削は、鹿沼軽石層が確認できる遺構確認面下1.3m(標高17.30m)まで実施した。遺構確認面はIIb層に該当する。原地形は概ね北に向かって傾斜している。

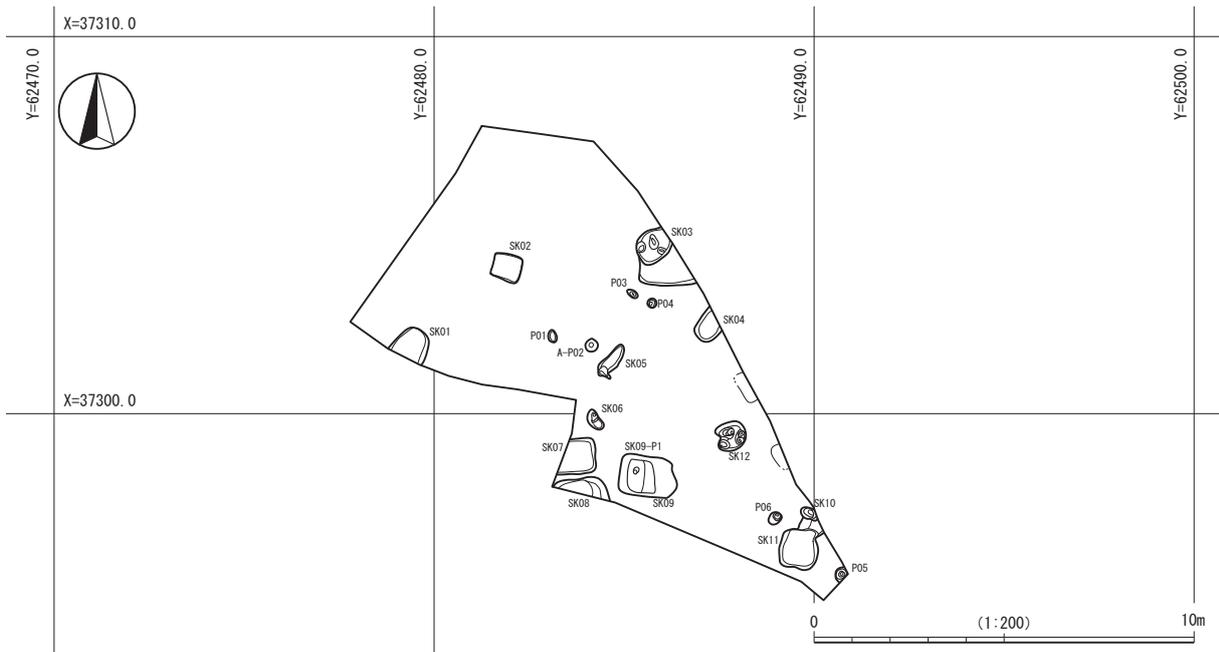


第5図 基本層序

第2節 検出した遺構と遺物

第1項 A区

A区の調査では、地表面下0.4～1.0m(標高17.5～18.0m)で遺構確認を行った。土坑12基(SK01～12)、小穴6基(P01～06)の各遺構を検出したが、今次調査の主体となる奈良・平安時代の集落に関わる遺構の検出はなかった。当該期の遺物が遺構外から少量出土した。



第6図 A区全体図

土坑

SK01 (第7図)

A区西端南壁際で検出した性格不明の土坑。南西側は調査区外に延びる。平面形はN-29°-E軸の楕円形と推定され、規模は長軸0.98m、短軸0.89m、深さは0.16mを測る。断面形は浅い皿形を呈する。壁面の立ち上がりは急で、底面には凹凸が認められる。近・現代の攪乱の可能性が考えられる。

遺物の出土はなかった。

SK02 (第7図)

A区西側で検出した性格不明の土坑。平面形はN-71°-W軸の隅丸方形で、規模は長軸0.76m、短軸0.71m、深さは0.08mを測る。断面形は浅い皿形を呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は筋状の凹凸が認められる。近・現代の攪乱の可能性が考えられる。

SK02からは須恵器の坏片が出土しているが、混入によるものと考えられる。図化するには至らなかった。

SK03 (第7図)

A区南端で検出した性格不明の土坑。平面形はN-83°-E軸の隅丸方形と推定され、東側は調査区外に延びる。規模は長軸0.93m、短軸0.79m、深さは0.19mを測り、断面形は不整形である。壁面は緩やかに立ち上がり、底面には植痕状の凹凸が認められる。植栽痕の可能性が考えられる。

遺物の出土はなかった。

SK04 (第7図)

A区南西隅で検出した性格不明の土坑。SK02に形状が似る。平面形はN-62°-E軸の隅丸方形と推定され、北東側は調査区外に延びる。規模は長軸1.60m、短軸1.51m、深さは0.19mを測り、断面形は浅い皿形を呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、底面にはやや凹凸が認められる。近・現代の攪乱の可能性が考えられる。

遺物の出土はなかった。

SK05 (第7図)

A区中央で検出した性格不明の土坑。平面形はN-37°-E軸の不整形で、規模は長軸0.76m、短軸0.71m、深さは0.08mを測る。断面形は不整形を呈する。壁面の立ち上がりは急で、底面にはやや凹凸が認められる。遺構南側は杭穴状に掘り込まれている。近・現代の攪乱の可能性が考えられる。

遺物の出土はなかった。

SK06 (第7図)

A区中央付近で検出した性格不明の土坑。平面形はN-41°-W軸の楕円形に近く、規模は長軸0.59m、短軸0.30m、深さは0.08mを測る。断面形は不整形を呈する。壁面の立ち上がりは急で、底面は凹凸が認められる。近・現代の攪乱(芋掘り穴)の可能性が

考えられる。

遺物の出土はなかった。

SK07 (第7図)

A区中央南側で検出した性格不明の土坑。SK02・SK04に形状が似る。平面形はN-89°-Eの隅丸方形と推定され、西側は調査区外に延びる。規模は長軸1.03m、短軸0.99m、深さは0.12mを測り、断面形は浅い皿形を呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、底面にはやや凹凸が認められる。近・現代の攪乱の可能性が考えられる。

SK07からは土師器片・須恵器片が出土しているが、混入によるものと考えられる。いずれも図化するには至らなかった。

SK08 (第7図)

A区中央南端、SK07の南隣で検出した性格不明の土坑。SK02・04・06に形状が似る。平面形はN-84°-E軸の隅丸方形と推定され、南側は調査区外に延びる。規模は長軸1.49m、短軸0.71m、深さは0.24mを測り、断面形は皿形を呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸が目立つ。植痕の可能性が考えられる。

SK08からは、土師器の甕片、須恵器の坏片が出土しているが、混入によるものと考えられる。いずれも図化するには至らなかった。

SK09 (第8図, 第5表, 図版6-1-6)

A区南端で検出した性格不明の土坑。平面形はN-86°-W軸の隅丸方形と推定され、規模は長軸1.54m、短軸1.08m、深さは0.27mを測る。断面形は逆台形に近い。壁面は緩やかに立ち上がり、底面にはやや凹凸が認められる。近・現代の攪乱の可能性が考えられる。

SK09からは図化するには至らなかったが、縄文土器片(6)・須恵器片が出土しているが、混入によるものと考えられる。6は深鉢と推定される小片で、外面に単節縄文を施文後、棒状工具による沈線が施文されている。縄文時代中期後半の加曾利E式土器である。

SK10 (第8図)

A区東端で検出した性格不明の土坑。平面形はN-3°-E軸の不整形で、北側は調査区外に延び、南側でSK11を切る。規模は長軸1.10m、短軸1.02m、深さは0.14mを測り、断面形は不整形を呈する。壁面の立ち上がりは急で、底面には僅かに凹凸が認められる北東側に2基の杭穴状の掘り込みが認められる。平断面の形状から、杭穴とその掘り方の可能性が考えられる。

SK10からは土師器片が出土しているが、混入によるものと考えられる。図化するには至らなかった。

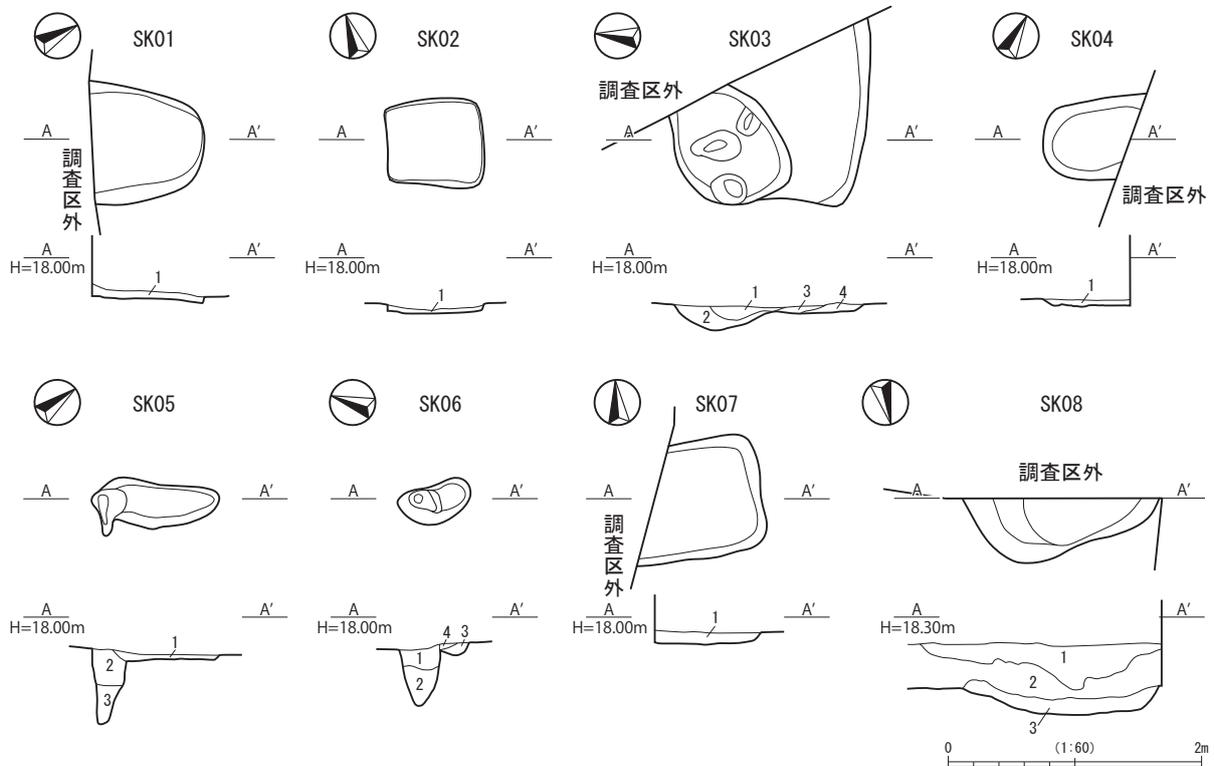
SK11 (第8図, 第5表, 図版 6-1-1)

A 区南東隅で検出した性格不明の土坑。SK07・08・09 に形状が似る。平面形は N - 41° - E 軸の隅丸方形で、北側で SK10 に切られる。規模は長軸 0.84 m, 短軸 0.72m, 深さは 0.18 m を測り、断面形は逆台形に近い。壁面は緩やかに立ち上がり、底面にはやや凹凸が認められる。近・現代の攪乱の可能性が考えられる。

SK11 からは、土師器の甕片・須恵器の坏 (1) が出土しているが、混入によるものと推定される。1 はロクロ整形で、胎土に海綿状骨針・小礫を含む。木葉下窯跡群産と推定される。

SK12 (第8図, 第5表, 図版 6-1-2)

A 区南東側で検出した性格不明の土坑。平面形は N - 75° - E 軸の不整形円で、規模は長軸 0.78 m, 短軸 0.76m, 深さは 0.18 m を測る。断面形は不整形を呈する。壁面の立



SK01
1 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ5~30mm) を少量含む。

SK02
1 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや弱い。しまりやや強い。

SK03
1 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ1~3mm) を少量含む。
2 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや弱い。しまり強い。ローム (φ5~20mm) を少量含む。
3 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ10~30mm) を微量含む。
4 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや弱い。しまりやや強い。

SK04
1 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ5~10mm) を少量含む。

SK05
1 10YR3/2 黒褐色土 粘性やや弱い。しまり強い。ローム (φ1~10mm) を少量含む。

2 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや弱い。しまりやや強い。
3 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや弱い。しまりやや弱い。

SK06
1 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強い。しまりやや弱い。ローム (φ1~5mm) を少量含む。
2 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強い。しまりやや弱い。ローム (φ1~2mm) を多量含む。
3 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1mm) を微量含む。
4 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強い。しまり強い。ローム (φ3~5mm) を多量含む。

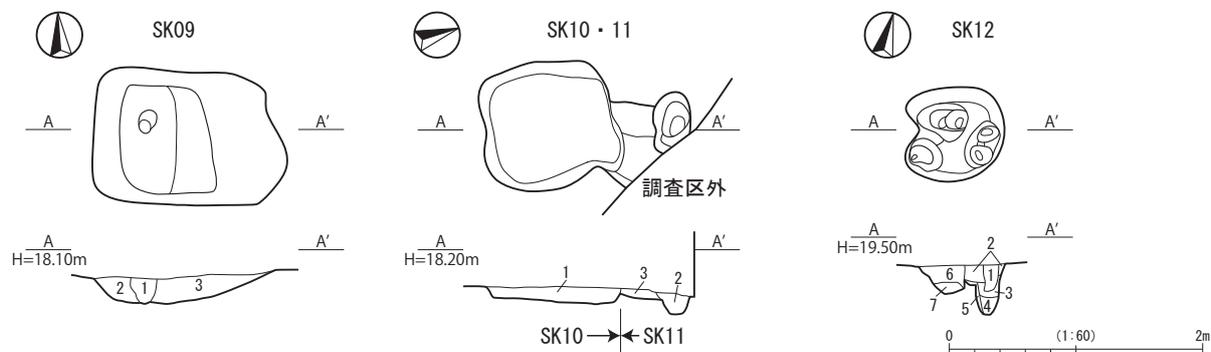
SK07
1 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや弱い。しまり強い。ローム (φ1mm) を微量含む。

SK08
1 表土・盛土
2 耕作土
3 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや弱い。しまりやや弱い。ローム (φ1~2mm) を微量含む。

第7図 A区土坑 平・断面図 (1)

ち上がりは急で、底面は凹凸が目立つ。植痕の可能性が考えられる。

SK12からは、土師器の坏片・須恵器の鉢(2)が出土している。2は8世紀の所産と推定されるが、混入によるものと考えられる。



- SK09**
- | | | | |
|---|---------|------|------------------------------------|
| 1 | 10YR4/6 | 褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ロームブロック主体。 |
| 2 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ30~50mm)を多量含む。 |
| 3 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまり強い。ローム(φ20~30mm)を中量含む。 |

- SK10・11**
- | | | | |
|---|---------|------|-----------------------------------|
| 1 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや弱い。しまり強い。ローム(φ1mm)を微量含む。 |
| 2 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム(φ5~30mm)を少量含む。 |
| 3 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性やや弱い。しまり強い。 |

- SK12**
- | | | | |
|---|---------|------|---|
| 1 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1~2mm)を微量含む。 |
| 2 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ5~10mm)を少量、焼土(φ2~5mm)を微量含む。 |
| 3 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ5~30mm)を中量含む。 |
| 4 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ5~30mm)を多量含む。 |
| 5 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ10~20mm)を中量含む。 |
| 6 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ5~10mm)を少量含む。 |
| 7 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまり強い。ローム(φ5~10mm)を多量含む。 |

第8図 A区土坑 平・断面図(2)

小穴

P 01 (第9図)

A区中央付近に位置する小穴。平面形はN-12°-W軸の楕円形で、規模は長軸0.34m, 短軸0.23m, 深さは0.07mを測る。断面形は皿形を呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、底面には僅かに凹凸が認められる。時期および性格は不明。

遺物の出土はなかった。

P 02 (第9図)

A区中央付近に位置する小穴。平面形はN-88°-W軸の楕円形で、規模は長軸0.42m, 短軸0.32m, 深さは0.15mを測る。断面形は半円形に近い。壁面は緩やかに立ち上がり、底面には僅かに凹凸が認められる。時期および性格は不明。

P02からは、須恵器の坏片が出土しているが、図化するには至らなかった。

P 03 (第9図)

A区中央北寄りに位置する小穴。平面形はN-55°-W軸の楕円形で、規模は長軸0.32m, 短軸0.18m, 深さは0.31mを測る。断面形は漏斗形を呈する。壁面は垂直に立ち上がり、上段で外側に屈曲して緩やかに開く。底面には僅かに凹凸が認められる。時期は不明だが、杭穴の可能性が考えられる。

遺物の出土はなかった。

P 04 (第9図)

A区中央北寄りに位置する小穴。平面形はN-60°-E軸の楕円形で、規模は径0.24m、深さは0.36mを測る。断面形はU字形を呈する。壁面は垂直に立ち上がり、掘削痕跡と思われる凹凸が著しい。近・現代の芋掘り穴の可能性が考えられる。

遺物の出土はなかった。

P 05 (第9図)

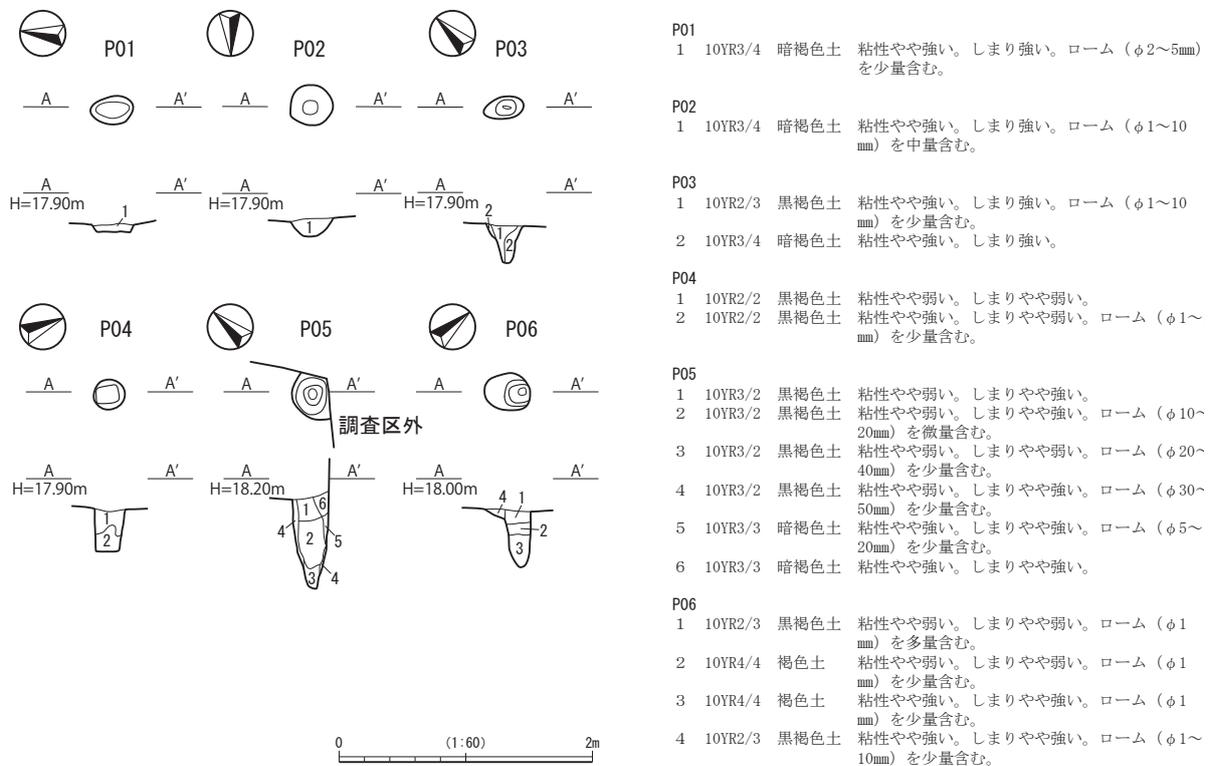
A区南東端に位置する小穴。平面形はN-7°-Wの楕円形で、一部調査区外に延びている。規模は長軸0.36m、短軸0.18m、深さは0.78mを測り、断面形はU字形に近い。壁面は僅かに外側に開くが、概ね垂直に立ち上がり、壁面には凹凸が著しい。時期は不明だが、杭穴の可能性が考えられる。

P05からは、土師器の甕片が出土しているが、図化するには至らなかった。

P 06 (第9図)

A区東端に位置する小穴。平面形はN-60°-E軸の楕円形で、規模は長軸0.36m、短軸0.3m、深さは0.46mを測る。断面形はU字形を呈する。壁面は垂直に立ち上がり、掘削痕跡と思われる凹凸が著しい。近・現代の芋掘り穴の可能性が考えられる。

遺物の出土はなかった。



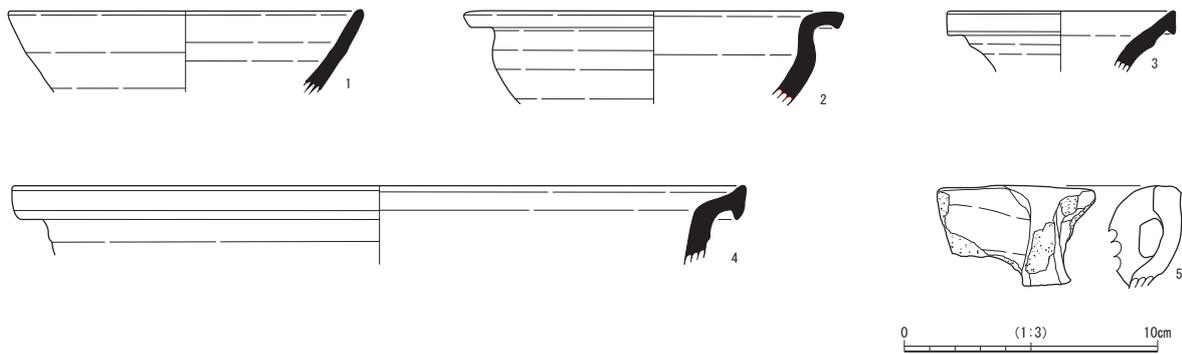
第9図 A区小穴 平・断面図

出土遺物（第 10 図，第 5 表，図版 6-1）

遺構外出土遺物は 13 点で，そのうち 6 点を掲載し，5 点を図化した。

いずれも遺構確認面から出土した。3 は須恵器の長頸瓶，4 は須恵器の甑で，8～9 世紀の所産である。5 は内耳土器の鍋あるいは焙烙で，輪積み成形，内耳は貼付けられている。16～17 世紀の遺物と推定されるが，近世期の出土遺物は表土出土遺物も含めて，極めて少ない。

当該調査区では，遺跡の性格を明確に示す遺構を検出できなかった。出土遺物の大部分は混入によるものと考えられる。



第 10 図 A 区出土遺物

第 5 表 A 区出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 位置	種別	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
10-1 6-1-1	A 区 SK11	須恵器	坏	口縁～ 体部	10% 未満	(14.0)	—	<3.2>	ロクロ整形。	黒色粒・白色粒・ 海綿状骨針・小礫	良好	内外面：暗灰黄色 (2.5Y5/2)	木葉下窯跡群 産
10-2 6-1-2	A 区 SK12	須恵器	鉢	口縁部	10% 未満	(15.0)	—	<3.7>	ロクロ整形，口縁部ヨコナ デ。	黒色粒・白色粒	良好	内外面：灰色 (5Y6/1)	
10-3 6-1-3	A 区 確認 面	須恵器	長頸 瓶	口縁部	10% 未満	(9.0)	—	<14.0>	ロクロ整形，内外面自然釉 付着。	黒色粒・白色粒・ 海綿状骨針	良好	外面：褐灰色 (10YR4/1) 内面：褐灰色 (10YR5/1)	
10-4 6-1-4	A 区 確認 面	須恵器	甑	口縁部	10% 未満	(29.0)	—	<3.2>	ロクロ整形，端部に自然釉 付着。	黒色粒・白色粒・ 海綿状骨針・小礫	良好	外面：褐灰色 (10YR4/1) 内面：褐灰色 (10YR5/1)	木葉下窯跡群 産
10-5 6-1-5	A 区 確認 面	土器	内耳 土器 鍋か 焙烙	口縁～ 胴部	10% 未満	—	—	<4.0>	輪積み成形，内外面ナデ， 内耳貼付け。	白色粒・海綿状骨 針	良	内外面：灰白色 (7.5YR8/2)	器面摩耗
— 6-1-6	A 区 SK09	縄文 土器	深鉢	胴部	10% 未満	—	—	—	外面に単節縄文を施文後， 棒状具で線状の施文。	黒雲母・白雲母・ 白色粒・白色針状 物質	良	内外面：にぶい橙 色 (5YR6/4)	加曾利 E 式

第2項 B区

B区の調査では、地表面下0.5～0.8m（標高18.2～18.5m）で遺構確認を行い、掘立柱建物跡1棟（SB01）、竪穴建物跡4軒（S102～05）、溝跡1条（SD02）、小穴17基（P09～25）の各遺構を検出した。S102・05・SD02は、市教委が実施した試掘調査（第1次調査）の際に確認された遺構である。今次調査では最も遺構密度が濃い一画で、奈良・平安時代の集落における居住地の一部を成していると推定される。



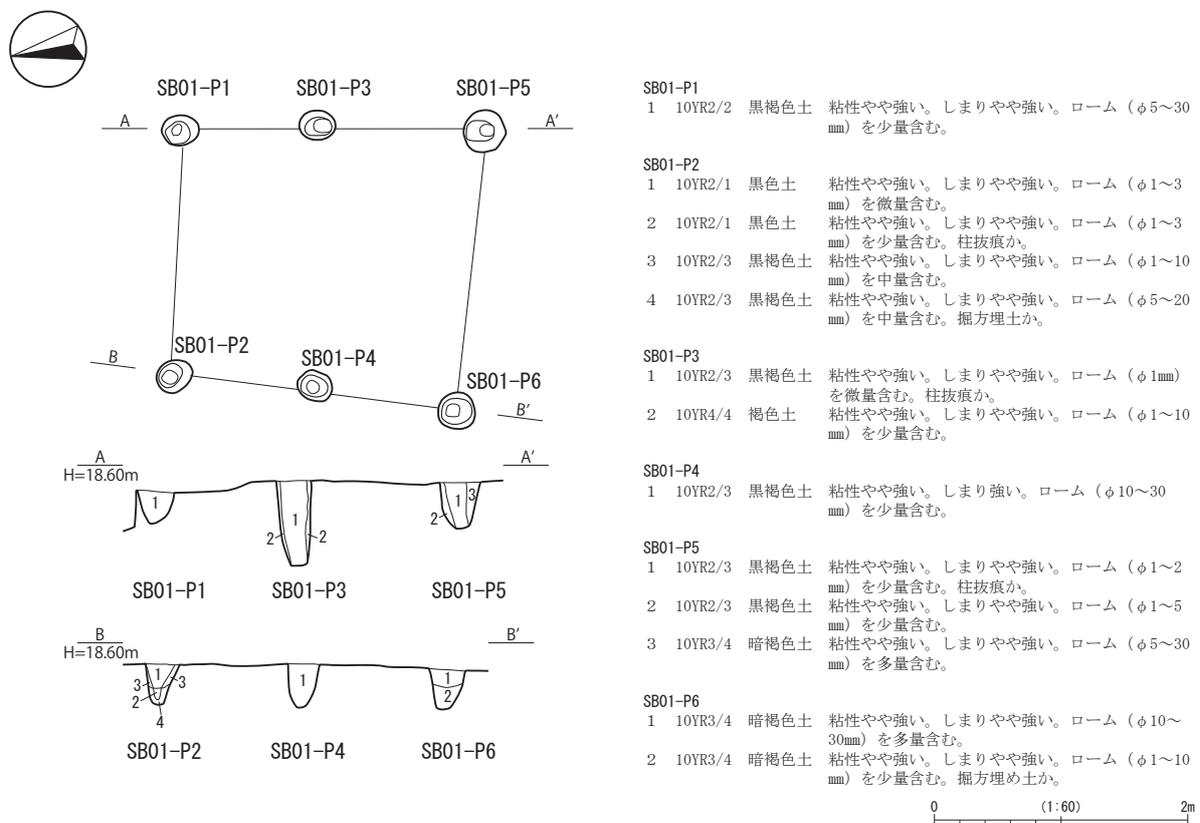
第11図 B区全体図

掘立柱建物跡

SB01 (第12図, 図版3-1)

B区南側, SI02の南西で検出した掘立柱建物跡。主軸はN-16°-Eを指す。東西2基, 南北3基の計6基(SB01-P1~P6)の柱穴で, 1×2間の建物を形成していると推定される。柱穴間の芯心距離は, 桁行と推定されるP1-P3-P5および, P2-P4-P6の南北筋が均等だが, 梁行と推定される東西筋は不同である。他にも周辺に小穴が散在しているが, 関連施設を成す遺構は確認できない。小規模な雑舎の類と推定される。時期は不明だが, 奈良・平安時代の遺構の可能性が考えられる。

遺物の出土はなかった。



第12図 SB01 平・断面図

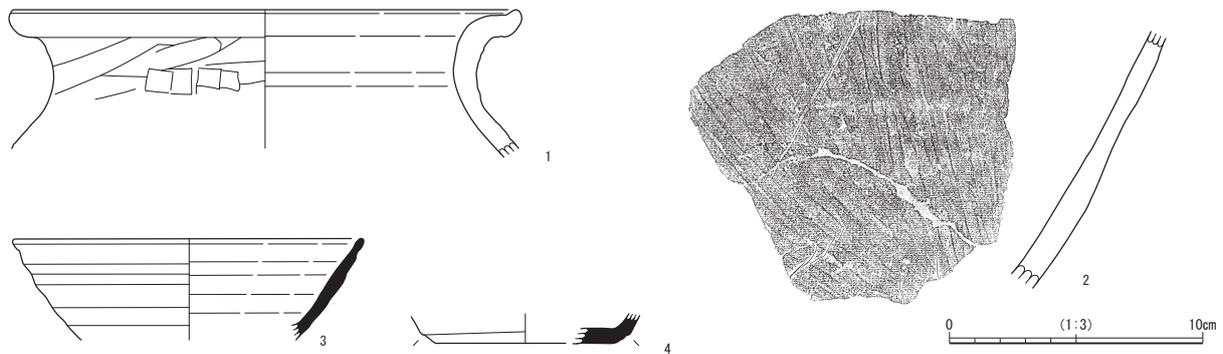
竪穴建物跡

SI02 (第13・14図, 第6表, 図版3-2・3-3・6-2)

B区中央東端で検出した竪穴建物跡。主軸はN-17°-Wを指す。遺構東半部は調査区外である。平面形は四隅がやや鋭角気味の隅丸方形と推定され, 断面形は箱形を呈する。壁面の立ち上がりはほぼ垂直で, 壁高は床面から検出面まで約0.4mを測る。検出した床面の規模は, 長軸4.96m, 短軸2.48m, 床面積は12.3㎡を測り, 堅緻な貼り床が施されている。竈は検出されなかったが, 堆積土の様相から調査区外東側に北竈が設けられている。

る可能性が高い。小穴はP1～4の4基が検出された。主柱穴はP1とP2と推定される。壁周には周溝が廻る。深さは床面下0.12m内外を測り、やや凹凸が目立つ。西辺の周溝内には、多数の小穴が構築されており、壁柱穴を有していた可能性が考えられる。掘方は床面下0.36mまで掘削されているが、壁面から幅0.5～0.6m程はテラス状に掘り残された段差が認められる。

SI02からは、土師器・須恵器・土製品等、計53点の遺物が出土しており、7点を掲載し、4点を図化した。1は土師器の甕の口縁部で、内外面にナデによる調整が施されている。2は土師器の甕の胴部で、外面に縦位のミガキによる調整が認められる。3・4は須恵器で、前者はロクロ整形による稜が明瞭な坏で、後者は底部回転ヘラケズリによる調整が施されている。5はロクロ整形による土師器の蓋、6は輪積み痕が明瞭な須恵器の甕、7は鉄滓と思われる。いずれも8世紀第2四半期から第3四半期にかけての遺物と推定される。



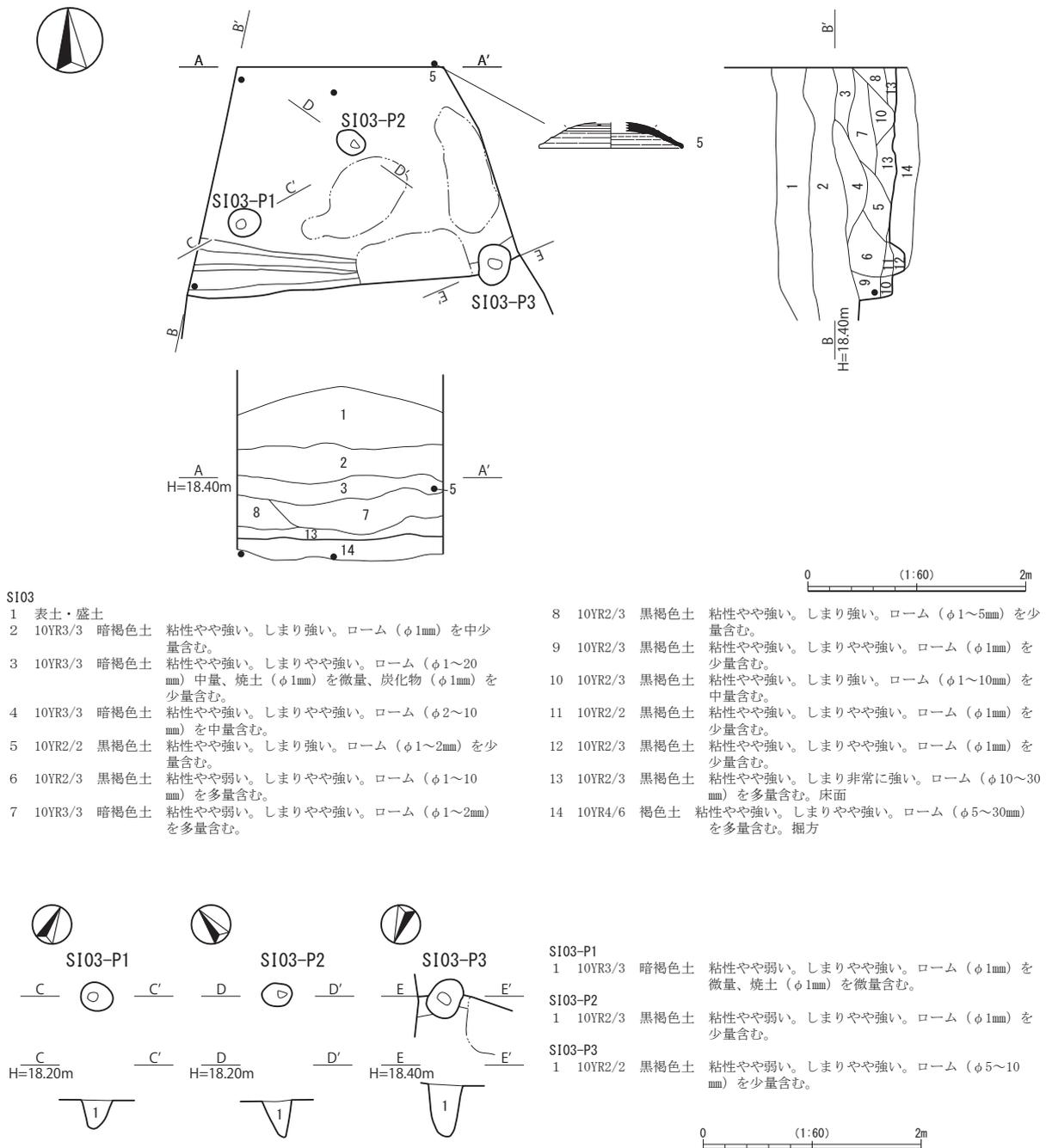
第14図 SI02出土遺物

第6表 SI02出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 位置	種別	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
14-1 6-2-1	B区 SI02	土師器	甕	口縁部	10% 未満	(19.8)	—	<5.7>	輪積み成形, 口縁部ヨコナデ, 内外面ナデ。	金雲母・白雲母・ 黒色粒・白色粒・	良	外面：にぶい橙色 (7.5YR7/4) 内面：橙色 (5YR6/6)	摩耗剥落
14-2 6-2-2	B区 SI02	土師器	甕	胴部	10%	—	—	<9.95>	輪積み成形, 外面縦位のミガキ, 内面ナデ, 外面煤付着。	白雲母・黒色粒・ 白色粒・赤色粒・ 小礫	良	外面：灰黄褐色色 (10YR5/2) 内面：にぶい褐色 (7.5YR6/3)	
14-3 6-2-3	B区 SI02	須恵器	坏	口縁～ 体部	10% 未満	(13.8)	—	<4.0>	ロクロ整形。	白色粒・黒色粒・ 海綿状骨針・小礫	良好	内外面：灰黄色 (2.5Y7/2)	稜が強い
14-4 6-2-4	B区 SI02	須恵器	坏	底部	10% 未満	—	(7.0)	<1.2>	ロクロ整形, 底部回転ヘラケズリ。	黒色粒・白色粒	良好	外面：黄灰色 (2.5Y5/1) 内面：黄灰色 (2.5Y6/1)	
— 6-2-5	B区 SI02	土師器	蓋	端部	10% 未満	(15.0)	—	<1.3>	ロクロ整形, 内外面ナデ。	黒色粒・白色粒	良	内外面：浅黄色 (7.5Y8/4)	
— 6-2-6	B区 SI02	須恵器	甕	胴部	10% 未満	—	—	<6.2>	輪積み成形, 外面縦ハケ, 内面ハケ, ナデ, 輪積み痕顕著。	黒色粒・白色粒・ 海綿状骨針・小礫	良好	外面：灰白色 (2.5Y7/1) 内面：にぶい黄橙 色 (10YR7/2)	
— 6-2-7	B区 SI02	金属 製品	鉢滓	—	—	長さ 4.3	幅 3.2	厚さ 1.1	鍛冶滓か。	—	—	—	

SI03 (第15・16図, 第7表, 図版3-5・3-6・6-3)

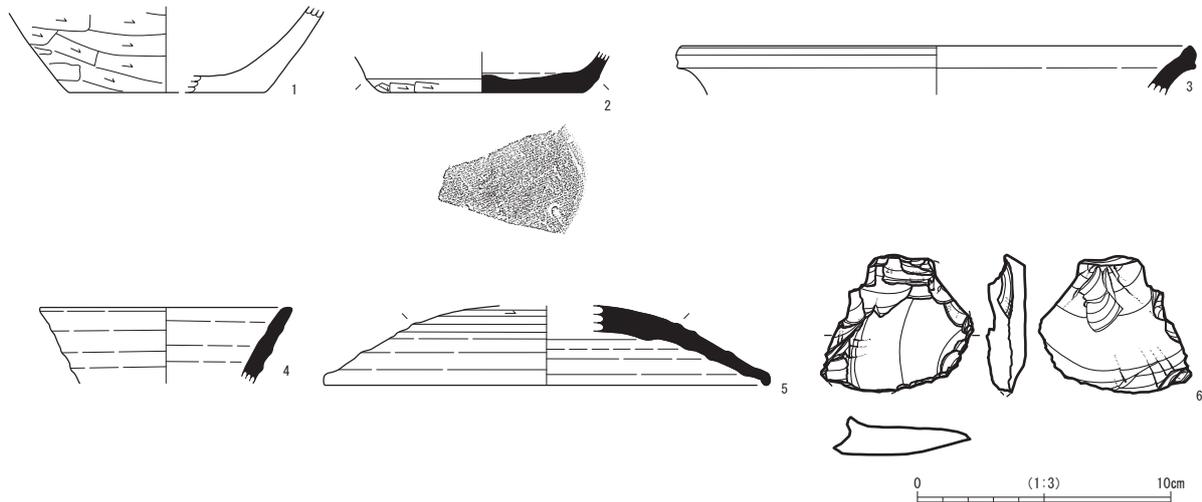
B区北端で一部を検出した竪穴建物跡。主軸はN-2°-Eを指し、遺構の大部分は調査区外である。平面形は隅丸方形と推定され、断面形は箱形を呈すると考えられる。壁面の立ち上がりはほぼ垂直で、壁高は床面から検出面まで0.3mを測る。検出した床面の規模は、長軸3.18m、短軸2.02m、床面積は約6.42㎡を測り、比較的堅緻な貼り床が施されているが、植根による攪乱を受けている。竈は検出されなかった。小穴はP1～3の3基が検出されたが、支柱穴は不明である。南辺の一部で壁周溝が確認された。深さは床面下0.2m内外を測り、やや凹凸が目立つ。掘方は床面下0.21mまで掘削されており、調



第15図 SI03 平・断面図

査区北側の一部は、より深く掘り窪められている。

SI03からは、土器・土師器・須恵器・石器等、計28点の遺物が出土しており、7点を掲載し、6点を図化した。1は土師器の甕の底部で、器面の摩耗が著しい。外面ヘラケズリ調整の後、ナデが施されている。指頭圧痕が顕著に残る粗製土器である。2～5は須恵器である。2・4は坏で、2は手持ちヘラケズリによる調整が認められ、4はロクロ整形による稜が強い。3は甕、5はロクロ整形の蓋で、端部に自然釉が付着している。5は胎土に海綿状骨針と小礫が混入しており、木葉下窯跡群産と推定される。いずれも8世紀第2四半期～第3四半期にかけての遺物と推定される。6は加工痕のある頁岩製の剥片で、側面に連続剥離が施されている。一部折損している。7は縄文土器の深鉢で、外面には縦位の沈線に区画された無文帯と単節RL縄文が認められる。縄文時代中期の所産と推定される。



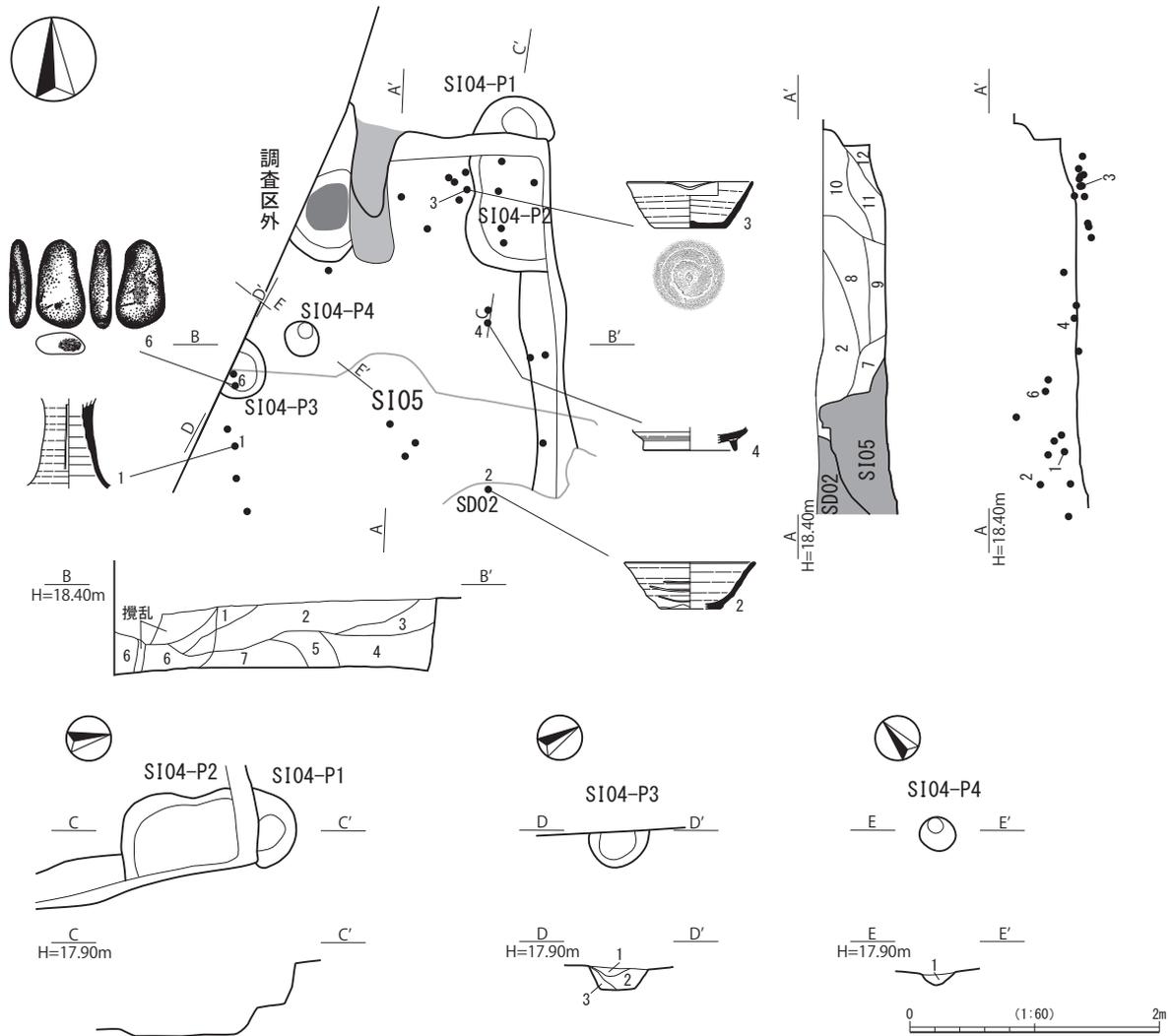
第16図 SI03 出土遺物

第7表 SI03 出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 位置	種別	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
16-1 6-3-1	B区 SI03	土師器	甕	底部	10% 未満	—	(8.0)	<3.4>	輪積み成形、外面ヘラケズリ、ナデ、内面ナデ、指頭圧痕有り。	白雲母・黒色粒・白色粒・赤色粒・砂粒	良	内外面：褐灰色 (10YR4/1)	摩耗剥落整形粗雑
16-2 6-3-2	B区 SI03	須恵器	坏	底部	10% 未満	—	(8.0)	<1.6>	ロクロ整形、底部手持ちヘラケズリ後、ナデ。	黒色粒・白色粒・海綿状骨針・小礫	良好	内外面：灰白色 (2.5Y7/1)	木葉下窯跡群産
16-3 6-3-3	B区 SI03	須恵器	甕	口縁部	10% 未満	(20.0)	—	<2.0>	口縁部自然釉付着。	黒色粒・白色粒	良好	外面：黄灰色 (2.5Y5/1) 内面：黄灰色 (2.5Y6/1)	
16-4 6-3-4	B区 SI03	須恵器	坏	口縁～ 体部	10% 未満	(10.0)	—	<3.0>	ロクロ整形。	黒色粒・白色粒・海綿状骨針	良好	内外面：黄灰色 (2.5Y6/1)	稜が強い、木葉下窯跡群産
16-5 6-3-5	B区 SI03	須恵器	蓋	体部	30%	(17.5)	—	<3.2>	ロクロ整形、外面上端部回転ヘラケズリ、内面ナデ、外面端から内面に自然釉付着。	黒色粒・白色粒・海綿状骨針・小礫	良好	内外面：灰白色 (10YR8/1)	重ね焼きによる薬灰釉の付着。木葉下窯跡群産
16-6 6-3-6	B区 SI03	石器	剥片	—	完形	長さ <5.4>	幅 6.1	厚さ 1.5	頁岩製の剥片。側面に連続剥離がほどこされる。一部折損。	—	—	—	
— 6-3-7	B区 SI03	縄文土器	深鉢	胴部	10% 未満	—	—	<2.8>	縦位の沈線2条の区画による無文帯と単節RL縄文。	白雲母・黒色粒・白色粒	良	内外面：灰白色 (7.5YR8/2)	加曾利E式土器

SI04 (第17～19図, 第8表, 図版3-7・3-8・4-1・6-4)

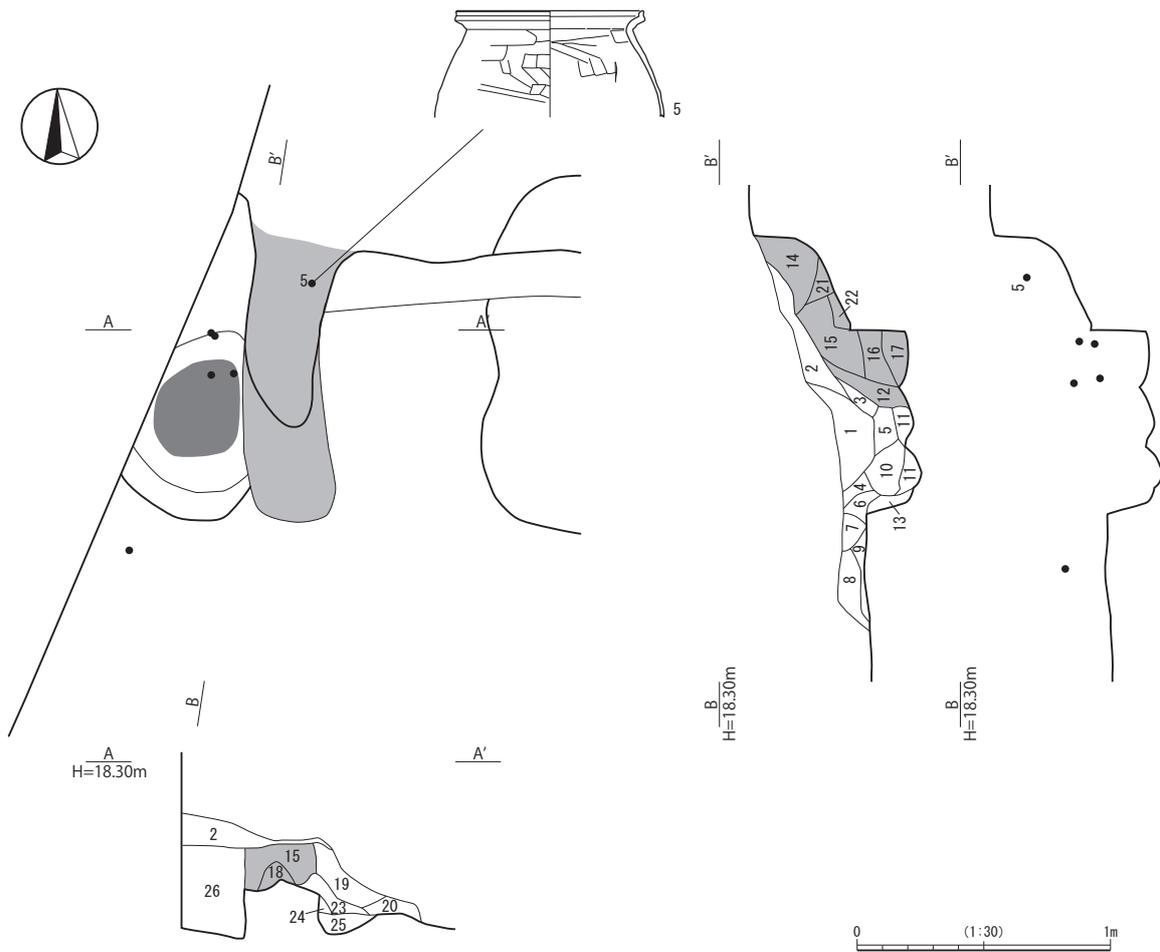
B区北半西側で検出した竪穴建物跡。主軸はN-3°-Eを指し, SI03に近い。遺構西側の一部は調査区外である。南側をSI05とSD02に切られている。平面形は四隅がやや鋭角気味の隅丸方形と推定され, 断面形は箱形を呈すると考えられる。壁面の立ち上がりはほぼ垂直で, 壁高は床面から検出面まで0.6m内外を測る。検出した床面の規模は, 長軸3.44m, 短軸3.0m, 床面積は約10.32㎡を測り, 堅緻な貼床が施されている。北壁に接



SI04

- | | | | | | | | |
|---|---------|------|--|----|---------|------|--|
| 1 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまり強い。ローム(φ1~10mm)を少量含む。 | 7 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1~20mm)を中量、焼土(φ1~3mm)を少量、炭化物(φ1mm)を少量含む。 |
| 2 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1~5mm)を中量含む。 | 8 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1~10mm)を中量含む。 |
| 3 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1~30mm)を中量含む。 | 9 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1~20mm)を多量、焼土(φ1mm)を微量、炭化物(φ1mm)を微量含む。 |
| 4 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1~10mm)を多量含む。 | 10 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1~10mm)を多量含む。 |
| 5 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまり強い。ローム(φ1~30mm)を多量、焼土(φ1mm)を微量、炭化物(φ1mm)を微量含む。 | 11 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1~10mm)を多量、焼土(φ1mm)を微量含む。 |
| 6 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまり強い。ローム(φ1mm)を少量、焼土(φ1mm)を少量、炭化物(φ1mm)を微量含む。 | 12 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1~10mm)を少量、焼土(φ1mm)を微量含む。 |

第17図 SI04 平・断面図

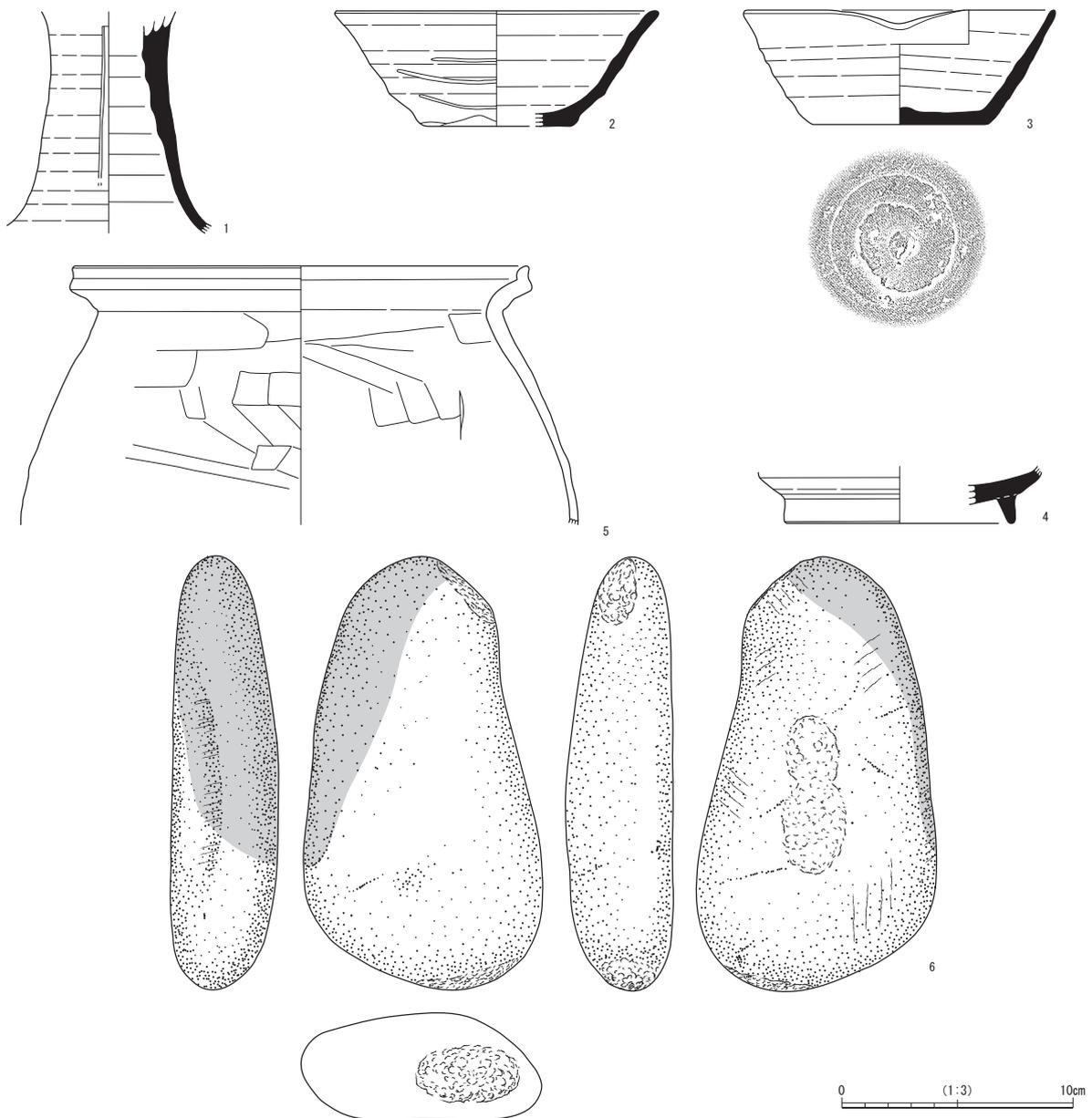


SI04竈	層番号	色	性状
1	10YR4/4	褐色土	粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1mm)を微量、焼土(φ1mm)を微量、灰白色粘土(φ1~5mm)を中量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1mm)を少量含む。
2	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや強い。しまり強い。ローム(φ1mm)を少量、焼土(φ1mm)を微量、炭化物(φ1mm)を少量含む。
3	5YR4/6	赤褐色土	粘性弱い。しまり強い。焼土(φ1~10mm)を極多量含む。
4	10YR4/4	褐色土	粘性やや強い。しまり強い。ローム(φ1mm)を少量、焼土(φ1mm)を微量、炭化物(φ1mm)を少量含む。
5	10YR2/3	黒褐色土	粘性やや強い。しまりやや強い。焼土(φ1mm)を少量、炭化物(φ1~5mm)を微量含む。
6	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや強い。しまり強い。ローム(φ1mm)を少量、焼土(φ1mm)を微量含む。
7	10YR3/2	黒褐色土	粘性やや強い。しまり非常に強い。ローム(φ1mm)を微量含む。
8	10YR6/4	にぶい黄橙色土	粘性やや強い。しまり非常に強い。焼土(φ1mm)を微量含む。
9	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1mm)を少量、焼土(φ1mm)を微量含む。
10	10YR2/3	黒褐色土	粘性やや強い。しまり強い。焼土(φ1mm)を微量含む。
11	10YR2/3	黒褐色土	粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1~2mm)を少量含む。
12	10YR2/3	黒褐色土	粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1~3mm)を少量、焼土(φ1~3mm)を少量、灰白色粘土(φ1~5mm)を少量含む。袖部。
13	10YR6/4	にぶい黄橙色土	粘性やや強い。しまり強い。ローム(φ1~3mm)を微量、焼土(φ1~3mm)を微量含む。
14	10YR5/2	灰黄褐色土	粘性やや強い。しまり非常に強い。焼土(φ1mm)を少量、炭化物(φ1mm)を微量、灰白色粘土(φ5~10mm)を少量含む。袖部。
15	10YR6/4	にぶい黄橙色土	粘性やや弱い。しまり非常に強い。焼土(φ1mm)を微量、炭化物(φ1mm)を微量、灰白色粘土(φ5~30mm)を多量含む。袖部。
16	10YR4/3	にぶい黄褐色土	粘性やや強い。しまり非常に強い。ローム(φ1mm)を微量、焼土(φ1mm)を微量、炭化物(φ1mm)を微量、灰白色粘土(φ5~30mm)を中量含む。袖部。
17	10YR4/2	灰黄褐色土	粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1~3mm)を少量、焼土(φ1~3mm)を微量、灰白色粘土(φ1~10mm)を中量含む。袖部。
18	10YR4/2	灰黄褐色土	粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1~5mm)を少量、焼土(φ1~2mm)を微量、灰白色粘土(φ1~10mm)を少量含む。袖部。
19	10YR6/4	にぶい黄橙色土	粘性やや弱い。しまり非常に強い。焼土(φ1~3mm)を微量、炭化物(φ1~3mm)を微量含む。
20	10YR4/3	にぶい黄褐色土	粘性やや弱い。しまり強い。ローム(φ1~30mm)を中量、焼土(φ1mm)を微量、炭化物(φ1mm)を微量含む。
21	10YR4/4	褐色土	粘性やや強い。しまり強い。ローム(φ5~10mm)を少量含む。袖部。
22	10YR4/6	褐色土	粘性やや強い。しまりやや強い。袖部。
23	10YR4/3	にぶい黄褐色土	粘性やや強い。しまり強い。ローム(φ1~10mm)を少量、焼土(φ1mm)を微量、炭化物(φ1mm)を微量含む。
24	10YR4/2	灰黄褐色土	粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ1~10mm)を少量含む。
25	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや強い。しまりやや強い。ローム(φ5~30)を多量含む。
26	10YR2/2	黒褐色土	粘性やや強い。しまりやや強い。焼土(φ1~2mm)を少量、炭化物(φ1mm)を微量含む。

第 18 図 SI04 竈 平・断面図

して竈が構築されており，その東側半分を検出した。西側は調査区外である。白粘土が構築材として用いられており，遺存状態は良い。小穴はP1・P2の2基が検出され，支柱穴と推定される。明確な壁周溝は検出されなかったが，東辺に沿って浅い窪みが一部に認められた。掘方は床面下0.2 mまで掘削されており，凹凸が激しい。

SI04からは，土師器・須恵器・石器・土製品等，計58点の遺物が出土しており，8点を掲載し，6点を図化した。1～4は須恵器である。1は高台付盤の脚部で，透かしが施されている。胎土には海綿状骨針と小礫が混入している。2・3は坏で，いずれもロクロ整形，底部回転ヘラケズリによる。2の体部には，焼成前に施されたヘラ書きによる描線が4条刻まれている。3は，口縁が一部片口状に歪んでいる。いずれも胎土に海綿状骨針と小礫が混入している。4は高台付坏で，ロクロ整形，貼付け高台である。5は土師器の



第19図 SI04 出土遺物

第 8 表 SI04 出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 位置	種別	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
19-1 6-4-1	B区 SI04	須恵器	高台 付盤	脚部	10% 未満	—	—	<9.6>	ロクロ整形, 透かし有り。	黒色粒・白色粒海 綿状骨針・小礫	良好	内外面: 灰色 (5Y5/1)	木葉下窯跡群 産
19-2 6-4-2	B区 SI04	須恵器	坏	口縁~ 底部	30%	(14.0)	(6.3)	5.1	ロクロ整形, 底部全面回転 ヘラケズリ。体部外面線描 4条有り。	白色粒・海綿状骨 針・小礫	良好	内外面: 灰色 (5Y5/1)	焼木葉下窯跡 群産 焼成前のヘラ 書き4条有り
19-3 6-4-3	B区 SI04	須恵器	坏	—	ほぼ 完形	13.4	7.5	5.0	ロクロ整形, 底部回転ヘラ ケズリ。	白色粒・海綿状骨 針・小礫	良好	内外面: 灰色 (7.5Y4/1)	木葉下窯跡群 産。口縁部片 口状の歪み。 底部付近は暗 赤褐色を呈 す。
19-4 6-4-4	B区 SI04	須恵器	高台 付環	底部	10%	—	(10.0)	<2.5>	ロクロ整形, 貼付け高台。	黒色粒・白色粒・ 海綿状骨針	良好	外面: 黄灰色 (2.5Y5/1) 内面: 灰白色 (2.5Y7/1)	外面一部自然 釉
19-5 6-4-5	B区 SI04	土師器	甕	口縁部 ~胴部	10%	(19.8)	—	<11.3>	輪積み成形, 口縁部ヨコナ デ, 内面ハケ後ナデ, 摘み 出し口縁, 外面一部煤付着。	金雲母・白雲母・ 黒色粒・白色粒	良	外面: 橙色 (7.5YR7/6) 内面: にぶい褐色 (7.5YR6/3)	摩耗剥落被熱
19-6 6-4-6	B区 SI04	石器	敲石	完形	完形	長さ 19.0	幅 10.4	厚さ 4.7	砂岩製, 使用痕あり。一部 被熱により赤化。	—	—	—	—
— 6-4-7	B区 SI04	須恵器	蓋	口縁	10% 未満	—	—	<1.0>	ロクロ整形。	黒色粒・海綿状骨 針	良好	外面: 暗灰色 (2.5Y4/2) 内面: 灰黄色 (2.5Y7/2)	外面自然釉厚 い
— 6-4-8	B区 SI04	土製品	支脚	体部	10% 未満	径 <2.0>	—	<3.0>	手捏ね成形, 縦位のハケ。	白色粒・赤色粒	良	橙色 (7.5YR7/6)	—

甕で、器面は摩耗と被熱による剥落が著しい。外面の一部に煤が付着している。6は砂岩製の敲石で、敲打痕が認められる。7は須恵器の蓋の口縁で、付着した自然釉が厚い。8は土製の支脚で、外面には縦位のハケによる整形痕が認められる。いずれも9世紀第1四半期～第2四半期の遺物と考えられる。

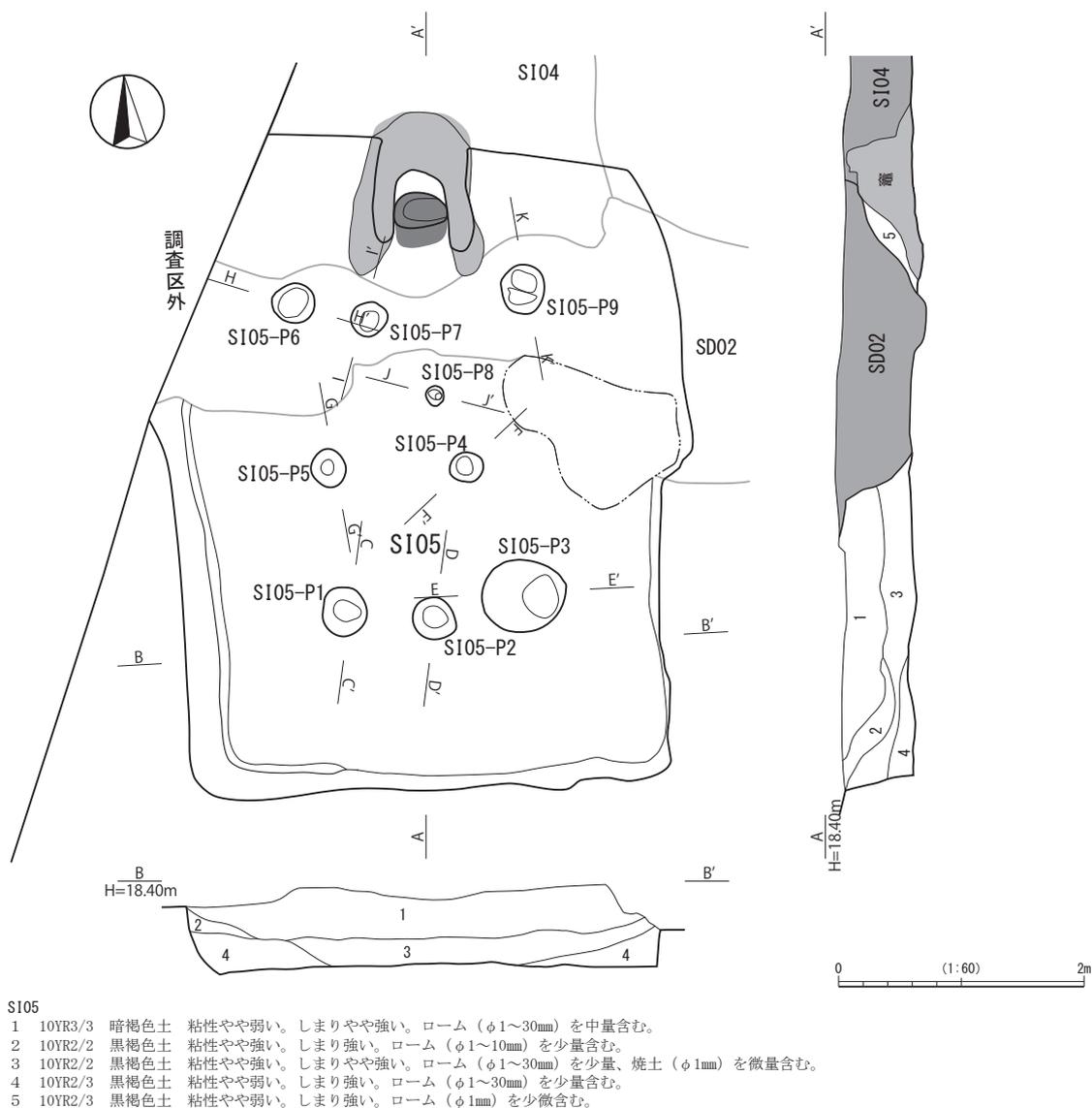
SI05 (第20～26図, 第9・10表, 図版4-2～4-5・7-1)

B区北半西側で検出した竪穴建物跡。主軸はN-2°-Eを指し, SI03・04に近い。北西隅の一部は調査区外である。北側でSI04およびSD02と重複関係にあり, SI04を切り, SD02に切られている。遺構北壁はSI04を切って構築されている。平面形は四隅がやや鋭角気味な隅丸長方形で, 断面形は箱形を呈する。壁面の立ち上がりはほぼ垂直で, 壁高は床面から検出面まで0.5m内外を測る。検出した床面の規模は, 長軸5.71m, 短軸4.43m, 床面積は約25.3㎡を測り, 軟弱な貼床が施されている。竈は北壁に接して構築されていると推定され, 白粘土が構築材として用いられている。SD02に切られているため, 上部は壊されている。小穴はP1～P9の9基が検出された。主柱穴はP1・P3～P5と推定される。西側では壁周に周溝が廻り, 深さは床面下0.1m内外を測る。掘方は床面下0.1mまで掘削されており, 凹凸が激しい。

SI05からは, 土師器・須恵器・土製品・石製品等, 計608点の遺物が出土しており, 37点を掲載し, 32点を図化した。1～10・18～20・25～27・33～35は土師器である。1は内面黒色処理が施された坏で, 底部は回転ヘラケズリがなされている。底面には「真布」と推定される墨書が施されている。2は内面黒色処理が施された坏で, 底部は回転ヘラケズリがなされている。体部側面と底部に各々墨書があるが, いずれも判読できなかった。後者は「卍」字の一部である可能性が考えられる。3も同様に内面黒色処理が施され, 底部回転ヘラケズリの坏である。4は内面黒色処理が施された坏で, 底部回転ヘラケズリ

後、高台が貼付けられている。全体的に歪んでいる。5は内面黒色処理が施された坏で、底部は回転ヘラケズリによる。6は内面黒色処理が施された高台付皿で、一部に煤が付着している。7は甕で、輪積み成形、底部に木葉痕が認められる。8は内面黒色処理が施された高台付坏で、底部回転ヘラケズリにより高台を削り出している。9は内面黒色処理が施された鉢で、10は縦位のハケが施された甕である。18は内面黒色処理が施された坏で、19は甕の底部である。20・25～27は甕で、いずれも輪積み成形による。20は内外面に横位のハケが施されており、25は一部に黒斑が認められ、26は外面にミガキの痕跡が残る。

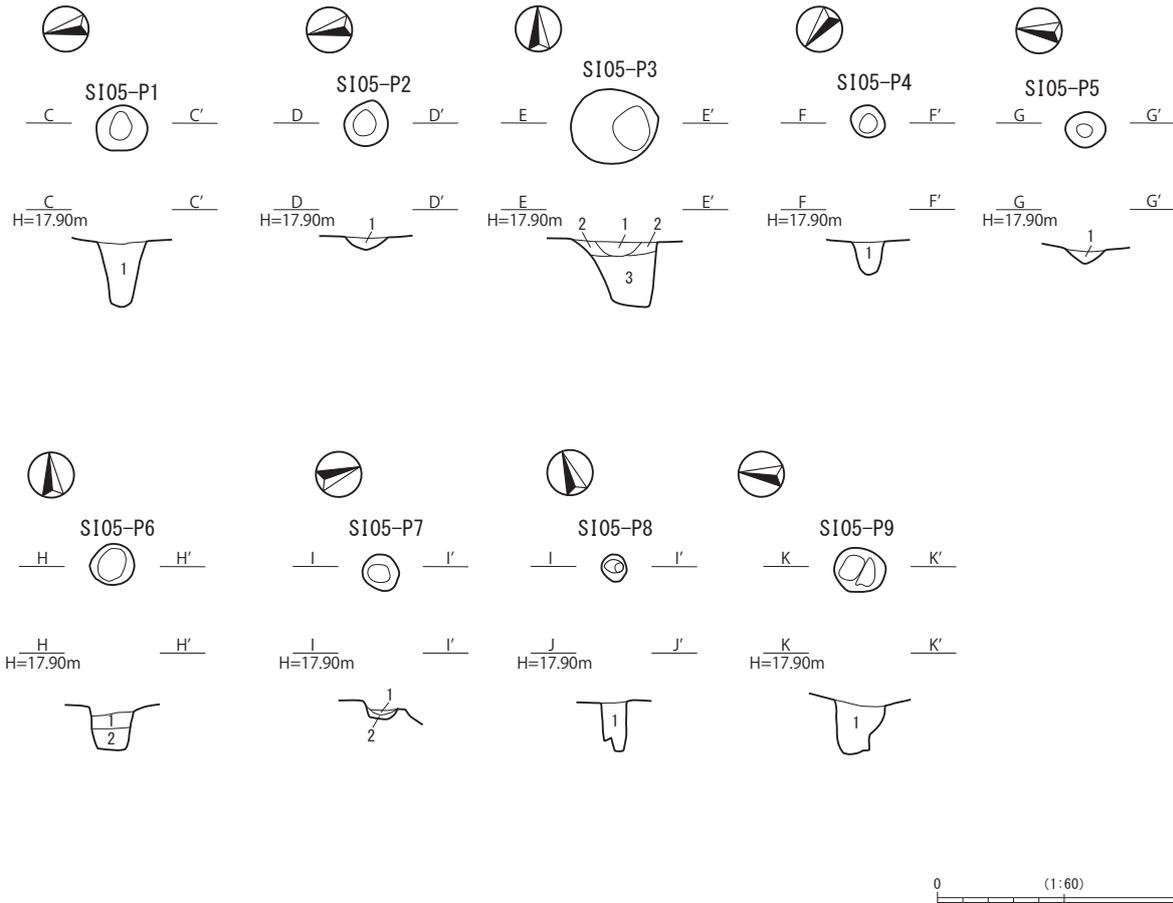
11～15・21～23・28・29は須恵器の坏で、いずれもロクロ整形、底部回転ヘラケズリである。13は貼付け高台が付された坏である。14は底部に「卍」字状のヘラ書きが施されており、体部内面に「向珠」と判読される墨書が認められる。また口縁部内面には、油煙と思しい煤が付着している。15は焼成前の底部に「十」字状のヘラ書きが施されている。16・17・24はいずれもロクロ整形、貼付け高台の須恵器の盤である。30は滑石製



第20図 SI05 平・断面図

の紡錘車で、穿孔径は7.5 mm、表面には細かい擦痕が認められる。

33・34 はいずれもロク口整形，内面黒色処理が施された土師器の坏で，後者の底部には一部「卍」字の可能性が考えられる墨書が施されている。35 は土師器の甕で，内外面に煤が付着している。36 は須恵器の坏で，胎土に海綿状骨針・小礫を含み，37 は須恵器の蓋である。概ね9世紀第2四半期の遺物と考えられる。



SI05-P1
1 10YR3/4 暗褐色土 粘性やや弱い。しまりやや弱い。ローム (φ1mm) を微量含む。

SI05-P2
1 10YR3/4 暗褐色土 粘性やや強い。しまり強い。ローム (φ10~30mm) を多量含む。

SI05-P3
1 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1~2mm) を少量含む。
2 10YR3/4 暗褐色土 粘性やや強い。しまりやや弱い。ローム (φ1~2mm) を中量含む。
3 10YR3/4 暗褐色土 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1~2mm) を少量含む。

SI05-P4
1 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや強い。しまり強い。ローム (φ1~2mm) を少量含む。

SI05-P5
1 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1mm) を微量含む。

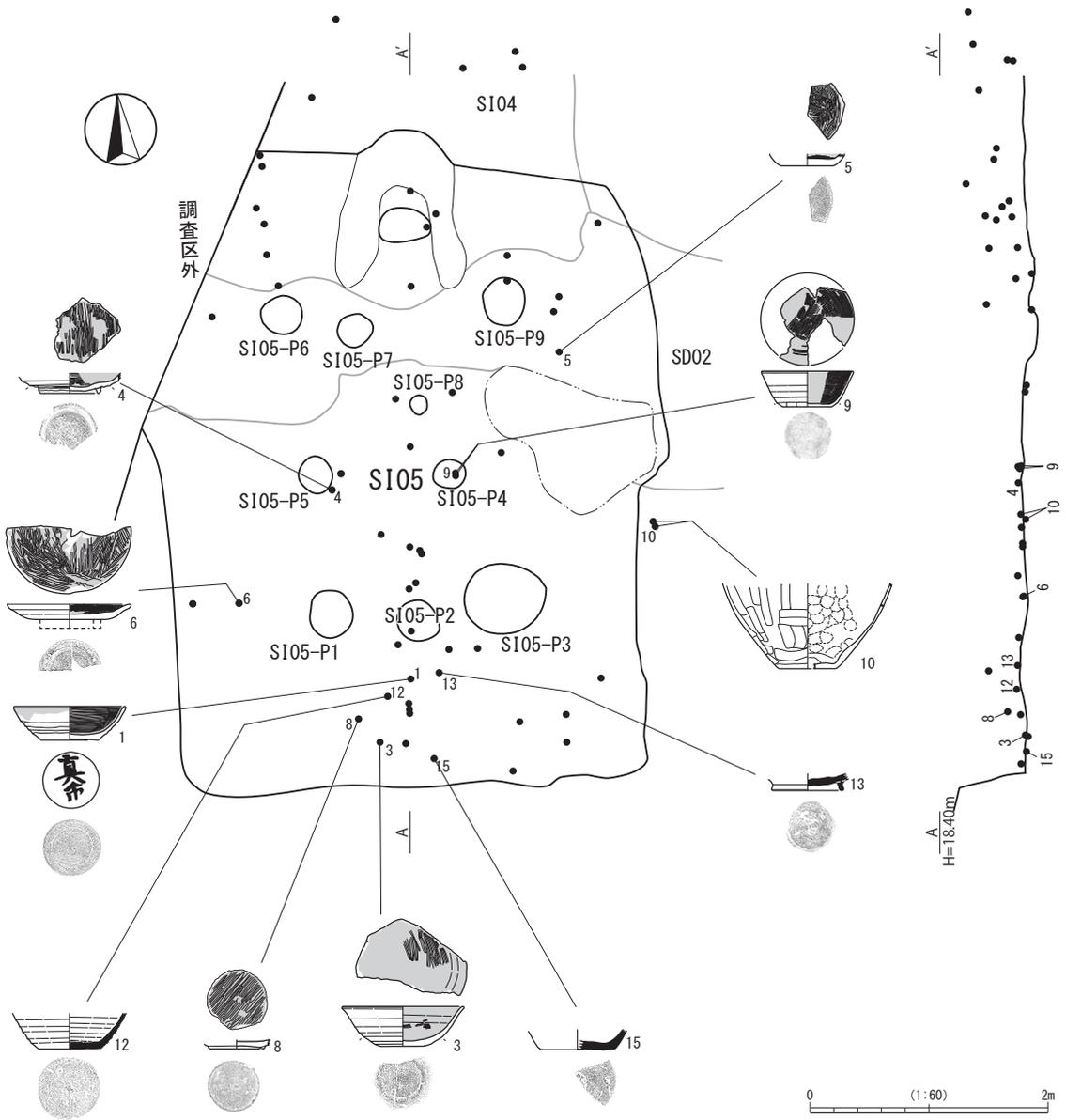
SI05-P6
1 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強い。しまり強い。ローム (φ10~30mm) を多量含む。
2 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1~5mm) を少量含む。

SI05-P7
1 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや強い。しまり強い。ローム (φ1mm) を微量含む。
2 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや強い。しまり強い。ローム (φ5~10mm) を多量含む。

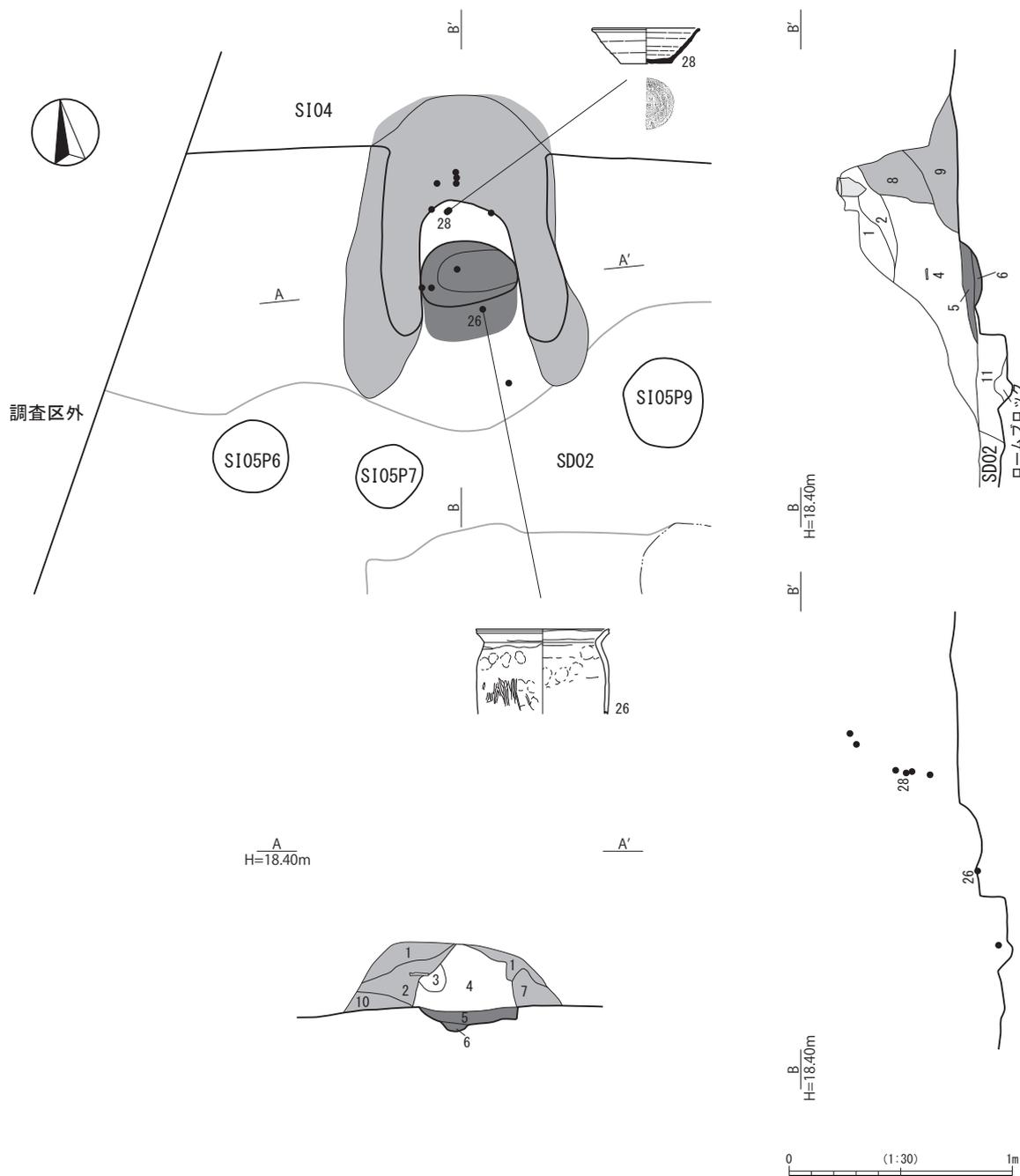
SI05-P8
1 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1mm) を微量含む。

SI05-P9
1 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1mm) を少量含む。

第21図 SI05小穴 平・断面図



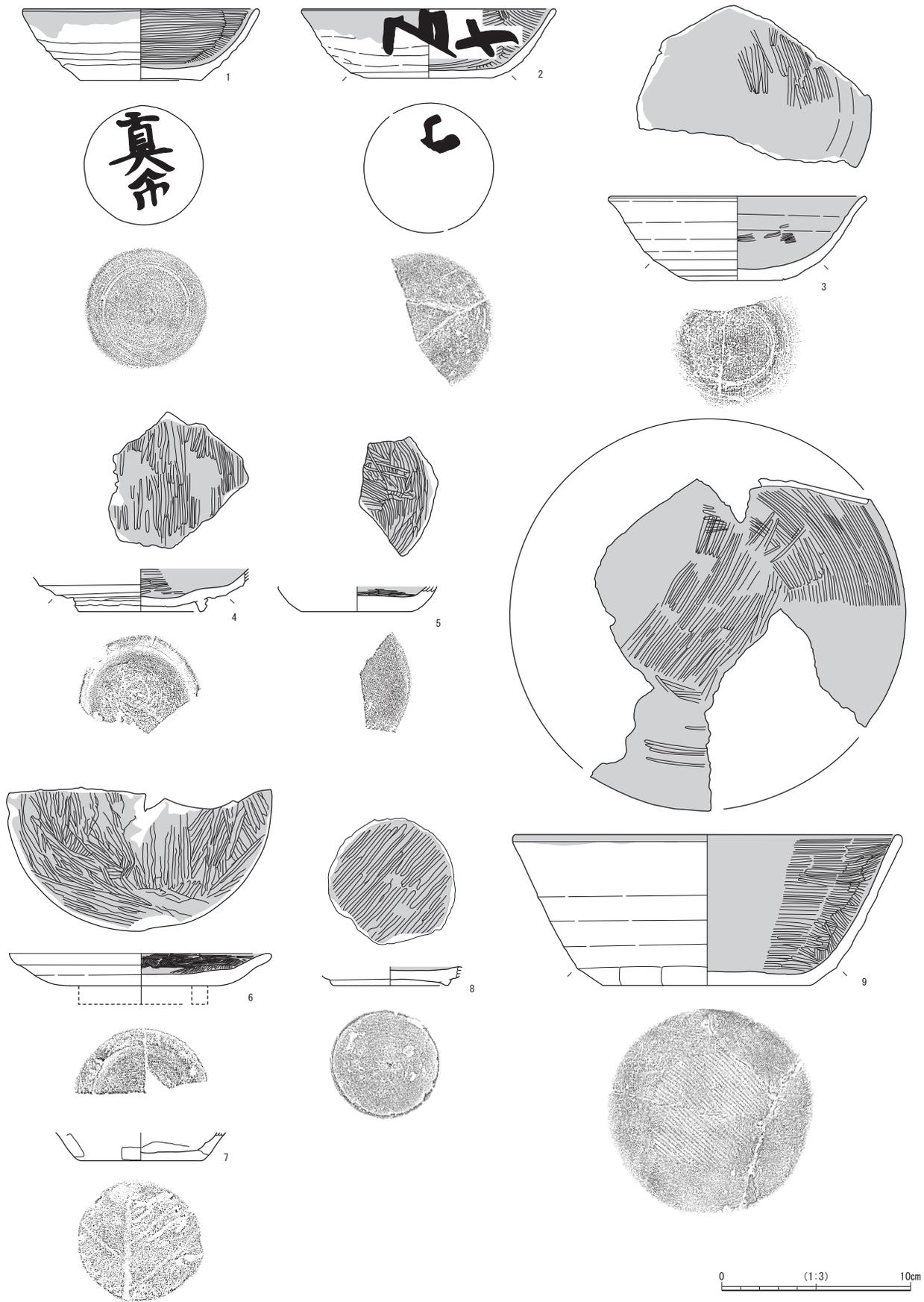
第 22 図 S105 遺物出土分布図



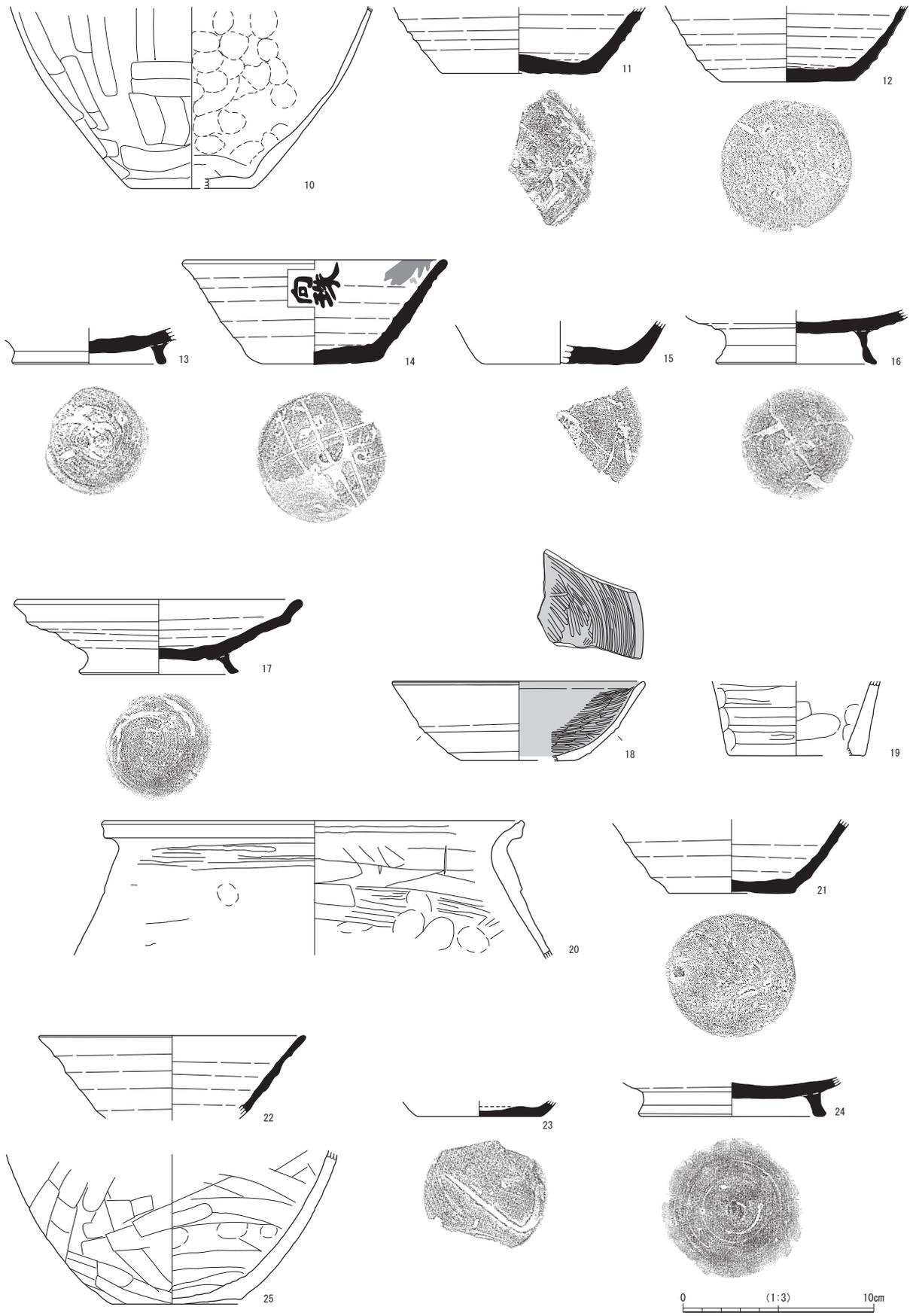
SI05竈

- | | | | | | | | |
|---|----------|------|---|----|---------|------|--|
| 1 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや弱い。ローム (φ1mm) を少量、焼土 (φ1mm) を微量、灰白色粘土 (φ1~3mm) を少量含む。天井部。 | 7 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1~2mm) を少量、灰白色粘土 (φ5~10mm) を中量含む。袖部。 |
| 2 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1mm) を中量、焼土 (φ1mm) を微量、灰白色粘土 (φ1~3mm) を少量含む。袖部。 | 8 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1~2mm) を微量、灰白色粘土 (φ5~10mm) を中量含む。奥壁部。 |
| 3 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 粘性やや弱い。しまり強い。ローム (φ1~5mm) を少量含む。 | 9 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性やや強い。しまり強い。ローム (φ1mm) を少量、灰白色粘土 (φ10~20mm) を中量含む。奥壁部。 |
| 4 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ1~5mm) を少量含む。 | 10 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまり非常に強い。ローム (φ1~2mm) を中量、灰白色粘土 (φ5~10mm) を少量含む。袖部。 |
| 5 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまり強い。ローム (φ1~2mm) を微量、焼土 (φ1~5mm) を中量含む。火床部。 | 11 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1~10mm) を中量、焼土 (φ1~5mm) を微量含む。 |
| 6 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1~3mm) を少量、焼土 (φ1mm) を微量含む。火床部。 | | | | |

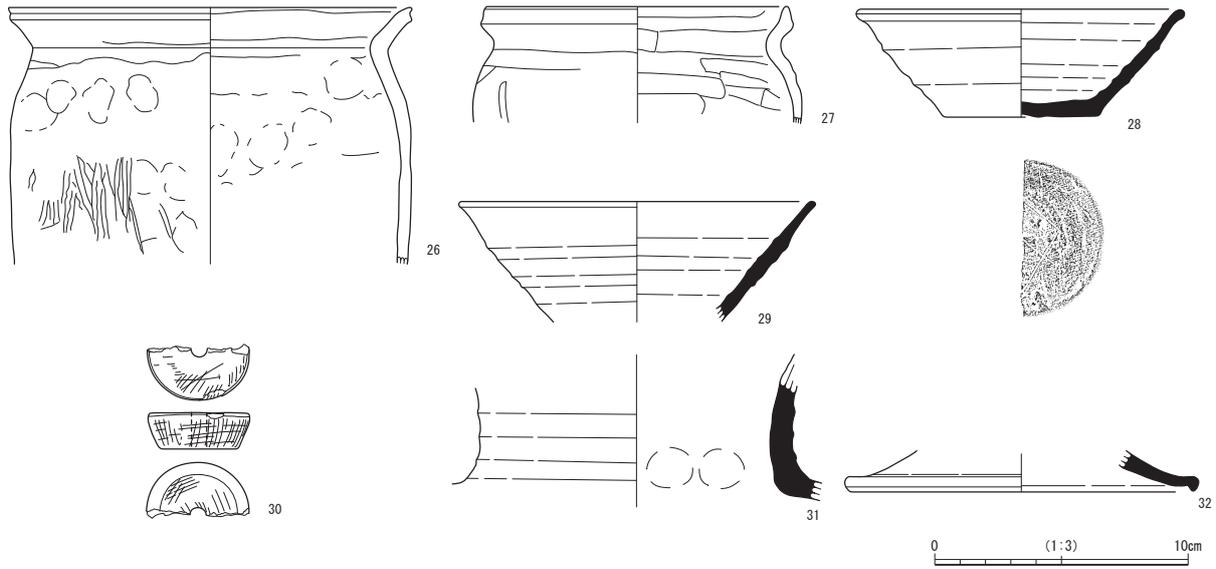
第23図 SI05竈 平・断面図



第 24 図 SI05 出土遺物 (1)



第 25 図 SI05 出土遺物 (2)



第26図 SI05 出土遺物（3）

第9表 SI05 出土遺物観察表（1）

挿図番号 図版番号	出土 位置	種別	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
24-1 7-1-1	B区 SI05	土師器	坏	—	ほぼ 完形	12.3	6.4	3.8	ロクロ整形，底部全面回転 ヘラケズリ，内面ミガキお よび黒色処理，底部墨書あり 「真布」か。	黒色粒・白色粒・ 海綿状骨針	良	外面：橙色 (5YR7/6) 内面：黒色 (2.5Y2/1)	墨書土器
24-2 7-1-2	B区 SI05	土師器	坏	口縁～ 底部	40%	(13.2)	(6.7)	<3.7>	ロクロ整形，底部全面回転 ヘラケズリ，内面ミガキ・ 黒色処理，底部墨書あり 「卍」か。体部側面にも判 読不能な墨書あり。	白雲母・黒色粒・ 白色粒・赤色粒・ 小礫	良	外面：橙色 (5YR6/6) 内面：黒色 (2.5Y2/1)	墨書土器
24-3 7-1-3	B区 SI05	土師器	坏	口縁～ 底部	40%	13.6	4.9	4.5	ロクロ整形，底部全面回転 ヘラケズリ，内面ミガキお よび黒色処理，外面底部黒 斑あり，一部煤付着。	黒雲母・黒色粒・ 白色粒・海面状骨 針・小礫	良	外面：にぶい橙色 (7.5YR5/3) 内面：黒色 (2.5Y2/1)	摩耗剥落
24-4 7-1-4	B区 SI05	土師器	埴	底部	10%	—	6.5	<1.8>	ロクロ整形，底部全面回転 ヘラケズリ，貼付け高台， 内面ハケ，ミガキおよび 黒色処理，底部の凹凸は成 形時・焼成時の歪みか。	白雲母・黒雲母・ 黒色粒・白色粒・ 赤色粒・海綿状骨 針・小礫	良	外面：にぶい褐色 (7.5YR6/6) 内面：黒色 (2.5Y2/1)	
24-5 7-1-5	B区 SI05	土師器	坏	底部	10%	—	(6.0)	<1.8>	ロクロ整形，底部全面回転 ヘラケズリ，内面ミガキ・ 黒色処理。外面底部黒斑有 り。	金雲母・黒色粒・ 白色粒	良好	外面：橙色 (7.5YR7/6) 内面：黒色 (2.5Y2/1)	丁寧なミガキ
24-6 7-1-6	B区 SI05	土師器	高台 付皿	口縁～ 底部	40%	14.0	8.0	<1.7>	ロクロ整形，貼付け高台， 内面ミガキおよび黒色処 理，内外面一部煤付着。	白雲母・黒色粒・ 白色粒	良	外面：橙色 (7.5YR6/6) 内面：黒色 (2.5Y2/1)	高台欠損
24-7 7-1-7	B区 SI05	土師器	甗	底部	10%	—	6.4	<1.5>	輪積み成形，内外面ナデ， 底部木葉痕あり。	黒雲母・白雲母・ 黒色粒・白色粒・ 砂粒・小礫	良	内外面：橙色 (7.5YR6/6)	
24-8 7-1-8	B区 SI05	土師器	高台 付皿	底部	20%	—	6.0	1.0	ロクロ整形，底部全面回転 ヘラケズリ，削り出し高台， 内面ハケ，ミガキ調整およ び黒色処理。	白雲母・白色粒	良好	外面：橙色 (7.5YR7/6) 内面：黒色 (2.5Y2/1)	高台低く，柱 状高台状。 41・43に似 る
24-9 7-1-9	B区 SI05	土師器	鉢	口縁～ 底部	50%	20.6	11.0	8.0	ロクロ整形，静止糸切り後， 底部外周部および体部下 端手持ちヘラケズリ，内 面ハケ，ミガキ調整およ び黒色処理。	黒色粒・白色粒・ 赤色粒	良好	外面：橙色 (5YR6/8) 内面：黒色 (2.5Y2/1)	一部摩耗する
25-10 7-1-10	B区 SI05	土師器	甗	底部～ 胴部	20%	—	(6.4)	<9.6>	輪積み成形，外面胴部縦位 の，底部横位のハケ後ナデ， 内面ハケ後ナデ，指頭圧痕 顕著，外面一部煤付着。	黒雲母・白雲母・ 黒色粒・白色粒・ 赤色粒・小礫	良	外面：橙色 (5YR6/6) 内面：にぶい褐色 (7.5Y7/4)	常総型甗
25-11 7-1-11	B区 SI05	須恵器	坏	胴部～ 底部	40%	—	(8.0)	<3.5>	ロクロ整形，底部全面回転 ヘラケズリ。	黒色粒・白色粒・ 小礫	良好	内外面：褐灰色 (10YR6/1)	黒色粒多量
25-12 7-1-12	B区 SI05	須恵器	坏	体部～ 底部	70%	—	7.0	<4.0>	ロクロ整形，底部全面回転 ヘラケズリ。	黒色粒・白色粒・ 海綿状骨針・小礫	良好	内外面：明褐灰色 (7.5YR7/2)	稜が強い。赤 茶色。
25-13 7-1-13	B区 SI05	須恵器	高台 付坏	底部	20%	—	(8.0)	<1.9>	ロクロ整形，底部全面回転 ヘラケズリ，貼付け高台。	黒色粒・白色粒・ 海綿状骨針・小礫	良好	外面：褐灰色 (10YR5/1) 内面：褐灰色 (7.5YR5/2)	

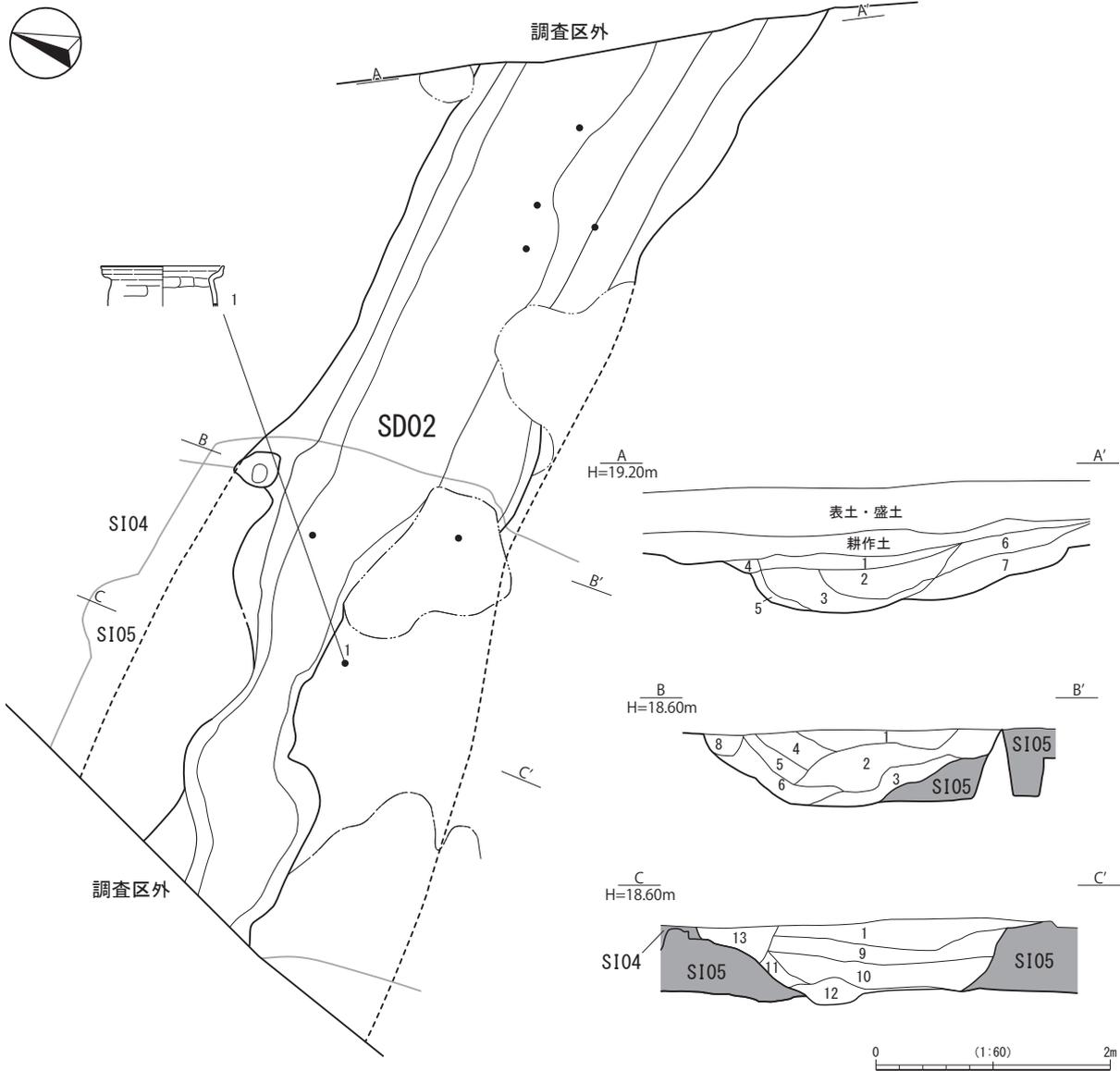
第 10 表 SI05 出土遺物観察表 (2)

挿図番号 図版番号	出土 位置	種別	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
25-14 7-1-14	B区 SI05	須恵器	坏	口縁～ 底部	60%	(13.6)	5.6	5.5	ロクロ整形。底部へラ書き「卅」か、体部内面墨書「向珠」か。口縁内面に一部煤付着。	黒色粒・白色粒・小礫	良好	内外面：灰白色 (2.5YR7/1)	墨書土器 灯明皿か
25-15 7-1-15	B区 SI05	須恵器	坏	底部	20%	—	(8.2)	<2.3>	ロクロ整形。底部全面回転へラケズリ後、ナデ、底部へラ書き有り「十」か。	黒色粒・白色粒・赤色通・小礫	良好	内外面：にぶい赤褐色 (5YR5/3)	
25-16 7-1-16	B区 SI05	須恵器	盤	底部	20%	—	(8.3)	<2.8>	ロクロ整形、底部へラ起こし後ナデ、貼付け高台	黒色粒・白色粒・小礫	良好	内外面：明褐色 (7.5YR7/1)	
25-17 7-1-17	B区 SI05	須恵器	盤	—	80%	8.0	14.8	3.95	ロクロ整形、底部全面回転へラケズリ、貼付け高台。	黒色粒・白色粒・海綿状骨針・小礫	良好	内外面：明褐色 (7.5YR7/1)	木葉下窯跡群 産
25-18 7-1-18	B区 SI05	土師器	坏	口縁部 ～底部	20%	(13.0)	(6.0)	4.2	ロクロ整形、底部へラ切り、内面ミガキおよび黒色処理。	白雲母・黒色粒・赤色粒	良	外面：橙色 (7.5YR8/4) 内面：黒色 (2.5Y2/1)	
25-19 7-1-19	B区 SI05	土師器	甔	底部	10% 未満	—	(7.0)	<3.9>	輪積み成形、外面横ハケ、内面ナデ、指頭圧痕あり、外面煤付着。	黒色粒・赤色粒	良	外面：にぶい橙色 (7.5YR6/6) 内面：浅黄色 (7.5YR8/6)	被熱摩耗剥落
25-20 7-1-20	B区 SI05	土師器	甗	口縁部	10%	(22.0)	—	<7.1>	輪積み成形、口縁部摘み出し、口縁強いヨコナデ、内外面横位のハケ後ナデ、指頭圧痕あり。	黒色粒・白色粒・白雲母・	良好	内外面：橙色 (5YR6/8)	摩耗剥落する
25-21 7-1-21	B区 SI05	須恵器	坏	胴部～ 底部	60%	—	6.6	<3.9>	ロクロ整形、底部全面回転へラケズリ後ナデ。	海綿状骨針・小礫	良好	内外面：にぶい橙色 (7.5Y6/4)	木葉下窯跡群 産
25-22 7-1-22	B区 SI05	須恵器	坏	口縁部 ～胴部	10%	(13.8)	—	<4.5>	ロクロ整形。外面に一部煤付着。	白色粒・海綿状骨針・小礫	良好	内外面：灰色 (5Y5/1)	木葉下窯跡群 産
25-23 7-1-23	B区 SI05	須恵器	坏	底部	10%	—	6.4	<0.8>	ロクロ整形、底部全面回転へラケズリ後ナデ。底面へラ書き「一」か。	白色粒・海綿状骨針・小礫	良好	内外面：灰黄色 (2.5Y7/2)	
25-24 7-1-24	B区 SI05	須恵器	盤	底部	20%	—	(9.5)	<1.8>	ロクロ整形、底部全面回転へラケズリ後ナデ、貼付け高台、底部線描か。	黒色粒・海面状骨針・小礫	良好	内外面：灰色 (5Y5/1)	木葉下窯跡群 産
25-25 7-1-25	B区 SI05	土師器	甗	胴部～ 底部	10%	—	(6.7)	<7.9>	輪積み成形、外面ハケ、ナデ、内面ナデ、指頭圧痕有り、底部黒斑有り。	金雲母・黒雲母・黒色粒・白色粒・赤色粒・海綿状骨針・小礫	良	外面：橙色 (2.5YR6/6) 内面：にぶい赤褐色 (5YR5/4)	
26-26 7-1-26	B区 SI05	土師器	甗	口縁部 ～胴部	10%	(16.0)	—	<10.2>	輪積み成形、口縁強いヨコナデ、外面一部ミガキ、指頭圧痕あり、ナデ、指頭圧痕あり、口縁部摘み出し。	白雲母・黒雲母・黒色粒・白色粒・赤色粒・海綿状骨針	良	内外面：にぶい橙色 (5YR6/4)	摩耗剥落する
26-27 7-1-27	B区 SI05	土師器	甗	口縁部 ～胴部	10%	(11.8)	—	<4.6>	輪積み成形、口縁ヨコナデ、内外面ナデ、口縁部摘み出し。	白雲母・黒色粒・白色粒・赤色粒・海綿状骨針・小礫	良	内外面：橙色 (5YR6/8)	摩耗剥落する
26-28 7-1-28	B区 SI05	須恵器	坏	口縁部 ～底部	40%	(6.3)	(6.0)	4.3	ロクロ整形、底部全面回転へラケズリ後ナデ、底部へラ書き「廿」か。	白色針状物質・小礫	良好	内外面：灰色 (5Y5/1)	木葉下窯跡群 産
26-29 7-1-29	B区 SI05	須恵器	坏	口縁部 ～胴部	10%	(13.8)	—	<4.7>	ロクロ整形。	白色針状物質・小礫	良好	内外面：灰色 (5Y5/1)	一部赤茶色。
26-30 7-1-30	B区 SI05	石製品	紡錘 車	—	50%	直径 4.0	穿孔径 0.75	1.5	穿孔部内壁平滑、全体的に調整丁寧。穿孔径 7.5 mm。表面全体に細かい擦過痕あり。	—	—	—	
26-31 7-1-31	B区 SI05	須恵器	甗	頸部	10% 未満	—	—	<6.0>	輪積み成形、内外面ナデ、指頭圧痕あり。	黒雲母・黒色粒・白色粒・海綿状骨針・小礫	良好	外面：褐色 (10YR4/1) 内面：褐色 (10YR6/1)	木葉下窯跡群 産か
26-32 7-1-32	B区 SI05	須恵器	蓋	口縁部	10% 未満	(13.6)	—	<1.6>	ロクロ整形。	黒色粒・白色粒・海綿状骨針	良好	外面：黒褐色 (5YR3/1) 内面：褐色 (5YR4/1)	
— 7-1-33	B区 SI05	土師器	坏	体部～ 底部	10%	—	(8.0)	<1.5>	ロクロ整形、底部へラ切り後、内面ミガキおよび黒色処理、外面一部煤付着。	白雲母・白色粒・赤色粒	良	外面：にぶい橙色 (7.5YR7/4) 内面：黒色 (2.5Y2/1)	
— 7-1-34	B区 SI05	土師器	坏	底部	10% 未満	—	<2.8>	<0.6>	ロクロ整形、底部へラ起こし、内面ミガキおよび黒色処理。底部墨書あり「卍」か。	白雲母・白色粒・海綿状骨針	良	外面：浅黄色 (5YR6/6) 内面：黒色 (2.5Y2/1)	
— 7-1-35	B区 SI05	土師器	甗	口縁～ 胴部	10% 未満	(13.4)	—	<4.7>	輪積み成形、内外面ナデ、摘み出し口縁、内外面に煤付着。	黒雲母・白雲母・黒色粒・白色粒・砂粒	良	外面：にぶい黄褐色 (10YR5/4) 内面：にぶい褐色 (7.5YR5/4)	
— 7-1-36	B区 SI05	須恵器	坏	口縁～ 体部	10%	(8.0)	—	<3.0>	ロクロ整形。外面一部自然釉付着	黒色粒・白色粒・海綿状骨針・小礫	良好	内外面：灰色 (5Y6/1)	木葉下窯跡群 産
— 7-1-37	B区 SI05	須恵器	蓋	端部	10% 未満	—	—	<1.1>	ロクロ整形、自然釉厚い。	黒雲母・黒色粒・白色粒	良好	外面：灰色 (5Y4/1) 内面：灰色 (5Y5/1)	

溝跡

SD02 (第27・28図, 第11表, 図版4-5・4-6・8-1)

B区中央北側で検出した溝跡。主軸はN-17°-Wを指し, 両端とも調査区外に延伸する。SI04とSI05を切っており, 底面はSI05床面下にまで達している。規模は, 長さ



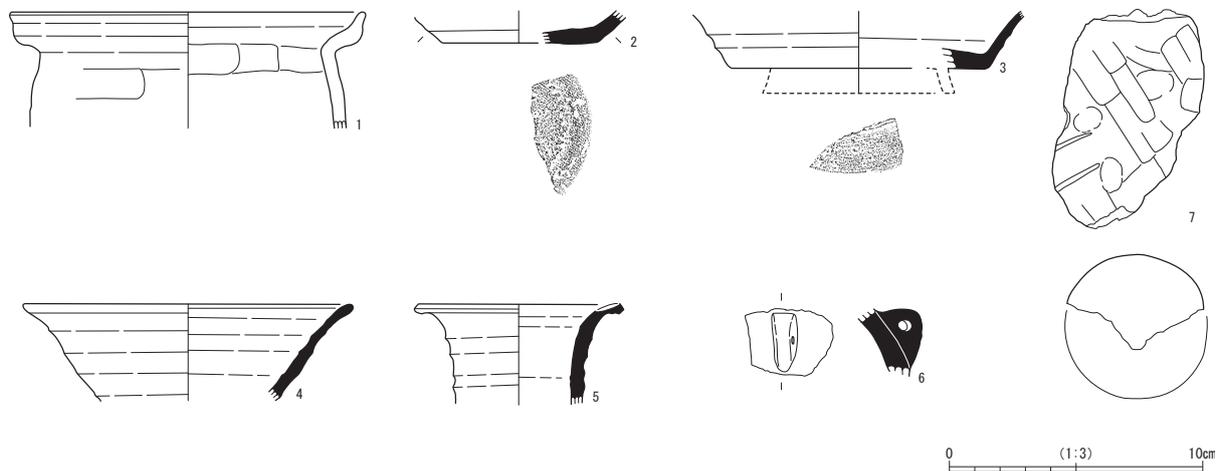
SD02

- | | | | | | | | |
|---|---------|------|--|----|---------|------|--------------------------------------|
| 1 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ5~20mm) を少量含む。 | 8 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ10~30mm) を多量含む。 |
| 2 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘性やや弱い。しまり強い。ローム (φ1~5mm) を中量含む。 | 9 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ1~3mm) を多量含む。 |
| 3 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘性やや弱い。しまり強い。ローム (φ1~20mm) を多量、炭化物 (φ1mm) を微量含む。 | 10 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1~10mm) を少量含む。 |
| 4 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ1~3mm) を多量含む。 | 11 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや弱い。しまりやや弱い。ローム (φ1~5mm) を少量含む。 |
| 5 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや弱い。しまりやや弱い。ローム (φ1~40mm) を多量含む。 | 12 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ5~10mm) を少量含む。 |
| 6 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 粘性やや弱い。しまり強い。ローム (φ1mm) を微量含む。 | 13 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ5~40mm) を中量含む。 |
| 7 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ1~5mm) を少量含む。 | | | | |

第27図 SD02 平・断面図

8.96 m, 幅 1.97 ~ 3.0 m, 最大深度 0.76 m を測る。断面形は底面が窪んだ皿形を呈し、壁面の立ち上がりは、北側に比して南側の方が緩やかに開く。底面には凹凸が認められ、中央部は一段低く窪んでいる。性格は不明だが、平断面および堆積土の様相から、区画施設および排水施設の可能性が考えられる。

SD02 からは、土師器・須恵器・土製品等、計 137 点の遺物が出土しており、8 点を掲載し、7 点を図化した。1 は土師器の甕で、器面の摩耗が著しい。2・4 は須恵器の坏である。いずれもロクロ整形で、胎土には海綿状骨針・小礫を含む。3 は盤で、5 は長頸瓶の頸部、6 は有耳壺の耳で、ケズリによる整形が施されている。7 は土製の支脚で、外面には斜位のハケとナデが施されている。出土した遺物の主体は概ね 9 世紀第 1 四半期～第 2 四半期の所産と考えられ、SI04・05 の遺物が SD02 構築時に多量混入している可能性が高いものと思われるため、遺構の帰属時期はそれ以降と推定される。



第 28 図 SD02 出土遺物

第 11 表 SD02 出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 位置	種別	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
28-1 8-1-1	B区 SD02	土師器	甕	口縁部	10% 未満	(14.0)	—	<4.6>	口縁部ヨコナデ、頸部横ハケ、胴部ナデ、内面ナデ、摘み出し口縁。	黒雲母・白色粒・ 黒色粒・赤色粒・ 海綿状骨針	良	外面：橙色 (2.5YR6/8) 内面：橙色 (2.5YR6/6)	摩耗剥落
28-2 8-1-2	B区 SD02	須恵器	坏	底部	10% 未満	—	(6.0)	<1.25>	ロクロ整形，底部全面回転ヘラケズリ。	黒雲母・白色粒・ 黒色粒・海綿状骨 針	良好	内外面：灰色 (5Y5/1)	
28-3 8-1-3	B区 SD02	須恵器	盤	底部	10% 未満	—	(10.0)	<3.25>	ロクロ整形。	黒色粒・白色粒・ 海綿状骨針・小礫	良好	外面：灰色 (5YR4/1) 内面：灰色 (5Y5/1)	木葉下窯跡群 産
28-4 8-1-4	B区 SD02	須恵器	坏	口縁部	10%	(12.8)	—	<3.85>	ロクロ整形，外面煤付着。	黒色粒・白色粒・ 海綿状骨針・小礫	良好	内外面：灰色 (5Y5/1)	木葉下窯跡群 産か
28-5 8-1-5	B区 SD02	須恵器	長頸 瓶	頸部	10% 未満	(7.8)	—	<4.0>	ロクロ整形，内面自然釉付着。	黒雲母・白雲母・ 黒色粒・白色粒・ 海綿状骨針・小礫	良好	内外面：灰色 (5Y5/1)	
28-6 8-1-6	B区 SD02	須恵器	耳壺	胴部	10% 未満	—	—	<3.05>	内面ナデ，自然釉葉付着，耳は焼成後削って調整。	白色粒・海綿状骨 針・小礫	良好	内外面：黄灰色 (2.5Y5/1)	
28-7 8-1-7	B区 SD02	土製品	支脚	体部	10%	—	—	<9.3>	手捏ね整形，外面斜位のハケ，ナデ，指頭圧痕有り。	黒色粒・白色粒・ 赤色粒・海綿状骨 針・小礫	良	橙色 (7.5YR6/6)	
— 8-1-8	B区 SD02	須恵器	甕	胴部	10% 未満	—	—	<8.0>	輪積み成形，内面ナデ，指頭圧痕有り，外面自然釉。	黒雲母・黒色粒・ 白色粒・小礫	良好	外面：灰色 (5YR6/1) 内面：灰色 (5Y5/1)	

小穴

P 09 (第 29 図)

B 区北側東壁付近に位置する小穴。平面形は N - 90° - E 軸の楕円形で、規模は長軸 0.42 m, 短軸 0.3m, 深さは 0.19 m を測る。断面形は皿形に近い。壁面の立ち上がりはやや急で、底面には僅かに凹凸が認められる。時期および性格は不明。

遺物の出土はなかった。

P 10 (第 29 図)

B 区北側東壁付近に位置する小穴。平面形は N - 90° - E 軸の楕円形で、規模は長軸 0.54 m, 短軸 0.34m, 深さは 0.22 m を測る。断面形は深い皿形を呈する。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面には僅かに凹凸が認められる。時期および性格は不明。

遺物の出土はなかった。

P 11 (第 29 図)

B 区北側東壁付近に位置する小穴。平面形は N - 82° - E 軸の楕円形で、規模は長軸 0.32 m, 短軸 0.28m, 深さは 0.37 m を測る。断面形は U 字形を呈する。壁面は垂直に立ち上がり、底面には僅かに凹凸が認められる。時期は不明だが、柱穴・杭穴の可能性が考えられる。

遺物の出土はなかった。

P 12 (第 29 図, 第 12 表, 図版 8-2)

B 区北側に位置する小穴。P 13 に切られる。平面形は N - 11° - E 軸の楕円形で、規模は長軸 0.52 m, 短軸 0.44m, 深さは 0.79 m を測る。断面形は U 字形を呈する。壁面は僅かに開くがほぼ垂直に立ち上がり、底面には僅かに凹凸が認められる。出土遺物の帰属時期は 8 ~ 9 世紀代で、柱穴・杭穴の可能性が考えられる。

P 12 からは、須恵器坏・土師器甕が出土している。1 は須恵器の坏で、ロク口整形による稜が明瞭に認められる。全体的に暗赤褐色を呈している。胎土には海綿状骨針・小礫を含む。2 は土師器の甕で、底部には木葉痕が認められる。

P 13 (第 29 図)

B 区北側に位置する小穴。P 12 を切る。平面形は N - 23° - W 軸の不整形で、規模は長軸 0.62 m, 短軸 0.32m, 深さは 0.20 m を測る。断面形は皿形を呈する。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面には凹凸が認められる。時期および性格は不明。

P 13 からは、土師器甕が出土している。

P 14 (第 29 図, 第 12 表, 図版 8-2)

B 区南東端に位置する小穴。平面形は N - 36° - E 軸の楕円形で、規模は長軸 0.60 m, 短軸 0.52m, 深さは 0.10 m を測る。断面形は皿形を呈する。壁面の立ち上がりは緩やかで、

底面には凹凸が認められる。時期は不明だが、植痕の可能性が考えられる。

P 14からは、須恵器の坏が出土している。

P 15 (第30図)

B区南東側に位置する小穴。P 16に切られる。平面形はN - 14° - W軸の楕円形で、規模は長軸 0.26 m, 短軸 0.2m, 深さは 0.17 mを測る。断面形はU字形を呈する。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面には僅かに凹凸が認められる。時期および性格は不明。

遺物の出土はなかった。

P 16 (第30図)

B区南東側に位置する小穴。P 15・P 17を切る。平面形はN - 14° - W軸の不整形で、規模は長軸 0.46 m, 短軸 0.38m, 深さは 0.53 mを測る。断面形は方形に近い。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面には僅かに凹凸が認められる。近・現代の芋掘り穴の可能性が考えられる。

遺物の出土はなかった。

P 17 (第30図)

B区南東側に位置する小穴。P 16に切られる。平面形はN - 14° - W軸の楕円形で、規模は長軸 0.31 m, 短軸 0.22m, 深さは 0.10 mを測る。断面形は皿形に近い。壁面は緩やかに立ち上がり底面には僅かに凹凸が認められる。時期および性格は不明。

遺物の出土はなかった。

P 18 (第30図)

B区南西側に位置する小穴。上部に攪乱を受けている。平面形はN - 82° - W軸の楕円形で、規模は長軸 0.42 m, 短軸 0.4m, 深さは 0.45 mを測る。断面形はU字形を呈する。壁面は僅かに外に開くがほぼ垂直に立ち上がり、底面には僅かに凹凸が認められる。時期は不明だが、遺構の形状から柱穴・杭穴の可能性が考えられる。

遺物の出土はなかった。

P 19 (第30図)

B区南東側に位置する小穴。P 16に切られる。平面形はN - 70° - W軸の楕円形で、規模は長軸 0.46 m, 短軸 0.39m, 深さは 0.48 mを測る。断面形はU字形を呈する。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面には僅かに凹凸が認められる。時期および性格は不明。

遺物の出土はなかった。

P 20 (第30図)

B区南西側に位置する小穴。平面形はN - 15° - E軸の楕円形で、規模は長軸 0.35 m, 短軸 0.25m, 深さは 0.44 mを測る。断面形は半円形に近い。壁面は緩やかに立ち上がり、底面には僅かに凹凸が認められる。時期および性格は不明。

P 20からは、土師器の甕が出土している。

P 21 (第30図)

B区北側に位置する小穴。平面形はN-69°-E軸の楕円形で、規模は長軸0.32m、短軸0.27m、深さは0.80mを測る。断面形は半円形に近い。壁面は緩やかに立ち上がり、底面には僅かに凹凸が認められる。時期および性格は不明。

遺物の出土はなかった。

P 22 (第30図)

B区南西側に位置する小穴。平面形はN-65°-W軸の楕円形で、規模は長軸0.23m、短軸0.21m、深さは0.19mを測る。断面形はU字形を呈する。壁面は僅かに外に開くがほぼ垂直に立ち上がり、底面には僅かに凹凸が認められる。時期は不明だが、遺構の形状から杭穴の可能性が考えられる。

遺物の出土はなかった。

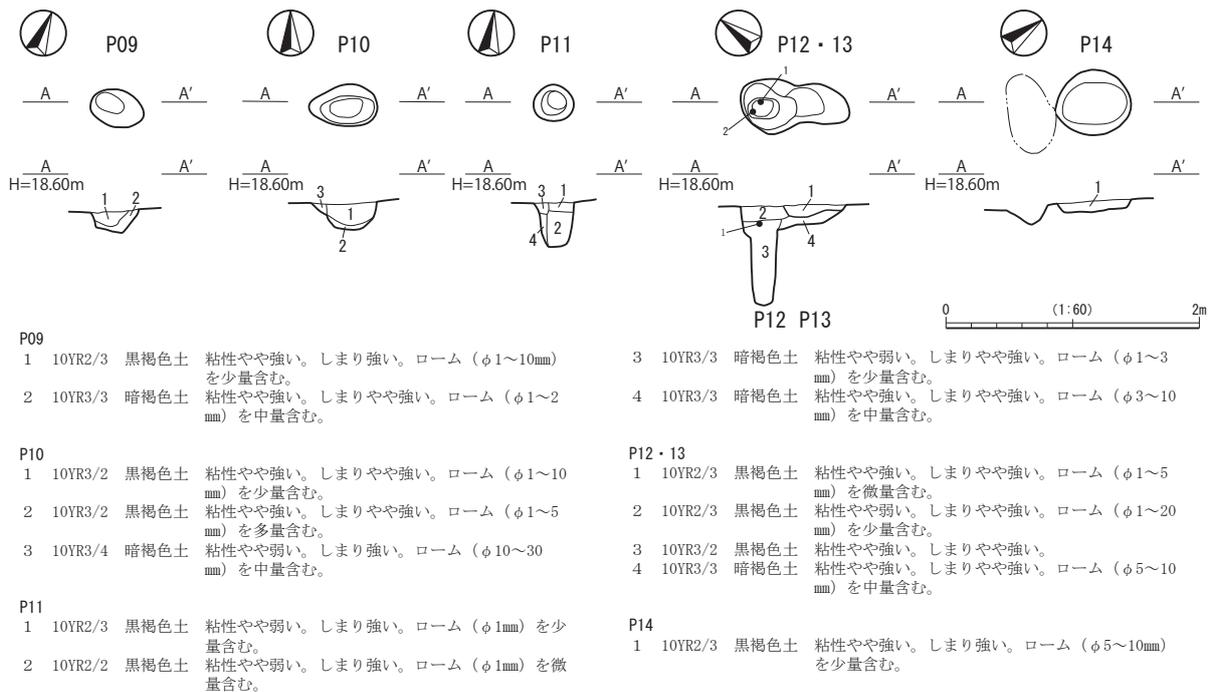
P 23 (第30図)

B区北側に位置する小穴。平面形はN-3°-W軸の円形で、断面形はU字形を呈する。規模は径0.24m、深さは0.16mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面には僅かに凹凸が認められる。時期は不明だが、遺構の形状から杭穴の可能性が考えられる。

遺物の出土はなかった。

P 24 (第30図)

B区に位置する小穴。平面形はN-21°-W軸の楕円形で、規模は長軸0.24m、短軸0.19m、深さは0.53mを測る。断面形はU字形を呈する。壁面は垂直に立ち上がり、掘



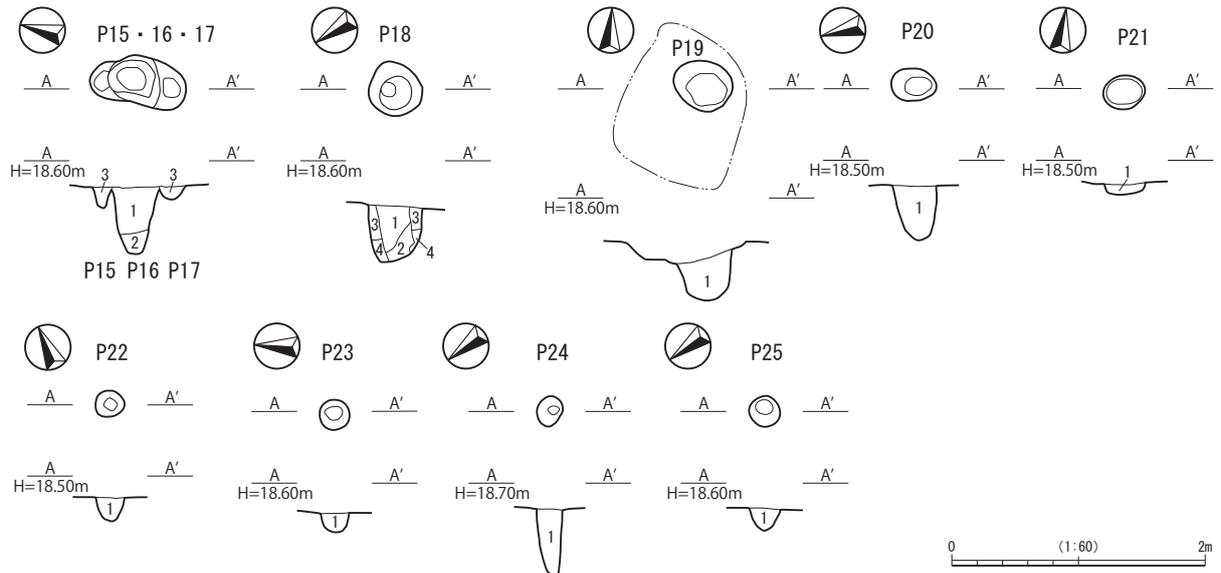
第29図 B区小穴 平・断面図 (1)

削痕跡と思われる凹凸が著しい。遺構の形状から、近・現代の芋掘り穴の可能性が考えられる。遺物の出土はなかった。

P 25 (第 30 図)

B 区南東側に位置する小穴。平面形は $N - 37^\circ - E$ 軸の楕円形で、規模は長軸 0.24 m、短軸 0.22 m、深さは 0.18 m を測る。断面形は V 字形に近い。壁面は急に立ち上がり、底面には僅かに凹凸が認められる。時期は不明だが、遺構の形状から杭穴の可能性が考えられる。

遺物の出土はなかった。



- P15・16・17**
- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや強い。しまりやや弱い。ローム (φ1~20mm) を多量含む。
 - 2 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強い。しまりやや弱い。ローム (φ1~5mm) を少量含む。
 - 3 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1mm) を微量含む。
- P18**
- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ1mm) を微量含む。
 - 2 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1mm) を少量含む。
 - 3 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強い。しまり強い。ローム (φ1mm) を少量含む。
 - 4 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強い。しまりやや弱い。ローム (φ10~30mm) を多量含む。
- P19**
- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ1~10mm) を少量含む。

- P20**
- 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや弱い。しまり強い。ローム (φ1~5mm) を少量含む。
- P21**
- 1 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや弱い。しまり強い。ローム (φ5~20mm) を少量含む。
- P22**
- 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ5~10mm) を中量含む。
- P23**
- 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ5~30mm) を中量含む。
- P24**
- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや弱い。しまりやや弱い。ローム (φ5~20mm) を多量含む。
- P25**
- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ10~30mm) を少量含む。

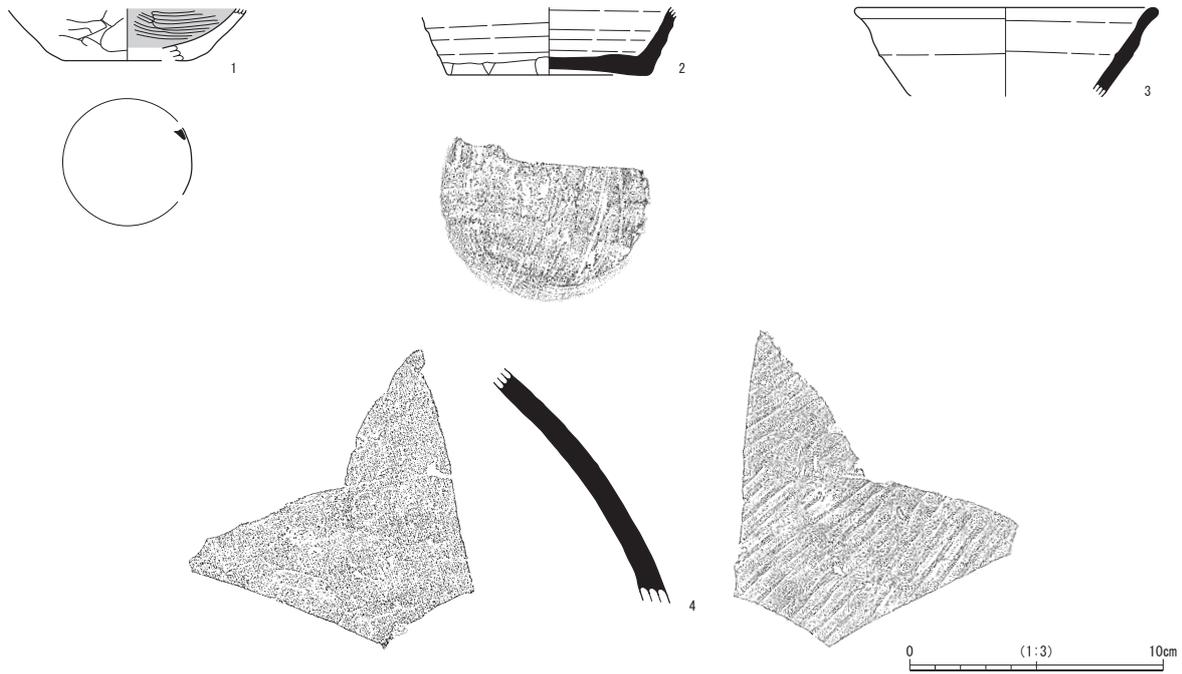
第 30 図 B 区小穴 平・断面図 (2)

第 12 表 B 区小穴出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 位置	種別	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
— 8-2-1	B 区 P12	須恵器	坏	口縁~ 胴部	10% 未満	(10.0)	—	<2.5>	ロクロ整形。	黒色粒・白色粒・ 海綿状骨針・小礫	良好	内外面：にぶい褐色 (7.5YR5/3)	稜が強い。 赤茶色。
— 8-2-2	B 区 P12	土師器	甗	底部	10% 未満	—	—	<1.0>	底部木葉痕あり。	黒雲母・金雲母・ 白雲母・白色粒・ 砂粒・小礫	良	内外面：にぶい赤 褐色 (5YR5/4)	
— 8-2-3	B 区 P14	須恵器	坏	口縁~ 胴部	10% 未満	(9.2)	—	<2.0>	ロクロ整形。	黒色粒・白色粒・ 海綿状骨針	良好	内外面：褐灰色 (10YR6/1)	稜が強い

出土遺物（第31図，第13表，図版8-3）

B区出土遺物の総計は，既述の遺構出土遺物を含む974点である。遺構外出土遺物は81点で，いずれも遺構確認面から出土した。5点を掲載し，4点を図化した。1は内面黒色処理が施された土師器の坏で，底部には判読不明な墨書が認められる。2・3は須恵器の坏で，いずれも胎土に海綿状骨針・小礫を含む。4は外面に平行叩きが認められる須恵器の甕片である。5は須恵器の高台付坏の底部片である。8～9世紀代の遺物が主体を成している。



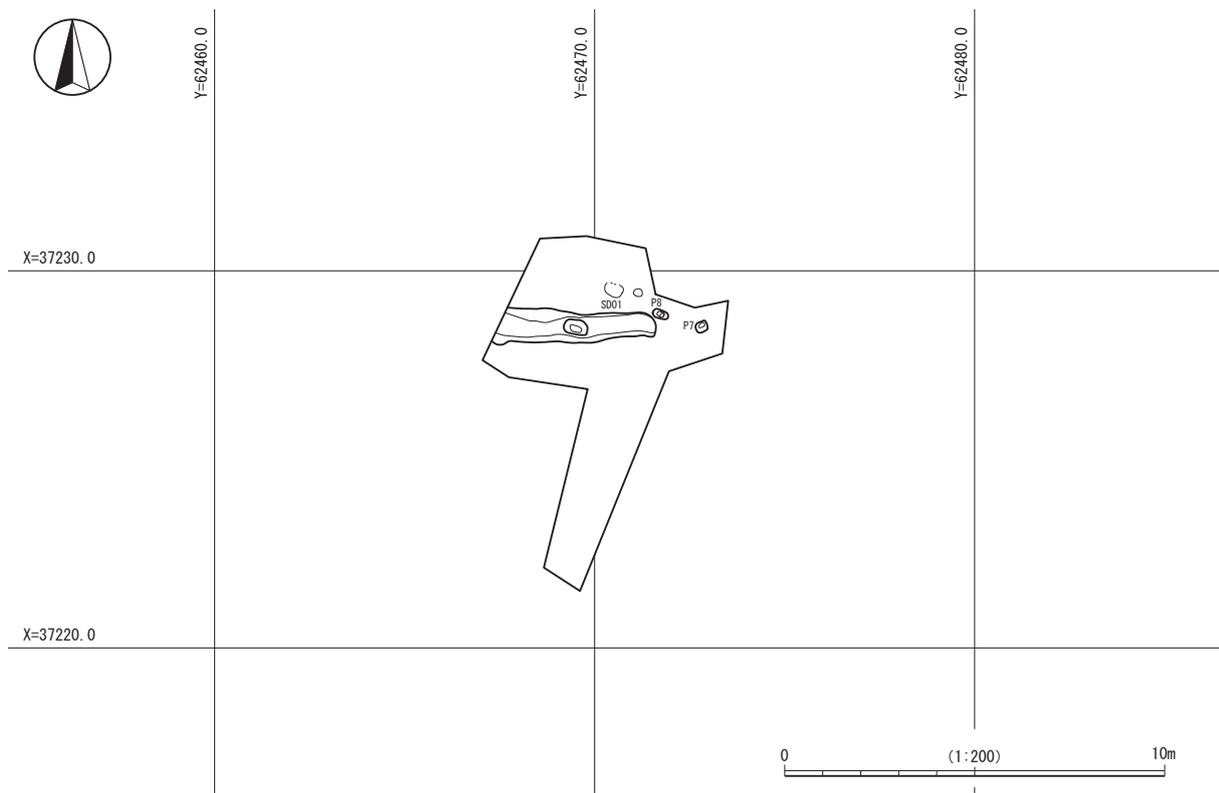
第31図 B区遺構外出土遺物

第13表 B区遺構外出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 位置	種別	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
31-1 8-3-1	B区 確認 面	土師器	坏	胴部～ 底部	10% 未満	—	(5.0)	<2.1>	ロクロ整形，底部全面回転 ヘラケズリ，内面ミガキお よび黒色処理，底部墨書あ り。	白色粒。	良	外面：橙色 (7.5YR6/6) 内面：黒色 (2.5Y2/1)	墨書土器
31-2 8-3-2	B区 確認 面	須恵器	坏	底部	40%	—	8.0	<2.7>	ロクロ整形，底部手持ちヘ ラケズリ。	白色粒・海綿状骨 針・小礫	良好	内外面：黄灰色 (2.5Y5/1)	
31-3 8-3-3	B区 確認 面	須恵器	坏	口縁部 ～胴部	10%	(11.9)	—	<3.6>	ロクロ整形。	白色粒・海綿状骨 針・小礫	良好	内外面：灰色 (2.5Y5/1)	
31-4 8-3-4	B区 確認 面	須恵器	甕	胴部	10% 未満	—	—	<9.3>	輪積み成形，外面平行叩き， 内面指頭圧痕あり。	黒色粒・白色粒・ 小礫	良好	外面：にぶい橙色 (5YR6/4) 内面：褐灰色 (10YR6/1)	木葉下窯跡群 産。赤茶色
— 8-3-5	B区 確認 面	須恵器	高台 付坏	底部	10% 未満	—	(6.8)	<2.1>	ロクロ整形，削り出し高台。	白色粒・海綿状骨 針・小礫	良好	内外面：灰黄色 (2.5Y6/2)	木葉下窯跡群 産

第3項 C区

C区の調査では、地表面下0.9～1.0m（標高17.2～17.5m）で遺構確認を行い、溝跡1条（SD01）、小穴2基（P07・08）の各遺構を検出した。SD01は、市教委が実施した試掘調査の際に確認された遺構である。今次調査の主体となる奈良・平安時代の集落に関わる遺構・遺物の検出はなかった。



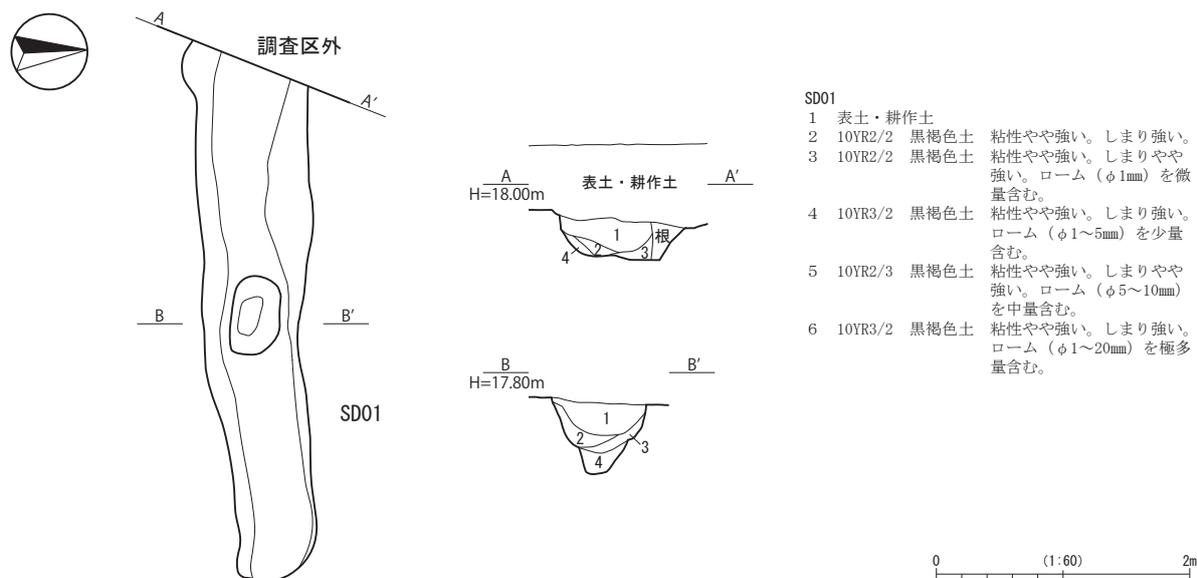
第32図 C区全体図

溝跡

SD01（第33図，図版5-1）

C区北側で検出した溝跡。主軸はN－88°－Wを指し、西端は調査区外に延伸する。規模は、長さ4.26m，幅0.62～0.98m，最大深度0.40mを測る。断面形は概ね逆台形を呈し，壁面は中段で少し外側に開く。底面には僅かに凹凸が認められる。底面で1基の小穴が検出されており，堆積土の様相から，溝跡に伴う付属施設の痕跡と推定される。時期および性格は不明だが，区画施設の可能性が考えられる。

遺物の出土はなかった。



- SD01
- 1 表土・耕作土
 - 2 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや強い。しまり強い。
 - 3 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1mm) を微量含む。
 - 4 10YR3/2 黒褐色土 粘性やや強い。しまり強い。ローム (φ1~5mm) を少量含む。
 - 5 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ5~10mm) を中量含む。
 - 6 10YR3/2 黒褐色土 粘性やや強い。しまり強い。ローム (φ1~20mm) を極多量含む。

第33図 SD01 平・断面図

小穴

P 07 (第34図)

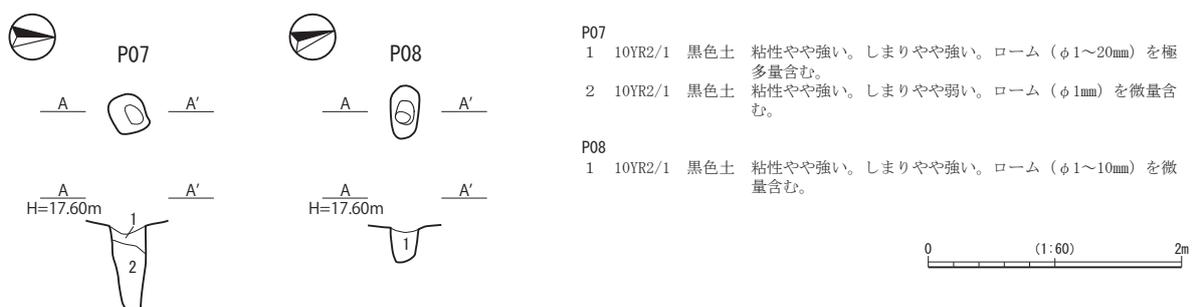
C区北東端に位置する小穴。平面形はN-53°-E軸の方形に近く、規模は長軸0.32m、短軸0.27m、深さは0.77mを測る。断面形はU字形を呈する。壁面は垂直に立ち上がり、掘削痕跡と思われる凹凸が著しい。近・現代の芋掘り穴の可能性が考えられる。

炭化物が出土している。

P 08 (第34図)

C区北端に位置する小穴。平面形はN-78°-W軸の長楕円形で、規模は長軸0.42m、短軸0.23m、深さは0.27mを測る。断面形は西側が開いた逆台形に近い。壁面は概ね垂直に立ち上がり、壁面および底面はほぼ平滑である。近・現代の杭穴の可能性が考えられる。

遺物の出土はなかった。

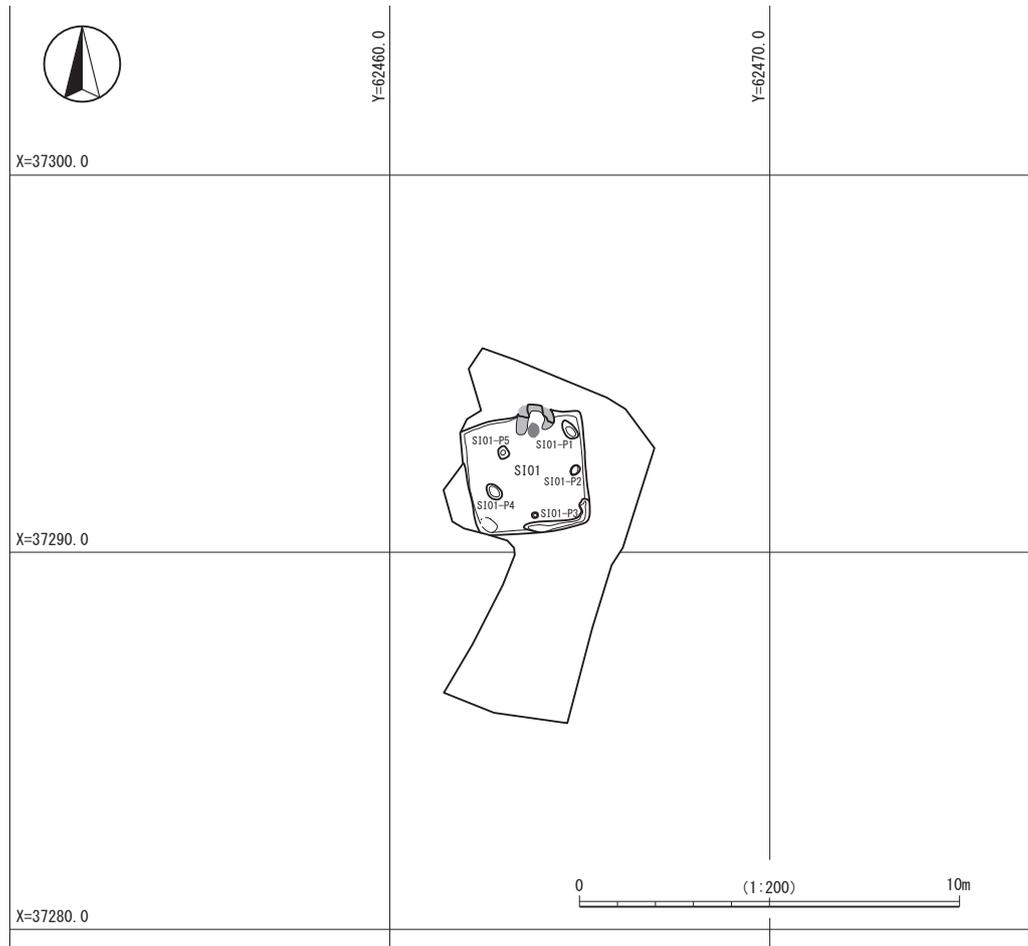


- P07
- 1 10YR2/1 黒色土 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1~20mm) を極多量含む。
 - 2 10YR2/1 黒色土 粘性やや強い。しまりやや弱い。ローム (φ1mm) を微量含む。
- P08
- 1 10YR2/1 黒色土 粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1~10mm) を微量含む。

第34図 C区小穴 平・断面図

第4項 D区

D区の調査では、地表面下0.8～0.9m（標高17.5～17.6m）で遺構確認を行い、竪穴建物跡1軒（SI01）を検出した。SI01は、市教委が実施した試掘調査の際に確認された遺構で、後世の植痕に一部が攪乱されていたが、遺存状態は良好である。

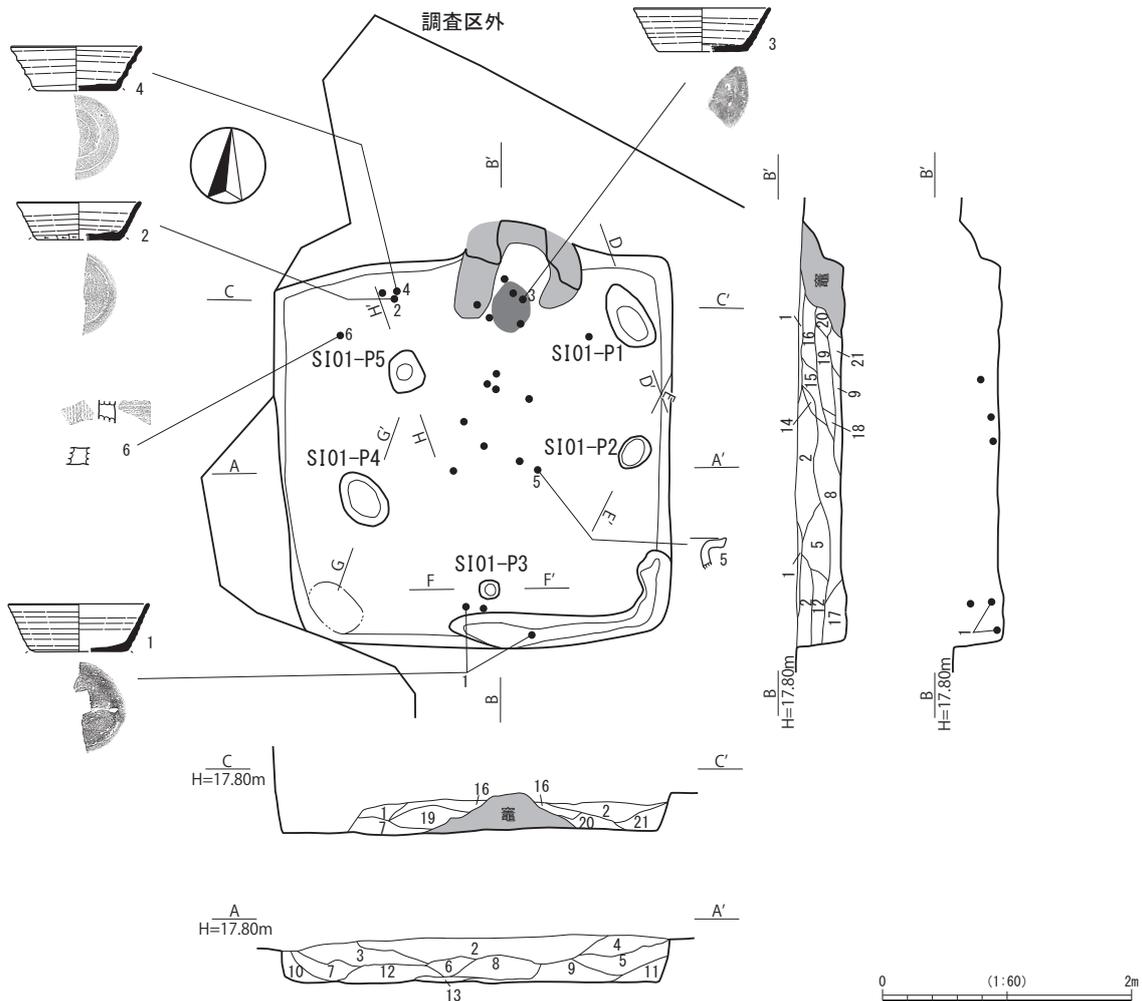


第35図 D区全体図

竪穴建物跡

SI01（第36～39図，第14表，図版5-2・8-4）

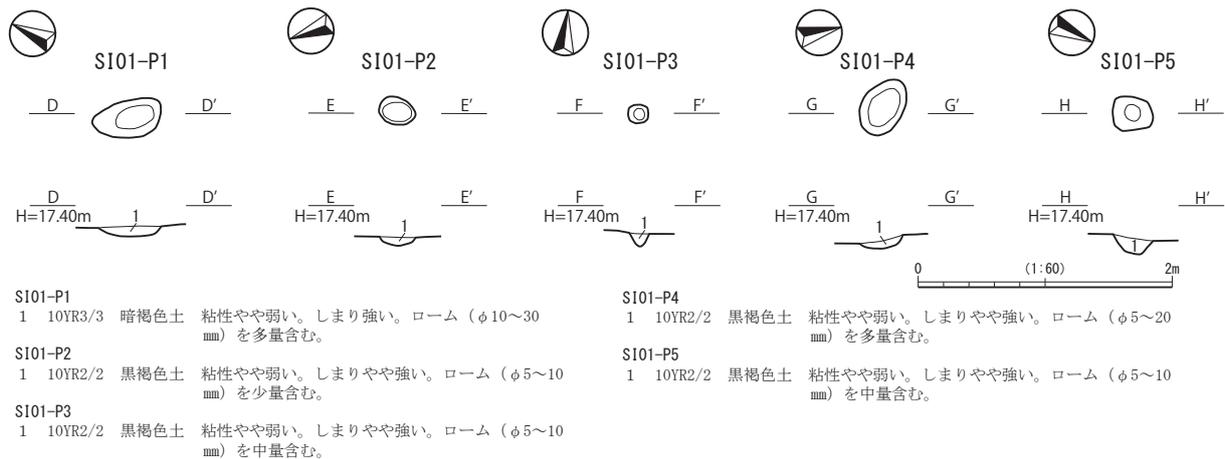
D区北側で検出した小規模な竪穴建物跡。主軸はN-4°-Wを指す。平面形は隅丸方形で、断面形は箱形を呈する。壁面の立ち上がりはほぼ垂直で、壁高は床面から検出面まで0.45m内外を測る。床面の規模は、長軸3.36m，短軸3.19m，床面積は約10.72㎡を測り、やや脆弱な貼り床が施されている。北壁中央に接して竈が設けられている。構築は粗放で、袖や壁芯材の検出はなかった。竪穴外部に煙道を有している。小穴はP1～5の5基が検出された。支柱穴はP1・P2・P4・P5と推定されるが、竪穴プランに対して相似形を成していない点が懸念される。P3は入口施設に関連する小穴と考えられる。南東



SI01

1	10YR3/2	黒褐色土	粘性やや強い。しまりやや弱い。	12	10YR3/1	黒褐色土	粘性やや弱い。しまり強い。ローム (φ1~2mm) を微量含む。
2	10YR2/3	黒褐色土	粘性やや弱い。しまり強い。ローム (φ1~2mm) を少量、焼土 (φ1mm) を微量、炭化物 (φ1mm) を微量含む。	13	10YR4/4	褐色土	粘性やや弱い。しまり強い。ローム (φ1~5mm) を多量、焼土 (φ1mm) を少量含む。
3	10YR2/3	黒褐色土	粘性やや弱い。しまり強い。ローム (φ1~2mm) を少量、焼土 (φ1mm) を微量、炭化物 (φ1mm) を微量含む。	14	10YR2/3	黒褐色土	粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1mm) を中量含む。
4	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ1~5mm) を中量含む。	15	10YR2/3	黒褐色土	粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1~2mm) を多量含む。
5	10YR2/3	黒褐色土	粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ1~5mm) を少量含む。	16	10YR2/3	黒褐色土	粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ1mm) を中量、焼土 (φ1mm) を少量含む。
6	10YR2/2	黒褐色土	粘性やや弱い。しまり強い。ローム (φ1~2mm) を少量含む。	17	10YR2/2	黒褐色土	粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1~10mm) を少量含む。
7	10YR2/2	黒褐色土	粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1mm) を微量含む。	18	7.5YR3/3	暗褐色土	粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1mm) を微量、焼土 (φ1~2mm) を微量、灰褐色砂 (φ1mm) を中量含む。
8	10YR2/2	黒褐色土	粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ1~10mm) を少量含む。	19	7.5YR2/3	極暗褐色土	粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ1~2mm) を微量、焼土 (φ5~10mm) を微量、灰褐色砂 (φ1mm) を多量含む。
9	10YR2/3	黒褐色土	粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ1~10mm) を微量含む。	19	10YR2/1	黒色土	粘性やや強い。しまりやや強い。ローム (φ1~30mm) を中量、焼土 (φ1mm) を少量含む。
10	10YR2/2	黒褐色土	粘性やや弱い。しまりやや強い。ローム (φ1~5mm) を中量含む。	20	10YR2/3	黒褐色土	粘性やや強い。しまり強い。ローム (φ1mm) を微量、焼土 (φ1mm) を少量含む。
11	10YR2/2	黒褐色土	粘性やや弱い。しまり強い。ローム (φ1mm) を微量含む。	21	7.5YR3/1	黒褐色土	粘性弱い。しまり強い。ローム (φ1~2mm) を少量、焼土 (φ1~10mm) を多量、炭化物 (φ1~2mm) を少量含む。

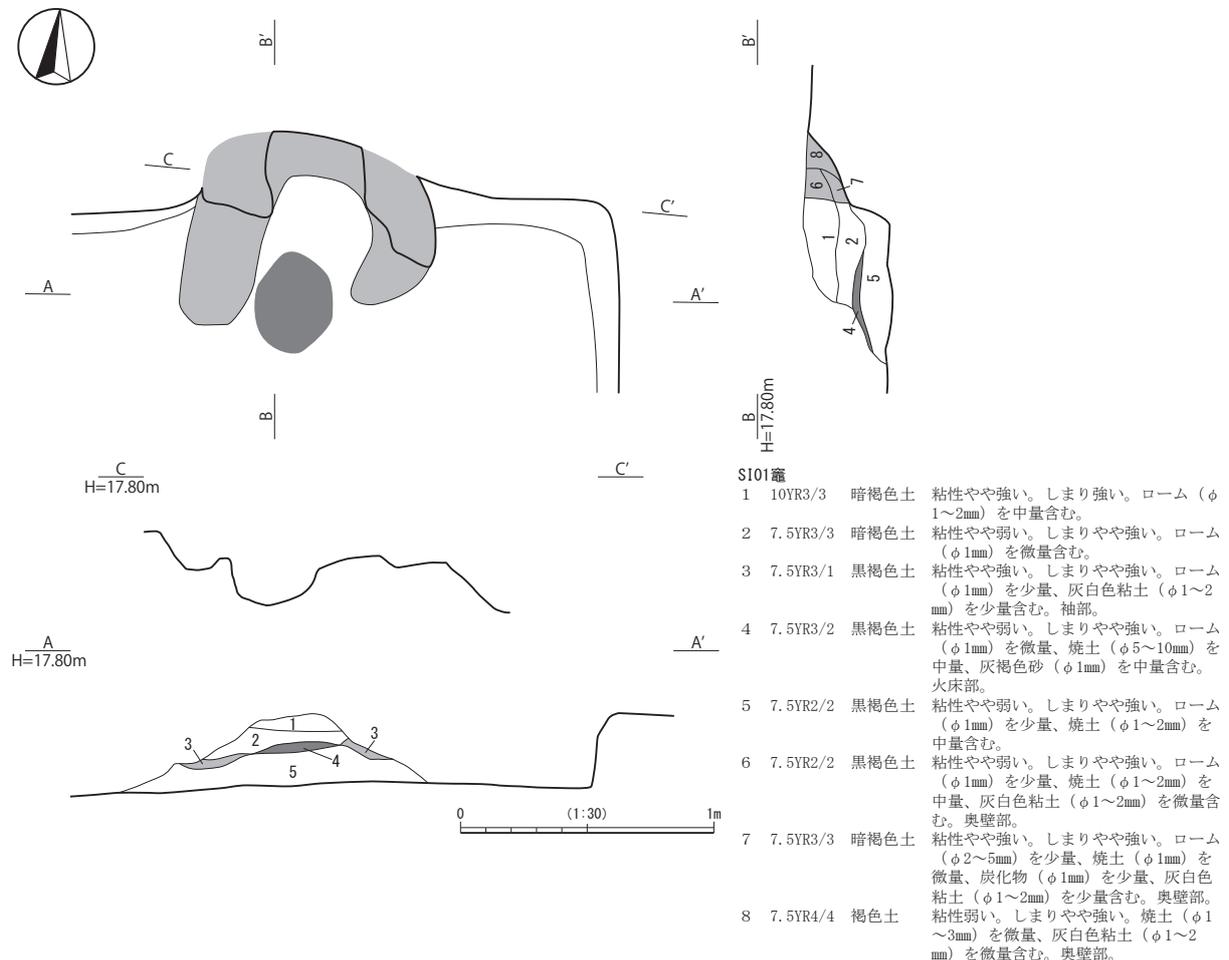
第 36 図 SI01 平・断面図



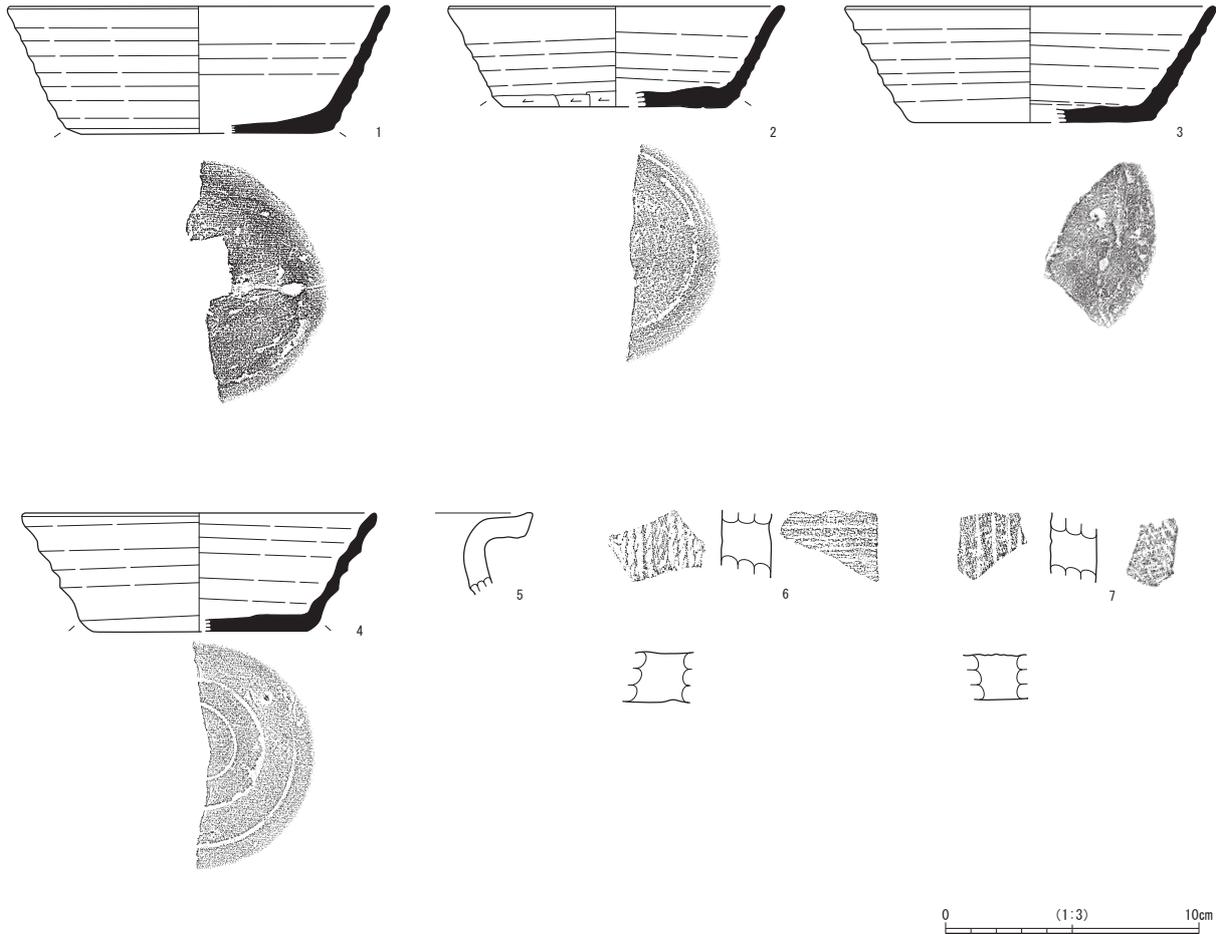
第37図 SI01小穴 平・断面図

隅の一部に壁周溝が廻り、深さは床面下0.08m内外を測る。やや凹凸が目立つ。掘方は床面下0.10mに達する。出土遺物の様相から、概ね奈良時代の遺構と推定される。

SI02からは、縄文土器・土師器・須恵器・土製品・瓦等、計64点の遺物が出土しており、8点を掲載し、7点を図化した。5は土師器の甕で、器面の摩耗剥落が顕著に認められる。1~4は須恵器の坏で、いずれもロクロ整形、底部にヘラケズリが施されている。胎土には海綿状骨針・小礫を含む。6・7は平瓦で、いずれも一枚造り、凹面に布目痕跡、凸面には長縄叩き痕が認められる。いずれも8世紀第2四半期の遺物と考えられる。8は混入したと推定される縄文土器の深鉢で、縄文時代中期の所産と考えられる。(根田)



第38図 SI01竈 平・断面図



第 39 図 SI01 出土遺物

第 14 表 SI01 出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 位置	種別	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
39-1 8-4-1	C区 SI01	須恵器	坏	口縁～ 底部	50%	(15.0)	(9.3)	5.0	ロクロ整形，底部手持ちへ ラケズリ。外面煤付着。	黒色粒・白色粒・ 小礫	良好	外面：黄灰色 (2.5YR7/2) 内面：灰白色 (2.5Y7/1)	
39-2 8-4-2	C区 SI01	須恵器	坏	口縁～ 底部	40%	(13.0)	(8.7)	4.0	ロクロ整形，底部全面回転 ヘラケズリ後，ナデ。外面 煤付着。	黒色粒・白色粒・ 海綿状骨針・小礫	良好	内外面：褐灰色 (7.5YR6/1)	木葉下窯跡群 産。一部赤茶 色
39-3 8-4-3	C区 SI01	須恵器	坏	口縁～ 底部	30%	(14.4)	(9.4)	4.6	ロクロ整形，底部手持ちへ ラケズリ。	黒色粒・白色粒・ 砂粒・小礫	良	内外面：褐灰色 (2.5Y8/2)	摩耗剥落
39-4 8-4-4	C区 SI01	須恵器	坏	口縁～ 底部	40%	(13.8)	(8.5)	4.7	ロクロ整形，底部全面回転 ヘラケズリ後ナデ。内面煤 付着。	黒色粒・白色粒・ 海綿状骨針・小礫	良好	内外面：灰色 (5Y5/1)	稜が強い
39-5 8-4-5	C区 SI01	土師器	甕	口縁部	10% 未満	—	—	<3.3>	輪積み成形，口縁側面ハケ， 内外面ナデ，摘み出し口縁。	金雲母・白雲母・ 黒色粒・白色粒・ 砂粒	良	内外面：橙色 (5YR6/6)	摩耗剥落 白雲母多量
39-6 8-4-6	C区 SI01	瓦	平瓦	体部	10% 未満	長径 4.3	短径 3.2	厚さ 2.0	一枚造り平瓦，凸面長縄叩 き，凹面布目あり。	黒色粒・白色粒	良好	上面：灰白色 (2.5Y8/1) 下面：灰白色 (2.5Y8/2)	小片
39-7 8-4-7	C区 SI01	瓦	平瓦	体部	10% 未満	—	—	厚さ 1.8	一枚造り平瓦，凸長縄叩き， 凹面布目あり。	黒色粒・白色粒	良好	上面：浅黄色 (2.5Y8/3) 下面：灰白色 (2.5Y8/2)	小片，摩耗す る
— 8-4-8	C区 SI01	縄文 土器	深鉢	胴部	10% 未満	—	—	<2.0>	体部に単節 RL 縄文。	白雲母・黒雲母・ 黒色粒・白色粒	良	外面：にぶい橙色 (7.5YR7/3) 内面：橙色 (7.5YR7/6)	縄文中期

第 15 表 出土遺物集計表 (1)

重量単位:(g)

出土位置		SI01		SI02		SI03		SI04		SI05		SD02	
		点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
縄文土器	深鉢	1	6.7			1	21.4			1	8.6		
	坏	1	4.2			1	4.6			9	40.2	1	1.4
土師器	坏(内黒)									26	792.5	6	10.4
	高台付坏・埴									1	39.4		
	高台付皿									1	93.7		
	盤												
	蓋	1	3.7										
	甕	43	825.4	47	663.4	20	247.7	36	1509.1	413	4358.9	77	398.0
	甗												
須恵器	鉢												
	坏	11	451.7	3	7.3	2	38.0	11	339.9	111	1066.3	35	188.0
	高台付坏・埴					2	11.0	1	8.6	7	100.5	1	10.5
	高台付皿									1	13.1	1	22.2
	盤	1	20.0					1	37.8	4	22.4	1	10.7
	高台付盤							1	52.0				
	蓋					2	99.0	1	2.4	10	269.7		
	甗												
瓦	(平瓦)	2	67.9										
	(支脚)			2	34.7			1	18.0	1	22.0	2	143.0
石器	(敲石)							2	1657.0				
	(剥片)												
石製品	(紡錘車)									1	17.8		
金属製品	(鉄滓)			1	11.0								
その他	(焙烙)												
	(陶磁器)											1	6.0
	(礫)	2	23.1					2	363.0	1	74.5	2	12.3
	(炭化物)												
総計		64	1491.9	53	716.4	28	421.7	58	4006.2	608	7356.9	137	1039.1

第 16 表 出土遺物集計表 (2)

重量単位:(g)

出土位置		SK02		SK07		SK08		SK09		SK10		SK11	
		点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
縄文土器	深鉢							1	7.0				
土師器	坏												
	坏(内黒)												
	高台付坏・埴												
	高台付皿												
	盤												
	蓋												
	甕			1	6.6	2	45.8			3	12.8	1	6.9
須恵器	甗												
	鉢												
	坏	1	2.1	1	4.5	2	9.3						
	高台付坏・埴												
	高台付皿												
	盤												
	高台付盤												
瓦	(平瓦)												
	(支脚)												
石器	(敲石)												
	(剥片)												
石製品	(紡錘車)												
金属製品	(鉄滓)												
その他	(焙烙)												
	(陶磁器)												
	(礫)												
	(炭化物)												
総計		1	2.1	2	11.1	5	69.7	1	7	3	12.8	1	6.9

第 17 表 出土遺物集計表 (3)

重量単位:(g)

出土位置		SK12		P02		P05		P07		P12		P13	
		点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
縄文土器	深鉢												
	坏												
	坏(内黒)	1	1.8										
	高台付坏・埴												
	高台付皿												
	盤												
	蓋												
	甕	4	37.2			1	5.2			3	37.8	1	2.2
	甗												
	鉢												
	坏	1	9.0	1	3.0					2	10.2		
	高台付坏												
	高台付皿												
	盤												
	高台付盤												
	蓋												
	甗												
	甕・鉢類												
	壺・瓶類												
瓦	(平瓦)												
土製品	(支脚)												
石器	(敲石)												
	(剥片)												
石製品	(紡錘車)												
金属製品	(鉄滓)												
	(焙烙)												
	(陶磁器)												
	(礫)												
	(炭化物)							1	3.6				
総計		6	48	1	3	1	5.2	1	3.6	5	48	1	2.2

第 18 表 出土遺物集計表 (4)

重量単位:(g)

出土位置		P14		P20		A区遺構外		B区遺構外		総計	
		点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
縄文土器	深鉢							1	13.8	5	57.5
	坏									12	50.4
	坏(内黒)							4	17.8	37	822.5
	高台付坏・埴									1	39.4
	高台付皿									1	93.7
	盤									0	0.0
	蓋									1	3.7
	甕	1	8.3	1	21.9	5	85.2	39	305.4	698	8577.8
	甗									0	0.0
	鉢									0	0.0
	坏	1	4.0			1	23.0	24	259.3	206	2406.6
	高台付坏					2	20.9	1	16.0	14	167.5
	高台付皿									2	35.3
	盤									7	292.5
	高台付盤									1	52.0
	蓋							6	86.4	19	457.5
	甗					1	26.0			1	26.0
	甕・鉢類					1	25.0	6	162.5	38	558.3
	壺・瓶類					1	24.0			7	256.0
瓦	(平瓦)									2	67.9
土製品	(支脚)									6	217.7
石器	(敲石)									2	1657.0
	(剥片)									0	0.0
石製品	(紡錘車)									1	17.8
金属製品	(鉄滓)									1	11.0
	(焙烙)					1	34.0			1	34.0
	(陶磁器)					1	7.6			2	13.6
	(礫)									7	472.9
	(炭化物)									1	3.6
総計		2	12.3	1	21.9	12	221.2	81	861.2	1073	16388.6

第4章 小原遺跡出土の墨書土器について

大東文化大学教授
宮瀧 交二

SI05 - 14 (第24図14) の墨書について

1文字目は「向」、2文字目は左側が「王」偏（「王」偏は、本来は「玉」偏）であることが明確である。その右側の旁（つくり）は不明瞭であり「見」のようにも見える（その場合には「現」となる）が、最終画を大きく右に払うところから「朱」と判断した。従って2文字目は「珠」であると考え、本墨書は「向珠」と読んでおきたい。

この「向珠」の意味するところは容易には判然としないが、「珠」は「玉」に通じるものであり、今日、「向珠（玉）」といえは、曹洞宗の僧侶・門徒が用いる数珠を構成する諸珠（玉）[主珠（玉）108珠（玉）、親珠（玉）2珠（玉）、四天珠（玉）4珠（玉）]のうち、房（ふさ）が付く親珠（玉）に対して、その反対側に位置する房の付かない親珠（玉）が「向珠（玉）」と呼ばれていることに注目しておきたい（註1）。言うまでもなく曹洞宗は道元が鎌倉時代に中国から将来したものであり、当該墨書土器に見える「向珠」の語が、後の曹洞宗の数珠の部分名称に連なるものであると安易に結論付けることは出来ない。

しかしながら、既に指摘されているように、関東地方の奈良・平安時代集落遺跡から出土する墨書土器は、郡家や国衙といった古代の地方官衙から多く出土する官職・施設名等を記した墨書土器とは異なり、人々の信仰や呪（まじな）い等に関与するものが多く、明らかに仏教との関わりで記されたものも少なくない。千葉県や茨城県の古代集落遺跡からは「弘貫」や「案豊」といった古代村落を遊行する僧侶名を記したとみられる墨書土器も出土しており（註2）、本墨書土器もまた、曹洞宗の数珠の部分名称と直接に結び付けることは出来ないが、「珠（数珠）に向かう」すなわち仏教信仰に向き合うという意味を持つ語であるとみておくことは可能であろう。更に大胆に述べるならば、前掲の「弘貫」や「案豊」と同様、「向珠」もまた僧侶名である可能性も指摘しておきたい。

SI05 - 1 (第24図1) の墨書について

1文字目を「真」とすることに異論はないであろう。2文字目は「人（ひとやね）」の下に「巾」を記しているようであり、『五體字類』を見ると「布」の書例にこれと同様のものがあるようである（註3）。本墨書は「真布」と読んでおきたい。

この「真布」の意味するところも容易には判然としないが、「まほ」または「ましき」と読んだ場合には人名である可能性が浮上する。新元号「令和」が、『万葉集』巻五の「梅花の歌三十二首」の序文中の一節「初春の令月にして、気淑く風和ぎ」から採られたことは記憶に新しいが、この32首のうち18番目の歌の作者として登場しているのが「神司荒氏稲布（いなしき）」である。「荒氏」は「荒木氏」または「荒田氏」の略称とみられて

いるが（註4），ここで「稲布」が「神司」すなわち大宰府に出仕する神官であった点は重要である。「○布」という名は，神事に携わる人物に多い名であった可能性が高く（織物としての布は神に奉る神饌の代表的な品である），本墨書土器に見える「真布」もまた，そのような人物であった可能性が高いのではないだろうか。関東地方の奈良・平安時代集落遺跡から出土する墨書土器には，人々の信仰や呪（まじな）い等に関与するものが多いことは先に述べたが，「真布」もまた，この範疇で理解することが出来よう。今後の事例の増加を俟ちたいところである。



第40図 墨書土器

註

1. 「曹洞宗お数珠の選び方と持ち方と豆知識 数珠 京念珠 専門店 はな花」<https://www.rakuten.ne.jp/gold/nenju-hana/mamechishiki/soutou/>（2020.03.29 確認）
2. 宮瀧交二「コラム 村を廻る僧」（上原真人ほか編『列島の古代史 ひと・もの・こと 3 社会集団と政治組織』岩波書店 2005年）
3. 高田竹山『五體字類』西東書房 1916年
4. 高木市之助・他校注『日本古典文学大系5 万葉集二』岩波書店 1959年。

第5章 総括

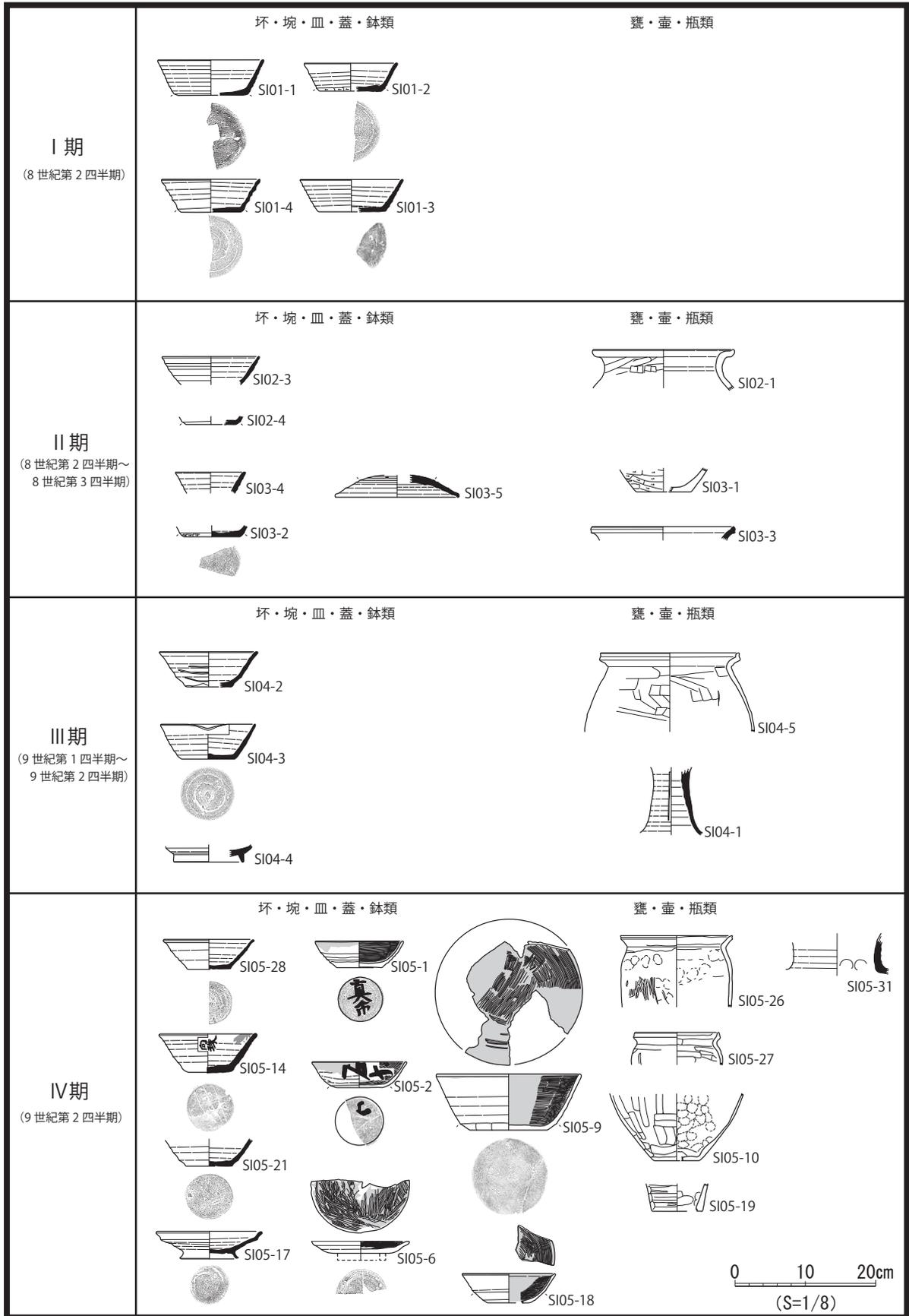
今回が第2次となる小原遺跡第40地点の発掘調査を、1街区内に設定したA～D区の4調査区で実施した。各調査区は、概ね街区内の東西南北にそれぞれ位置しており、北をA区として時計回りにB区（東）、C区（南）、D区（西）とした。検出遺構は、掘立柱建物跡1棟、竪穴建物跡5軒、溝跡2条、土坑12基、小穴25基である。以下にその概要を述べる。

A区では土坑12基（SK01～12）、小穴6基（P01～06）が検出され、土師器・須恵器を主体とする遺物が35点出土した。遺物を伴う遺構はSK07～12、P02・05である。出土遺物の大半が小片である点と、遺構の平・断面及び覆土の様相から、A区周辺は、古代の集落跡との関連が薄い区域と推定される。また、特徴的な出土遺物としてはSK09出土の縄文土器片、遺構確認面出土の近世の内耳土器片が挙げられるが、両者と同時期の遺物の出土は僅かである。居住地としての土地利用がなかった一画と考えられる。

B区では、掘立柱建物跡1棟（SB01）、竪穴建物跡4軒（SI02～05）、溝跡1条（SD02）、小穴17基（P09～25）が検出され、土師器・須恵器を主体とする974点の遺物が出土した。遺物を伴う遺構は、SI02～05、SD02、P12～14・20だが、溝跡、土坑および小穴からの出土遺物は、いずれも竪穴建物跡から出土した遺物の帰属時期から大きく逸脱しない。また溝跡（SD02）は、SI04・05の両者を切っていることから、出土遺物の大半は、竪穴建物跡由来と推定される。検出した竪穴建物跡4軒の中で、SI02は他の3軒と主軸方向が異なり、SI03～05は、いずれも主軸方向が近い。SI03は遺構の大部分が調査区外であり、床面に達する攪乱を一部に受けている。SI04はSI05に切られており、新旧関係を有する。出土遺物は、SI02・SI03が8世紀第2四半期～第3四半期、SI04が9世紀第1四半期～第2四半期、SI05が9世紀第2四半期の所産と推定され、遺構の切り合い関係と併せて考えると、（新）SD02—SI05—SI04—SI02・SI03（旧）と推定されるが、SI04とSI05は、時期によっては各々並存していた可能性も考えられる。SB01の年代は不明だが、強いて言えばSD02に軸方向が近似することから、同じ土地区画に規制されている可能性が考えられる。中世以降の出土遺物が伴っていないことから、概ね9世紀第3四半期以降、中世以前の遺構と推定したい。

C区では当該期の遺構・遺物の検出はなかったが、D区の竪穴建物跡（SI01）からは、概ね8世紀第2四半期に収まる遺物が出土している。主軸方向はB区SI02に近い。B区SI04・05に先行し、SI02・03とは並存していた可能性が考えられる。

ここで出土遺物の組成および変遷について概観すると、8世紀第2四半期～第3四半期に位置付けられるSI01・SI02・SI03では、須恵器の坏の底部が幅広で浅身形であるのに対して、9世紀第1四半期以降に位置付けられるSI04・SI05では、底部が狭くなり、深身形の形状を呈している。全体にSI01～SI04では、須恵器の出土割合の増加が見られ、器種も漸増している様子が窺える。9世紀第2四半期に位置付けられるSI05では、須恵器の器種の増加に加え、内面黒色処理が施された土師器の割合が著しく増加している様子が認められる。内面黒色処理が施された土師器の各器種の増加は、須恵器の代替・補完品で

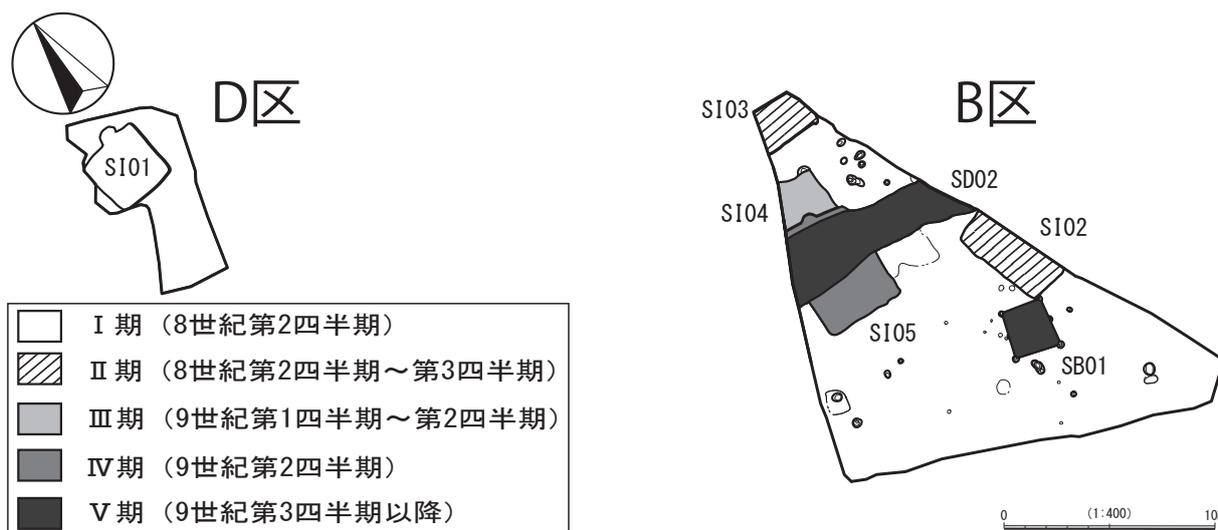


第41図 主な出土遺物の変遷

あると同時に、供膳形態の変化を示しているものと捉えることができよう。

特徴的な遺物として、SI05 から出土した内面黒色処理が施された鉢 (SI05-9) に注目してみたい。器形は須恵器および土師器の坏に類似するが、丁寧な調整がなされており、口径 20.6 cm・器高 8.0 cm と、他の坏・皿類に比して大振りな法量を呈している。類例としては、市内大鋸町遺跡や梶内遺跡、沢幡遺跡に出土例があり、この他にも笠間市寺上遺跡、茨城町木戸遺跡、稲敷市薬師後遺跡、石岡市宮部遺跡第 8 地点、古河市中内遺跡等で散見され、他地域でもさいたま市下野田稲荷原遺跡、熊谷市北島遺跡、八王子市多摩ニュータウン No. 436 遺跡等で出土例が見られる。8 世紀末から 10 世紀後半の間で、各々の年代観により報告されている事から、頻出はしないが、ある程度広範に亘って継続して使用された器種として把握される。本遺跡が立地する東茨城台地上の当該期の遺跡、および同時期の市内の各遺跡の類例の集成を俟たねば軽々には推断できないが、前述した内面黒色土器の傾向から推してみれば、前代における類似した法量の器種、例えば須恵器の鉢や盤の後継器種であり、且つ、後代の同様の器種の先行器種、例えば陶器や木器の鉢や大型の碗として想定してみたい。本稿では示唆するに留めるが、特徴的で特異な器種であり、ある程度の年代幅を有すると考えられる事から、画期の指標になり得る器種と思われる。

以上の点から、I 期 (SI01) → II 期 (SI02・SI03) → III 期 (SI04) → IV 期 (SI05) → V 期 (SB01・SD02) の変遷が想定されるが、土地利用では概ね I・II 期、III・IV 期、V 期、即ち、8 世紀前葉～中葉、9 世紀前葉、9 世紀中葉以降に大別されると思われる。出土した供膳用・煮沸用土器からも、検出された竪穴建物跡は住居としての性格が認められる事から、本調査区の主体は、集落跡における各該期の居住地の一画であると推断される。本調査地点では、8 世紀前葉頃に居住地が形成され、8 世紀末頃に一時断絶するが、9 世紀前葉に再び住居が営まれ、それ以降は居住地としての土地利用が減退していく様相が認められる。



第 42 図 主要遺構変遷図

今次地点の調査概要は上記の通りだが、ここで既往の調査成果および周辺遺跡の調査成果を瞥見し併せて検討すると、本遺跡を含む周辺の奈良・平安時代の集落では、8 世紀後半から遺構・遺物が漸増し、9 世紀後半～末葉には盛期を迎え、それ以降は漸減し散在化

していく傾向が認められる。本調査地点も軌を一にするものと推測され、律令体制下の社会変化を反映しているものとして理解される。出土遺物に関しても、墨書土器の出土量が9世紀代に増加しており、前章で宮瀧氏から指摘のあった、信仰や呪いに関連する習俗の浸透を示しているものと捉えたい。今次調査で出土した墨書土器についても、同様に理解されるものと思われる。付言すれば、SI05から出土した「向珠」の墨書が記された須恵器(SI05-14)の口縁部内側には油煙と思われる煤が付着しており、灯明具として使用された可能性が高い事を指摘しておきたい。なお管見の限りでは、近隣の梶内遺跡および沢幡遺跡から「珠」「大珠」「四珠」「七珠」「柒珠」「廿珠」「向家」「日向家」銘の墨書土器が出土している。

ここでは本遺跡および台地上の当該期集落跡について、現状での概観を述べるに止まったが、現在、本地点を含む小原遺跡の調査成果ならびに隣接する東前原遺跡の調査成果の蓄積が増加してきている。それらを総合・再検討し、より広域における歴史像を再構成することが今後の課題となろう。(根田)

【引用・参考文献】

- 伊東重敏 1976 『大六天古墳(森戸古墳群第12号墳)』 常澄村教育委員会
 中山信名 1979 『新編常陸国誌』 宮崎報恩会
 井上義安 1985 『水戸市下畑遺跡』 水戸市教育委員会
 井上義安ほか 1988 『水戸市大鋸町遺跡』 水戸市大鋸遺跡発掘調査会
 常澄村史編さん委員会 1989 『常澄村史』 茨城県常澄村
 大屋道則 1989 「相模型環の成立過程—調整・整形手法の検討から—」『土曜考古』第14号 土曜考古学研究会
 浅井哲也 1992 「茨城県内における奈良・平安時代の土器(Ⅰ)」『研究ノート』創刊号 財団法人茨城県教育財団
 1993 「茨城県内における奈良・平安時代の土器(Ⅱ)」『研究ノート』第2号 財団法人茨城県教育財団
 梶山雅彦 1993 『一般国道6号東水戸道路改築工事内埋蔵文化財調査報告Ⅰ』 財団法人茨城県教育財団
 井上義安 1994 『水戸市大串遺跡』 水戸市教育委員会
 1995 『水戸市北屋敷古墳』 水戸市教育委員会
 佐々木義則 1995 「木葉下窯跡群産環AⅠの変化について」『婆良岐考古』第17号 婆良岐考古同人会
 櫻村宣行 1995 『一般国道6号東水戸道路改築工事内埋蔵文化財調査報告Ⅱ』 財団法人茨城県教育財団
 井上義安・金子浩正 1996 『水戸市大串遺跡』 茨城県水戸市
 佐々木義則 1997 「木葉下窯跡群の須恵器生産—奈良時代前半を中心に—」『婆良岐考古』第19号 婆良岐考古同人会
 井上義安 1998 『伊豆屋敷跡確認調査報告書』 水戸市埋蔵文化財研究会
 川口武彦 2005 「水戸市入野町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第27号 婆良岐考古同人会
 2008 「水戸市百合丘町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第30号 婆良岐考古同人会
 日沖剛史・石丸 敦ほか 2006 『薄内遺跡(第1地点)』 水戸市教育委員会
 小川和博・大淵淳志ほか 2008 『大串遺跡(第7地点)』 水戸市教育委員会
 水戸市教育委員会 2010 『水戸の指定文化財』
 川口武彦・色川順子ほか 2011 『平成20年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』 水戸市教育委員会
 賀来孝代・太田有里乃ほか 2015 『小原遺跡(第3地点)』 水戸市教育委員会
 米川暢敬・太田有里乃ほか 2015 『東前原遺跡(第3地点第2次)』 水戸市教育委員会
 米川暢敬・高野浩之 2016 『散野遺跡(第1地点)』 水戸市教育委員会
 米川暢敬・高野浩之ほか 2016 『東前原遺跡(第7地点第2次)』 水戸市教育委員会
 米川暢敬・丸山優香里ほか 2016 『東前原遺跡(第8地点第3次)』 水戸市教育委員会
 米川暢敬・斎藤 洋ほか 2017 『小原遺跡(第16地点)』 水戸市教育委員会
 米川暢敬・高野浩之ほか 2017 『東前原遺跡(第8地点第8次)』 水戸市教育委員会
 水野順敏・米川暢敬ほか 2017 『東前原遺跡(第10地点)』 水戸市教育委員会
 福田健司 2017 『土器編年と集落構造』 ニューサイエンス社
 間宮正光・関口慶久ほか 2018 『遠台遺跡(第18地点4次)・八幡神社周辺古墳群(第1地点第3次)』 水戸市教育委員会
 辻 弘和・新垣清貴ほか 2019 『東前原遺跡(第14地点第2次・第15地点第3次)』 水戸市教育委員会
 岩崎岳彦・宅間清公・遠竹陽一郎 2019 『尻内遺跡2・中内遺跡・前野東遺跡』 古河市教育委員会・株式会社東京航業研究所
 渡邊理伊知 2019 「武蔵国からみた黒色土器の消長と展開」『研究紀要』第33号 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財事業団
 新垣清貴・土生朗治ほか 2020 『東前原遺跡(第17地点第2次)』 水戸市教育委員会

写 真 图 版



1-1 調査区遠景（南西から 手前はB区）



1-2 調査区全景（上が北）-合成写真

図版 2



2-1 A区全景 (北西から)



2-2 B区全景 (北から)



3-1 SB01 全景 (西から)



3-2 SI02 断面 (南西から)



3-3 SI02 完掘 (西から)



3-4 SI02 掘方 (西から)



3-5 SI03 完掘 (南西から)



3-6 SI03 掘方 (南から)

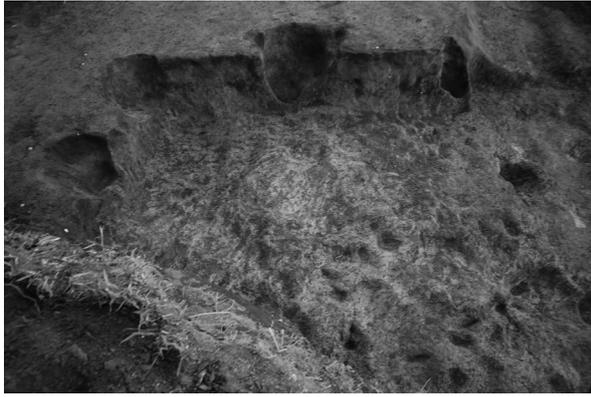


3-7 SI04 竈 (東から)



3-8 SI04 竈断面 (東から)

図版 4



4-1 SI04 掘方 (西から)



4-2 SI05 床面遺物出土 (南東から)



4-3 SI05 竈 (東から)



4-4 SI05 完掘 (南から)



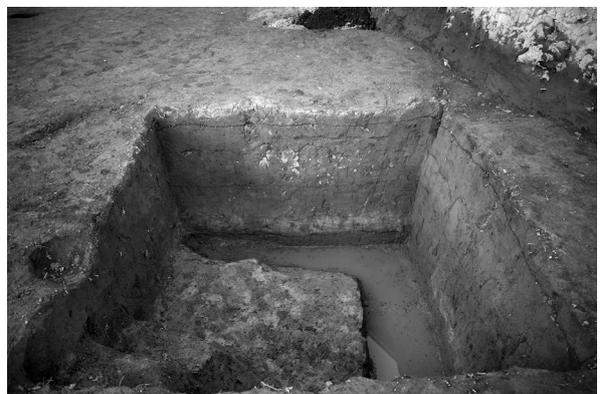
4-5 SD02 遺物出土 (東から)



4-6 SD02 完掘 (東から)



4-7 SI04・05 完掘 (南から)



4-8 TP1 (南から)

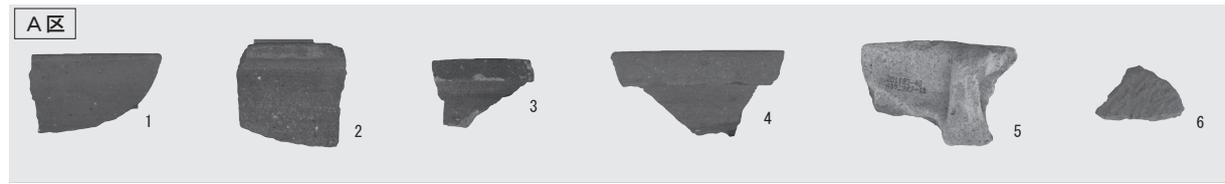


5-1 C区全景（南東から）



5-2 SI01 全景（南から）

图版 6



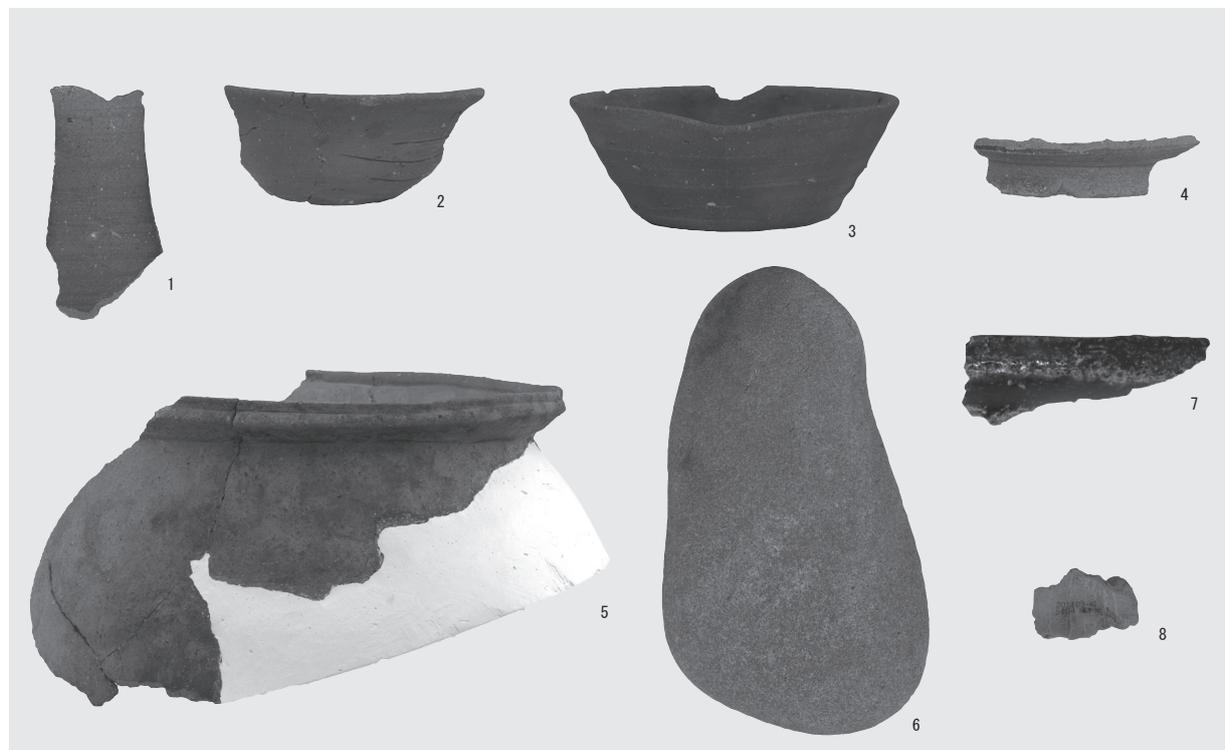
6-1 SK09·11·12·A区遺構外出土遺物



6-2 SI02 出土遺物



6-3 SI03 出土遺物

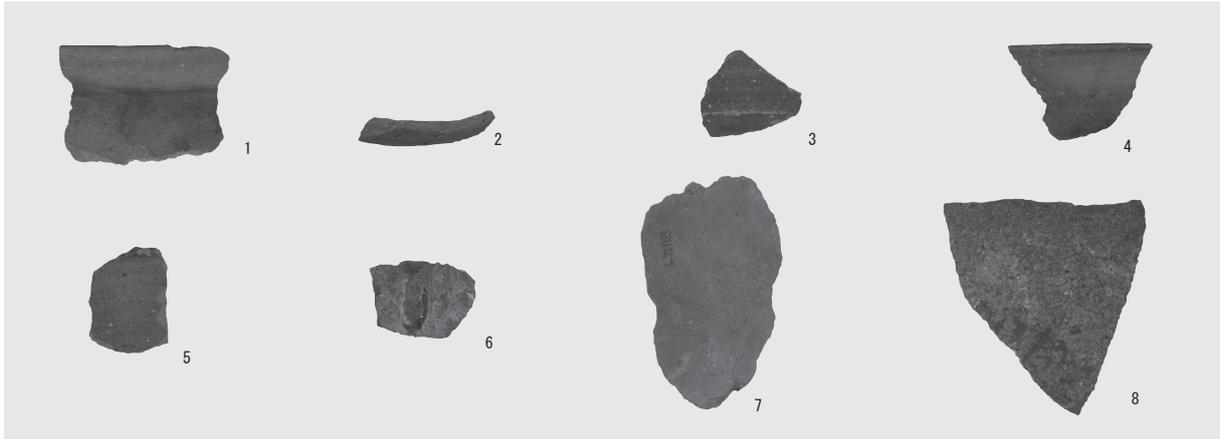


6-4 SI04 出土遺物



7-1 SI05 出土遺物

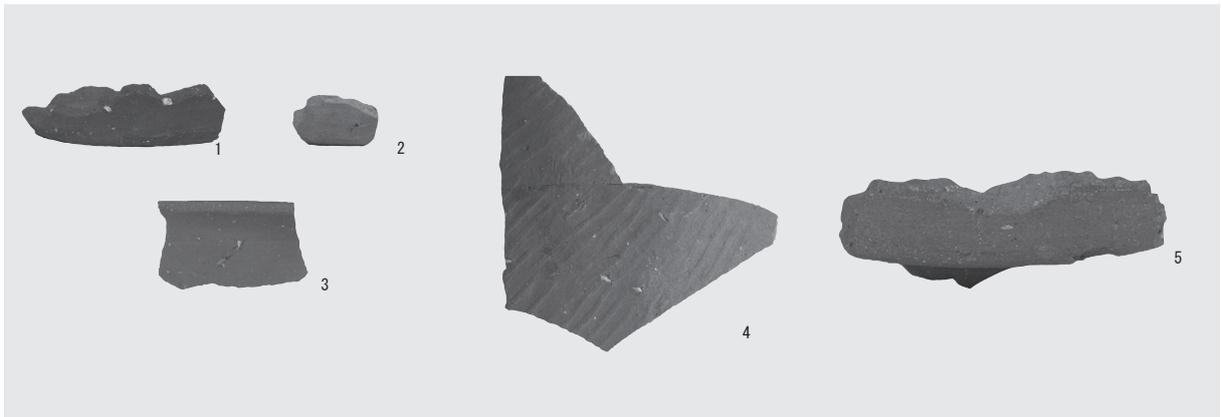
图版 8



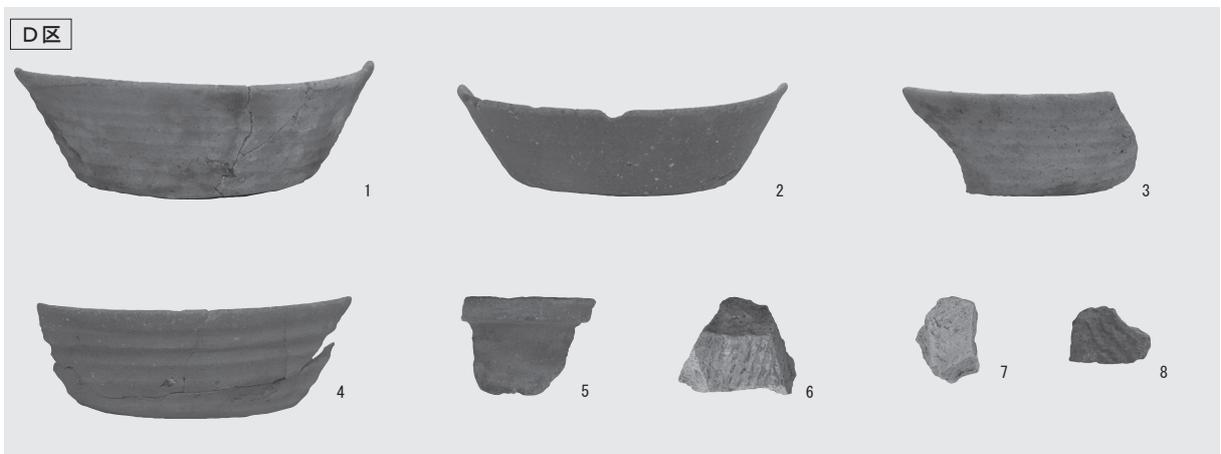
8-1 SD02 出土遺物



8-2 B区小穴出土遺物



8-3 B区遺構外出土遺物



8-4 SI01 出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	こはらいせき (だい40ちてんだい2じ)							
書名	小原遺跡 (第40地点第2次)							
副書名	区画道路6-51号線道路改良及び造成並びに流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告 第120集							
編集者名	根田 洋平							
著者名	根田 洋平・新垣 清貴							
編集機関	株式会社 東京航業研究所							
所在地	〒350-0855 埼玉県川越市大字伊佐沼28番1 ☎049-229-5771							
発行年月日	2020 (令和2) 年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
こはらいせき 小原遺跡	みとしとうまえちょう 水戸市東前町 1034番3他	08201	183	36° 20' 13"	140° 31' 34"	2019.9.27 ～ 2019.11.19	332.61 m ²	土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
小原遺跡 (第40地点 第2次)	集落跡	奈良・平安時代	竪穴建物跡, 掘立 柱建物跡, 溝跡, 土坑, 小穴		土器, 土師器, 須恵器, 陶磁器, 土製品, 石器, 石製品, 鉾滓ほか	奈良・平安時代の竪穴建物跡5 軒と, 土師器・須恵器・瓦等を検 出した。墨書文字が認められる土 師器・須恵器や, 内面黒色処理が 施された土師器の坏や皿など, 8 ～9世紀代の集落遺跡に関する良 好な資料を得ることができた。		

項目	遺物の取り扱い
水洗い	・すべて行った。
注記	・注記マシンと手書きによる。 例) 201183-40-SI05 カマド - No.8
接合	・接合可能な出土遺物は全て接合した。
実測	・遺物実測図は報告書掲載分についてのみ作成した。
台帳	・遺物台帳, 図面台帳, 写真台帳があり, 検索が可能なように作成している。合計1冊 (綴り)。
遺物保管方法	・出土遺物は, 報告書掲載遺物と非掲載遺物に分け, 遺物収納箱に納めた。各箱には収納内容を明記している。なお非掲載遺物については, 種別毎に分類し, 収納した。

水戸市埋蔵文化財調査報告 第120集

小原遺跡

(第40地点第2次)

— 区画道路6-51号線道路改良及び造成並びに
流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

印刷 令和2年3月31日

発行 令和2年3月31日

編集 株式会社東京航業研究所

発行 水戸市教育委員会

印刷 関東図書株式会社

〒336-0021

埼玉県さいたま市南区別所3-1-10

TEL. 048-862-2901